

置県130年記念
埋蔵文化財資料活用推進事業報告書

延岡市所在	じのうしへり 地蔵ヶ森遺跡	小林市所在	こばやししへり 神之原遺跡
門川町所在	もんかわまちしへり 枝遺跡	小林市所在	こばやししへり 前ノ原遺跡
日向市所在	ひゅうがまちしへり 高平城跡	高原町所在	たかひらまちしへり 大鹿倉遺跡
日向市所在	ひゅうがまちしへり 野首遺跡	高原町所在	たかひらまちしへり 大谷遺跡
高鍋町所在	たかなべまちしへり 大戸ノ口第3遺跡	高崎町所在	たかさきまちしへり 鳥越前遺跡
西都市所在	せいとししへり 諏訪遺跡	都城市所在	としろじしへり 妙見原第2遺跡
国富町所在	くにとみまちしへり 兎田遺跡	都城市所在	としろじしへり 倉内遺跡
国富町所在	くにとみまちしへり 上岩知野遺跡	都城市所在	としろじしへり 築池遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 竹之下遺跡	日南市所在	ひなみやまちしへり 楠木原遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 権現昔遺跡	日南市所在	ひなみやまちしへり 篠ヶ城遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 多宝寺遺跡	日南市所在	ひなみやまちしへり 坂ノ上遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 大淀3号墳	日南市所在	ひなみやまちしへり 前畠遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 青木遺跡	串間市所在	くしまじしへり 唐人町遺跡
小林市所在	こばやししへり 生駒遺跡	串間市所在	くしまじしへり 別府ノ木遺跡

2014

宮崎県埋蔵文化財センター

第 232 集 置県 130 年記念埋蔵文化財活用推進事業報告書

正 誤 表

訂正箇所	誤	正
本文 6 頁 第 16 図	IV～V 層攝別範囲の網掛けが左に約 2mm のズレ	PDF では正しい位置に修正済
本文 20 頁 第 34 図 26	周縁サイズが 1/4 と表記	周縁サイズは実際には 1/16 (ただし PDF では実測例を 1/4 に修正済)
本文 25 頁 第 36 図	「野首遺跡出土遺物実測図 (S=1/3)」	「野首遺跡出土遺物実測図 (S=1/3) ※ただし 23 は日知原 地陪投票品」
本文 29 頁 写真 8		PDF では上段左から下段右へ順に 1～9 の順を付与
本文 42 頁 第 51 図		4・5 は同一個体の可能性有り
本文 46 頁 第 54 図 15	上下方向が逆位置	PDF では上下反転した実測図に修正済
本文 49 頁 1. 概要 5・6 行目	「最上段はゴボウ作付け用のトレンチャーで…最下段は同じく…受けていた。中段の畠のみが…」	「最上段 (A 区) はゴボウ作付け用のトレンチャーで…最下段 (C 区) は同じく…受けていた。中段 (B 区) の畠のみが…」
本文 49 頁 3. 道構と遺物 5 行目	「土器は、縄文時代早期の中原式土器が 1 点。」	「土器は、縄文時代早期の中原式・轟 A 式土器が各 1 点。」
本文 50 頁 第 56 図		PDF では図中に下から A 区・B 区・C 区の文字を追加
本文 61 頁 3. 道構と遺物 1・5～6・ 11 行目	「壁穴建物」	「壁穴建物」
本文 62 頁 第 70 図	「壁穴建物」	「壁穴建物」
本文 70 頁 3. 道構と遺物 1・4・7 ～9 行目	「壁穴建物」	「壁穴建物」
本文 71 頁 第 79 図	「壁穴建物跡」	「壁穴建物跡」
本文 72 頁 3. 道構と遺物 1・2・4・ 6・9・10 行目	「壁穴建物」	「壁穴建物」
第 80 図		
本文 73 頁 第 81 図	「壁穴建物跡」	「壁穴建物跡」
本文 74 頁 第 82 図	「壁穴建物」	「壁穴建物」
本文 75 頁 1. 概要 7 行目	「壁穴建物跡」	「壁穴建物跡」
本文 76 頁 (3) 壁穴建物 1 行目	「壁穴建物」	「壁穴建物」
本文 86 頁 第 92 図	「壁穴建物」	「壁穴建物」
本文 87 頁 第 93 図	「壁穴建物」	「壁穴建物」
本文 89 頁 第 95 図 8	「鳥籠、九曜文」	「鬼瓦、九曜文」
本文 93・94 頁 第 99・ 100 図	7 と 40 が同一の実測図	40 を削除し、欠番
本文 113 頁 第 117 図	12・13 が同一の実測図	13 を削除し、欠番

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第232集
置県130年記念埋蔵文化財活用推進事業報告書
2014
正誤表(2)

訂正箇所	誤	正
本文117頁 9頁～18頁	本文中遺物番号1～37	54～90に対応
本文117頁 19頁	…溝縁皿(27～37)が…	…溝縁皿(80～83)が…

置県130年記念
埋蔵文化財資料活用推進事業報告書

延岡市所在	じのうしへり 地蔵ヶ森遺跡	小林市所在	こばやししへり 神之原遺跡
門川町所在	もんかわまちしへり 枝遺跡	小林市所在	こばやししへり 前ノ原遺跡
日向市所在	ひゅうがまちしへり 高平城跡	高原町所在	たかひらまちしへり 大鹿倉遺跡
日向市所在	ひゅうがまちしへり 野首遺跡	高原町所在	たかひらまちしへり 大谷遺跡
高鍋町所在	たかなべまちしへり 大戸ノ口第3遺跡	高崎町所在	たかさきまちしへり 鳥越前遺跡
西都市所在	せいとししへり 諏訪遺跡	都城市所在	としろじしへり 妙見原第2遺跡
国富町所在	くにとみまちしへり 兎田遺跡	都城市所在	としろじしへり 倉内遺跡
国富町所在	くにとみまちしへり 上岩知野遺跡	都城市所在	としろじしへり 築池遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 竹之下遺跡	日南市所在	ひなみやまちしへり 楠木原遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 権現昔遺跡	日南市所在	ひなみやまちしへり 篠ヶ城遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 多宝寺遺跡	日南市所在	ひなみやまちしへり 坂ノ上遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 大淀3号墳	日南市所在	ひなみやまちしへり 前畠遺跡
宮崎市所在	みやざしまちしへり 青木遺跡	串間市所在	くしまじしへり 唐人町遺跡
小林市所在	こばやししへり 生駒遺跡	串間市所在	くしまじしへり 別府ノ木遺跡

2014

宮崎県埋蔵文化財センター

序 文

宮崎県教育委員会では、平成 25 年度に置県 130 年記念事業として埋蔵文化財資料活用推進事業を行いました。

当事業は、宮崎県教育委員会がこれまでに実施した発掘調査において、諸般の事情により報告書作成が行われていなかった 28 遺跡の調査資料や出土遺物について今後の活用に向けた整理を行うというもので、本書は、これによって整理された各遺跡の調査成果についての報告です。

この報告書が、学術研究においてはもちろん、学校教育や生涯学習の場においても活用され、遺跡や文化財に関する理解を深める一助となることを期待いたします。

おわりに、ここに報告する遺跡の調査にあたり、御理解・御協力を賜った地元住民の方々をはじめ、各関係の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 向井大蔵

例 言

1. 本書は置県 130 年記念埋蔵文化財資料活用推進事業に伴って平成 25 年度に実施した埋蔵文化財整理作業の報告書である。
2. 整理作業の対象となった遺跡の発掘調査は、昭和 58 (1983) 年～平成 11 (1999) 年に至るまでの期間に複数の事業に伴って実施されたものである。
3. 整理作業および本書の執筆は、飯田博之 (第 II 章第 3 節)・沖野誠 (第 II 章第 1・8・13・19・27 節)・首付和樹 (第 I 章、第 II 章第 4・14～16・18 節)・長津宗重 (第 II 章第 9～12・25 節)・二方和也 (第 II 章第 3・11・25 節)・橋本英俊 (第 II 章第 6 節)・福田泰典 (第 II 章第 4・10～12・27 節)・松林豊樹 (第 II 章第 17・20～22 節)・松本茂 (第 II 章第 2・5・7・23・24・28 節)・吉本正典 (第 II 章第 26・27 節) を中心に行なった。編集は松本が行なった。
4. 本書に掲載した遺跡位置図には、原則として国土地理院発行の 1/25,000 地形図を原図として利用した。
5. 本書で用いた座標系について、座標値を示したものは日本測地系の数値を記しており、世界測地系への変換は行っていない。
6. 本書では遺構および火山灰の名称について、次の略号を用いる場合がある。堅穴建物跡 : SA、土坑 : SC、集石遺構 : SI、アカホヤ火山灰 : K-Ah、姶良 Tn 火山灰 : AT
7. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器類は 1/4 を基本とし、一部は 1/3 で掲載した。石器は小形品について 1/2、大形品について 1/3 を基本とした。
8. 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第 I 章 はじめに	1	第 16 節 前ノ原遺跡の調査の記録	54
第 II 章 調査の記録		第 17 節 大鹿倉遺跡の調査の記録	55
第 1 節 地蔵ヶ森遺跡の調査の記録	6	第 18 節 大谷遺跡の調査の記録	64
第 2 節 枝遺跡の調査の記録	15	第 19 節 烏越前遺跡の調査の記録	69
第 3 節 高平城跡の調査の記録	17	第 20 節 妙見原第 2 遺跡の調査の記録	70
第 4 節 野首遺跡の調査の記録	24	第 21 節 倉内遺跡の調査の記録	72
第 5 節 大戸ノ口第 3 遺跡の調査の記録	26	第 22 節 築池遺跡の調査の記録	75
第 6 節 調訪遺跡の調査の記録	27	第 23 節 楠木原遺跡の調査の記録	88
第 7 節 兎田遺跡の調査の記録	29	第 24 節 篠ヶ城跡遺跡の調査の記録	90
第 8 節 上岩臼野遺跡の調査の記録	30	第 25 節 坂ノ上遺跡の調査の記録	92
第 9 節 竹之下遺跡の調査の記録	32	第 26 節 前畠遺跡の調査の記録	99
第 10 節 権現呑遺跡の調査の記録	37	第 27 節 唐人町遺跡の調査の記録	110
第 11 節 多宝寺遺跡の調査の記録	40	第 28 節 別府ノ木遺跡の調査の記録	120
第 12 節 大淀 3 号墳の調査の記録	44		
第 13 節 青木遺跡の調査の記録	48		
第 14 節 生駒遺跡の調査の記録	49		
第 15 節 神の原遺跡の調査の記録	53		

第Ⅰ章 はじめに

宮崎県教育委員会では、昭和48（1973）年の文化課設置以来、九州縦貫自動車道、宮崎学園都市建設、ほ場整備事業等の大規模開発を含む各種開発事業に対して、昭和57（1982）年に埋蔵文化財センターを設立するなど調査体制の整備、確立を図ってきた。平成7年度からは東九州自動車道（大分県境～日南間）建設事業関連の発掘調査に着手し、19年の歳月を経て本年度（平成25年度）で発掘調査を完了する運びとなった。

この東九州自動車道関連の発掘調査開始以降、当センターでは、出土遺物・記録類に対し、現地調査の終了後に引き続き整理作業を行い、報告書を刊行して発掘調査を完結するという整理作業の流れを定着させてきた。

しかしながら、それ以前や過渡期にあたる時期には、相次ぐ現地調査によりやむをえず整理作業・報告書作成を先送りせざるを得なかった多くの出土遺物・記録類が生じることとなった。

そこで当センターでは、東九州自動車道関連発掘調査の完了に合わせて、特別展の開催などにより、これまで蓄積されてきた膨大な出土資料の本格的な活用に取り組むと同時に、緊急雇用創出事業臨時特例基金を活用して、先送りしてきた未整理状態の出土遺物や記録類の解消に向けた事業も行うこととした。

この事業により、28遺跡（出土遺物コンテナ数683箱）分の整理作業および調査概要報告を刊行し、限定的ではあるが出土遺物・記録類が公開され、今後の活用に供することが可能となった。



注記



復元

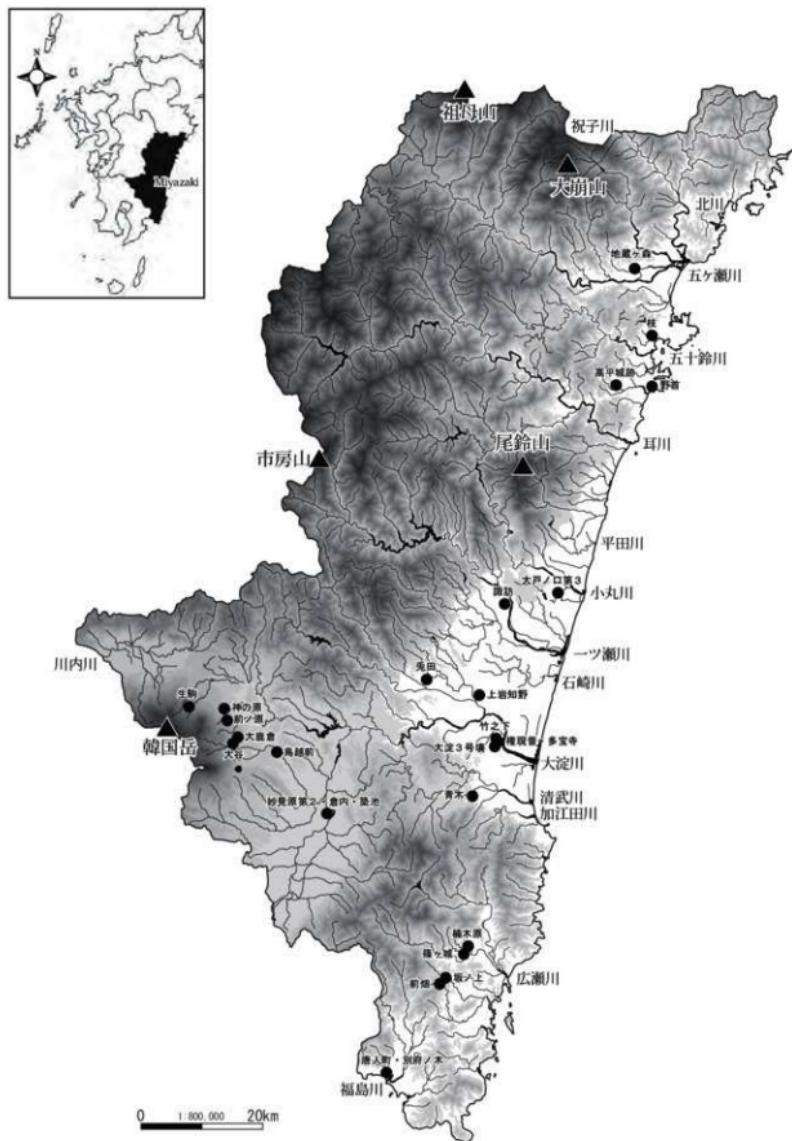


実測



拓本

写真1 整理作業の様子



第1図 各遺跡の位置



第2図 地蔵ヶ森遺跡の位置（延岡市、S=1/50,000）



第3図 枝遺跡の位置（門川町、S=1/50,000）



第4図 高平城跡および野間遺跡の位置とその周辺（日向市、S=1/50,000）



第5図 大戸ノ口第3遺跡の位置（高鍋町、1/50,000）



第6図 諏訪遺跡の位置（西都市、1/50,000）



第7図 兔田遺跡の位置（国富町、1/50,000）



第8図 青木遺跡の位置（田野町、1/50,000）



第10図 鳥越前遺跡の位置（高崎町、1/50,000）



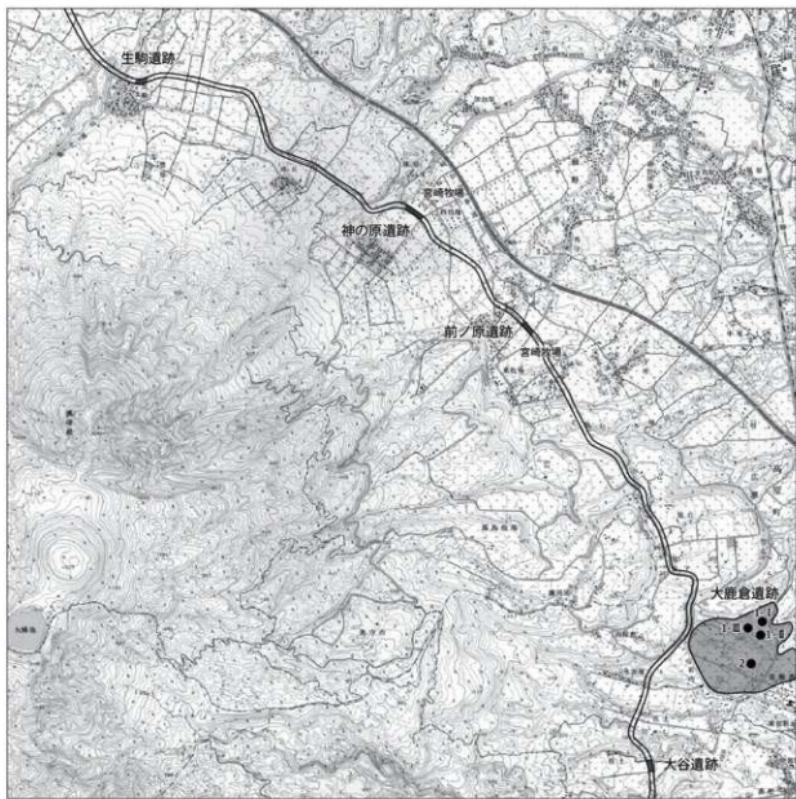
第9図 上岩知野遺跡（国富町）、竹之下・多宝寺・権現昔遺跡および大淀3号墳（宮崎市）の位置（1/50,000）



第11図 妙見原第2・倉内・糸池遺跡の位置（都城市、1/50,000）



第12図 橋木原・猿ヶ城遺跡の位置（日南市、1/50,000）



第13図 生駒・神の原・前ノ原遺跡（小林市）・大鹿倉・大谷遺跡（高原町）の位置（1/50,000）



第14図 坂ノ上・前畠遺跡の位置（日南市、1/50,000）



第15図 唐人町・別府ノ木遺跡の位置（串間市、1/50,000）

第Ⅱ章 調査の記録

第1節 地蔵ヶ森遺跡（じぞうがもり）

所在地：延岡市小峰町字後田 立地：丘陵上（標高 35 m）

調査原因：県営広域農道整備事業沿海北部

調査年月日：昭和 62（1987）年 8 月 3 日～9 月 9 日・昭和 63（1988）年 5 月 30 日～9 月 9 日

調査面積：900m²ほか 調査員：近藤 協・谷口武範

1. 概要

遺跡は、標高 831 m を測る行鷹山から、五ヶ瀬川に向かって南東に伸びる小高い山々の一小丘陵上に位置しており、平地との比高差は約 20 m ある。丘陵は舌状を呈した鶴田が複雑に入り組み、頂端部は平坦地となっている。近隣の遺跡には、約 200 m 北に近世陶磁窯として著名な小峰窯があり、1.5 km 南には国指定史跡南方古墳群がある。

2. 基本層序

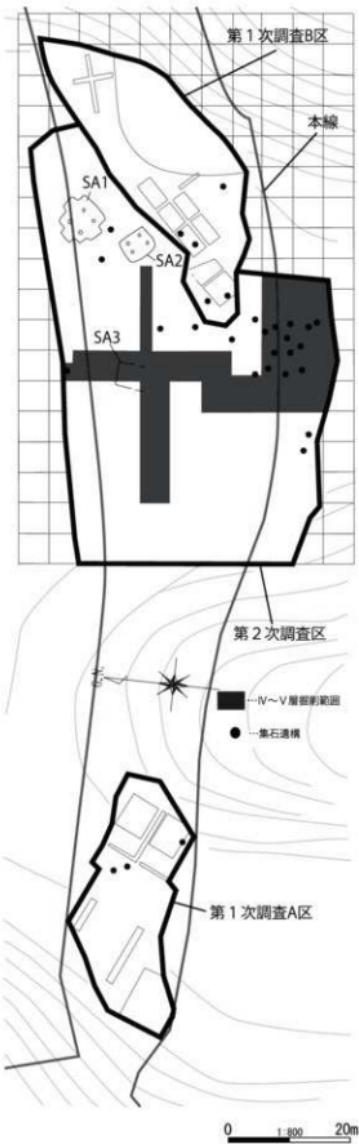
I 層：浅黄橙色土（7.5YR6/4（表土）、II 層：にぶい橙色土（7.5YR6/4）、III 層：褐色土（7.5YR4/3）、IV 層：にぶい褐色土（7.5YR5/4）、V 層：灰白色土（7.5YR8/1）地山

3. 遺構と遺物

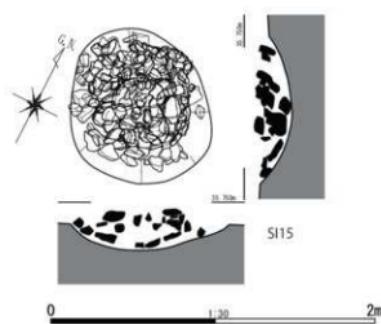
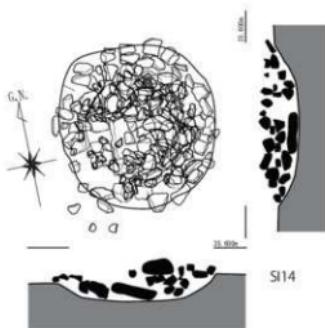
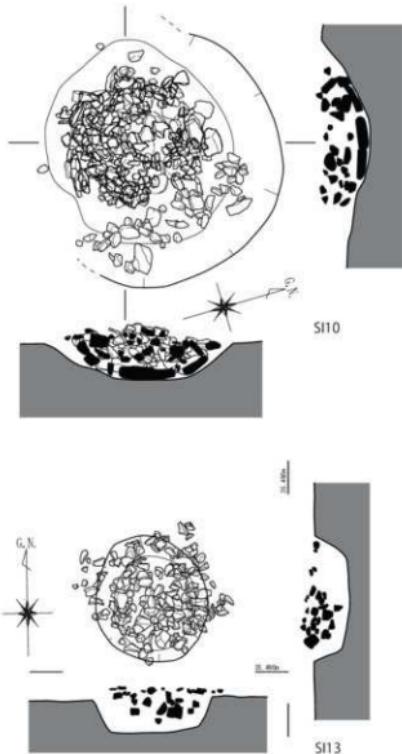
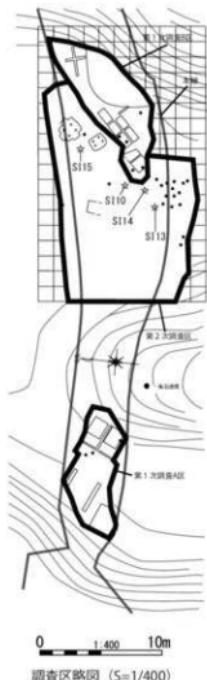
調査区は、西に第1次調査 A 区、谷を挟んで東に第1次調査 B 区を設定した。第2次調査区は、第1次調査 A・B 区に挟まれた未調査箇所に設定している。第1次調査では、縄文時代早期の集石遺構が 8 基検出された。第2次調査では、第 10 号集石を含む 22 基の集石遺構が確認された（第 16 図）。その内 13 基は III 層下位の掘削時に検出されたものもあり、一部は砾群の可能性も指摘しうる。第2次調査では調査区の 5 分の 1 程度旧石器時代の調査（IV 層）もおこなっている。（第 16 図アミかけ部）第1次調査及び第2次調査を含めた主要な遺構としては、縄文時代早期の集石遺構 30 基に加え、竪穴建物跡 3 軒（古墳時代前期）が検出された。遺物は、ナイフ形石器、角錐状石器に代表される後期旧石器時代の石器が出土しており、塞ノ神式、中原式土器等の縄文時代早期に加え一部縄文時代晚期も含まれる。

参考文献

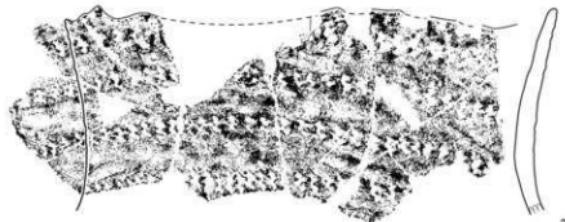
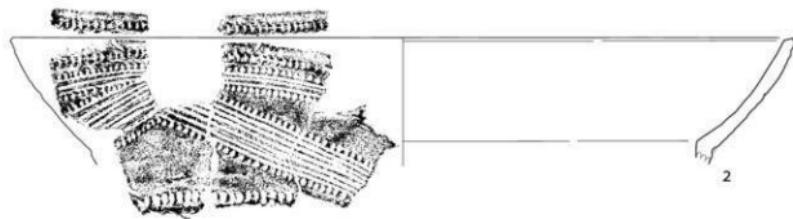
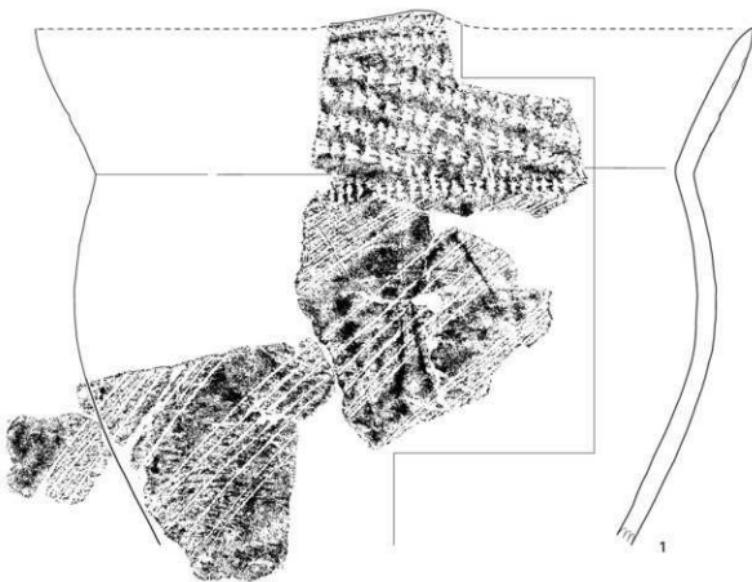
近藤 協 1988 年「地蔵ヶ森遺跡」宮崎県文化財調査報告書第 31 集



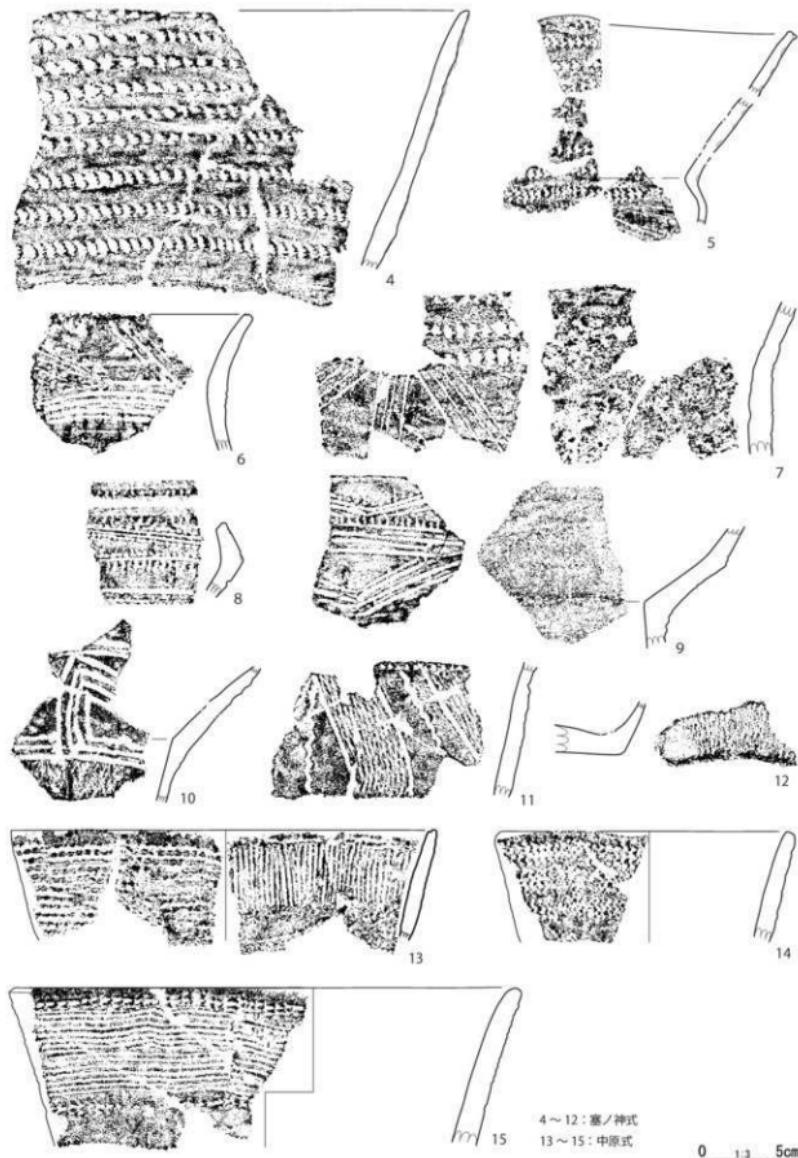
第 16 図 地蔵ヶ森遺跡遺構配置図 (S=1/800)



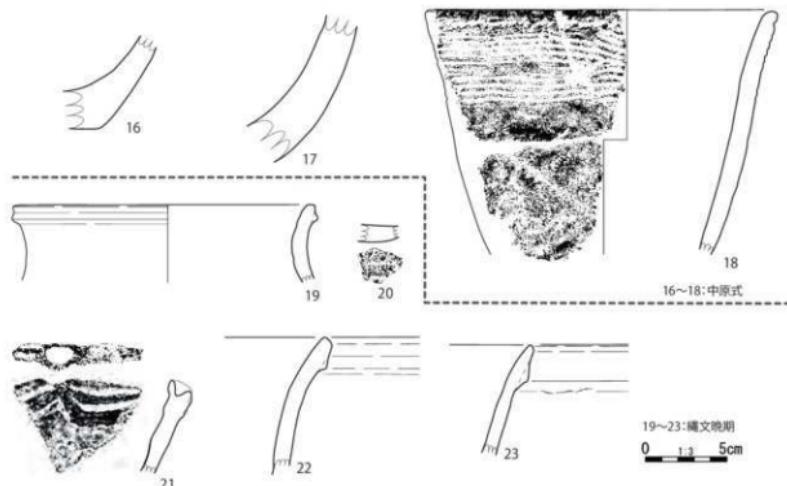
第 17 図 地蔵ヶ森遺跡集石遺構実測図 (S=1/30)



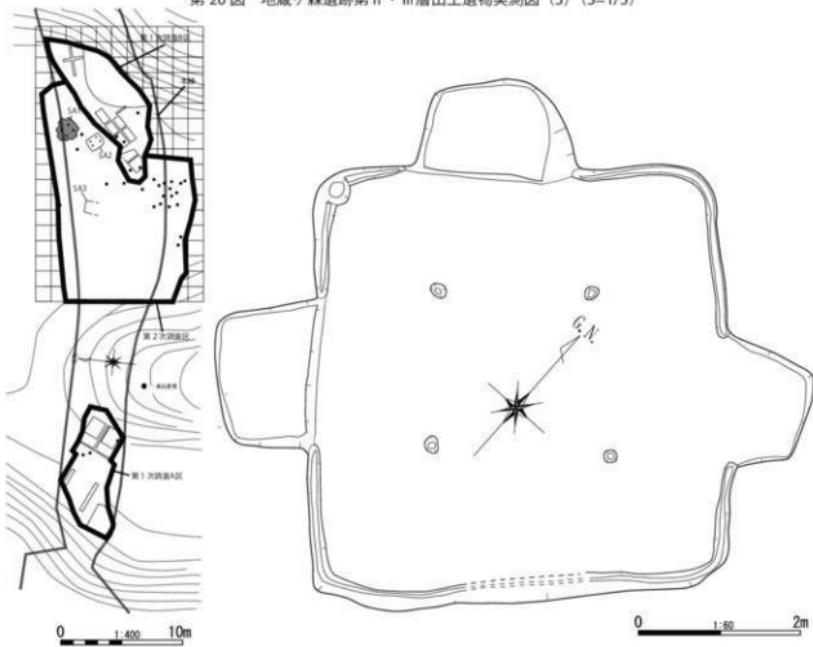
第 18 図 地蔵ヶ森遺跡第 II・III 層出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



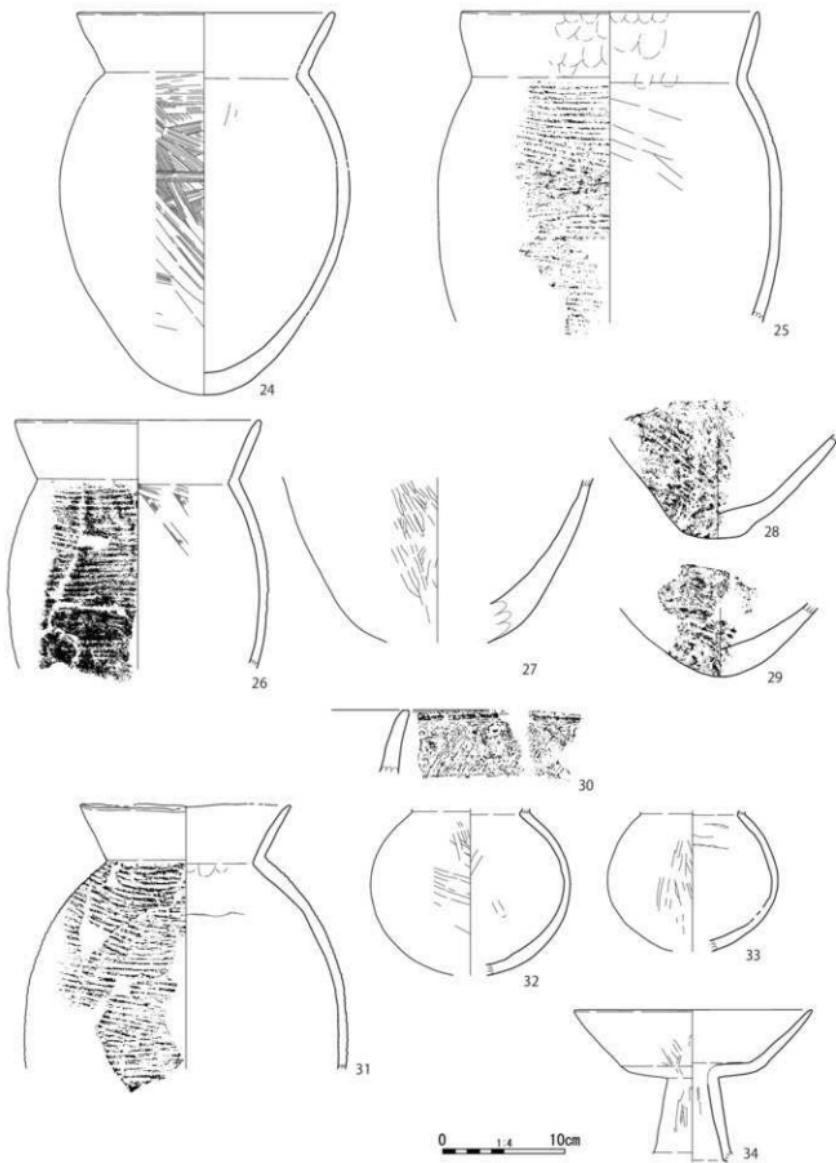
第19図 地藏ヶ森遺跡第II・III層出土遺物実測図(2) (S=1/3)



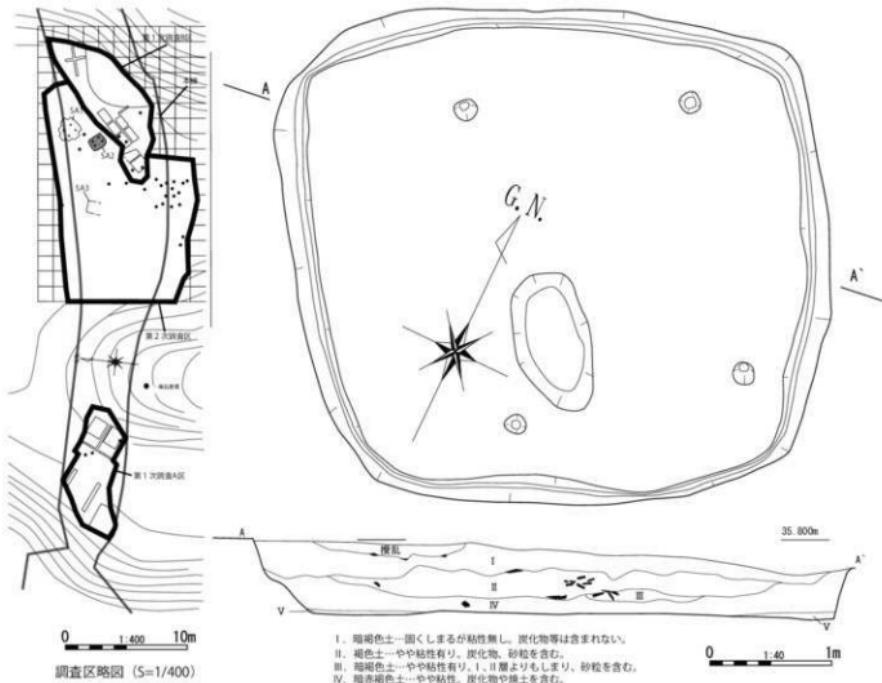
第20図 地蔵ヶ森遺跡第II・III層出土遺物実測図(3) (S=1/3)



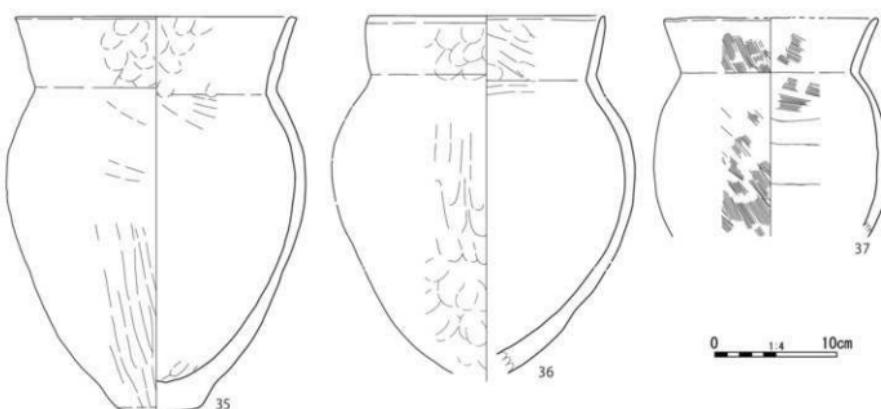
第21図 地蔵ヶ森遺跡SA1遺構実測図 (S=1/60)



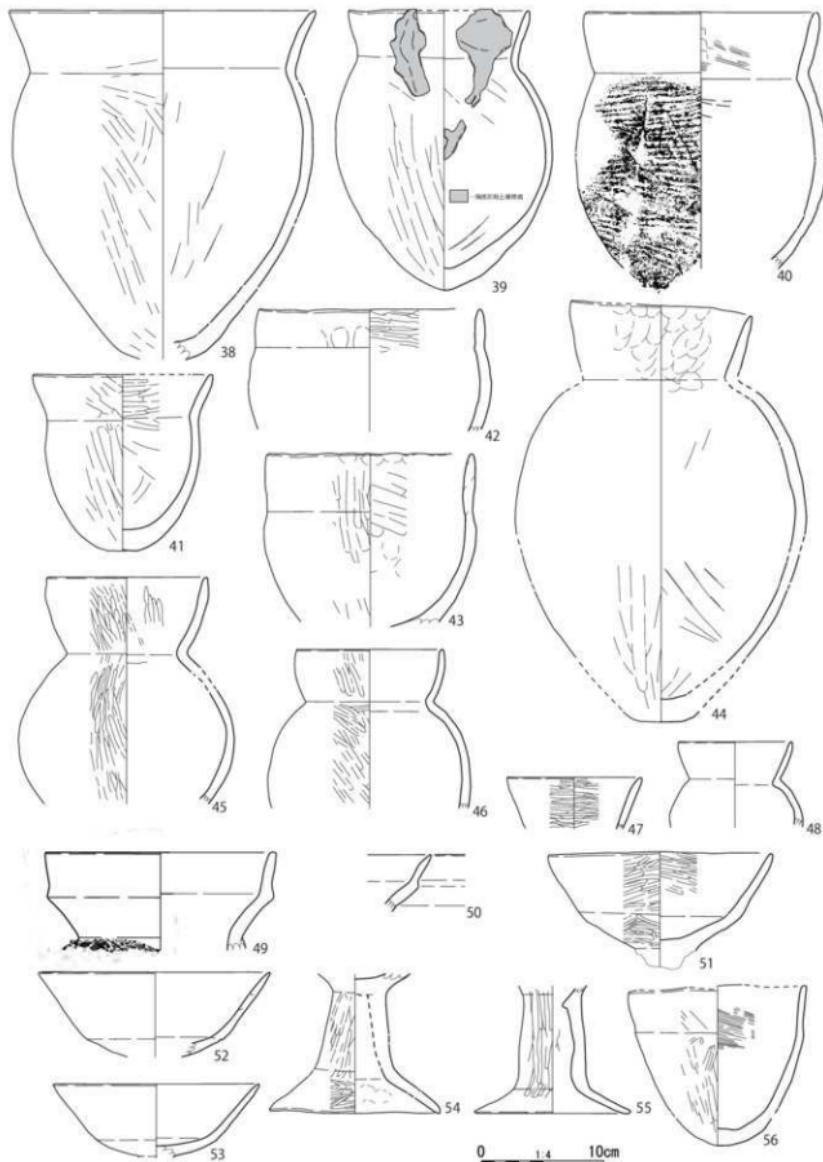
第 22 図 地蔵ヶ森遺跡 SA1 出土遺物実測図 ($S=1/4$)



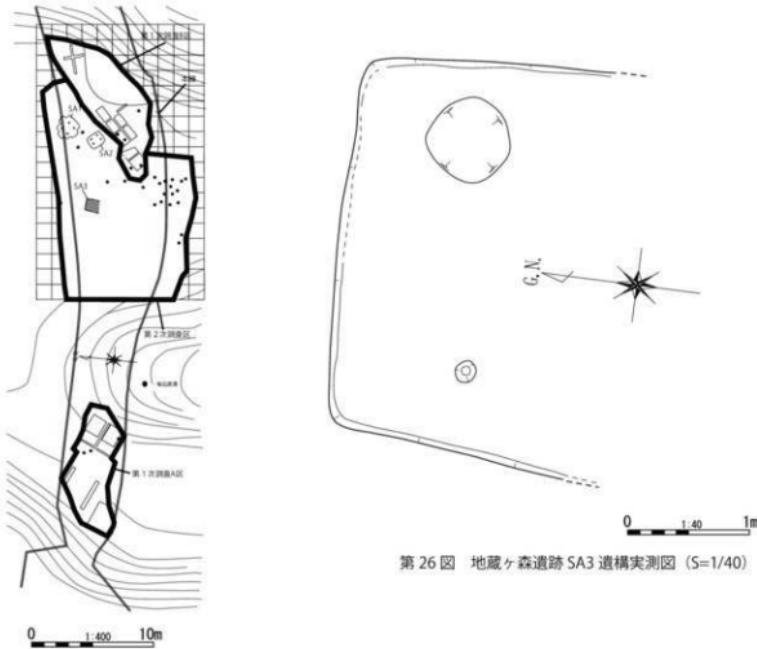
第23図 地蔵ヶ森遺跡 SA2 遺構実測図(1) (S=1/40)



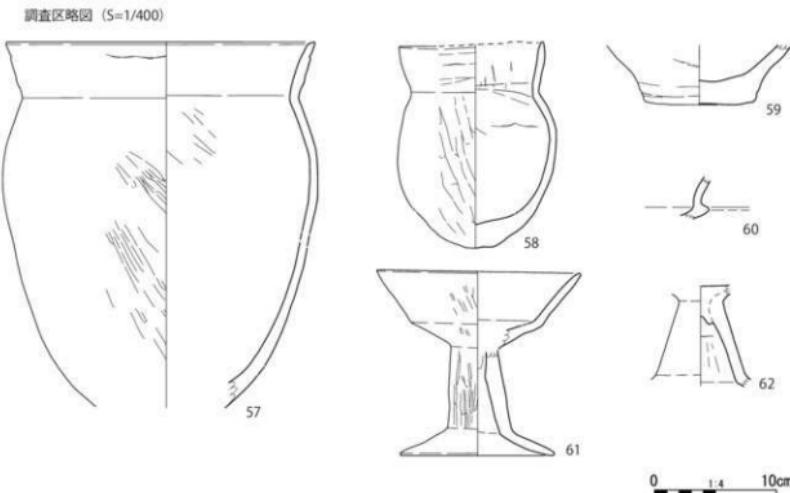
第24図 地蔵ヶ森遺跡 SA2 出土遺物実測図(1) (S=1/4)



第25図 地蔵ヶ森遺跡 SA2 出土遺物実測図 (2) ($S=1/4$)



第26図 地蔵ヶ森遺跡SA3遺構実測図 (S=1/40)



第27図 地蔵ヶ森遺跡SA3出土遺物実測図 (S=1/4)

第2節 枝遺跡（えだ）

所在地：門川町加草字枝 立地：標高2mの低地

調査原因：県道加草・日向線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

調査年月日：平成7（1995）年1月25日～2月15日

調査面積：130m² 調査員：高橋浩子

1. 概要

枝遺跡は、中世山城である江田城跡の東側に伸びる二つの尾根の間の低地に立地する。北東には松尾城跡、南東には佐々宇津城跡が位置し、三方を中世山城に囲まれた立地である。以前は水田（迫田）として利用されていた。南東に1kmほどで門川湾に達する。調査は約130m²の調査区をA～Dの4調査区（調査時はグリッドと呼称）に分割し実施した（第29図）。遺構として土坑2基、溝状遺構1条、ピット群を検出し、遺物として弥生時代～古墳時代の土器および石器の出土が確認された。

2. 基本層序

表土・水田床土を除去すると砂層が確認され、掘り下げるに従い疊の混入度合が高くなり疊層に達した。遺物はこれら疊混じりの砂層中から出土した。遺物の出土状況を踏まえると、本来は北西の山腹に存在した遺構・遺物包含層から調査区内に流れ込んだ可能性も考えられる。

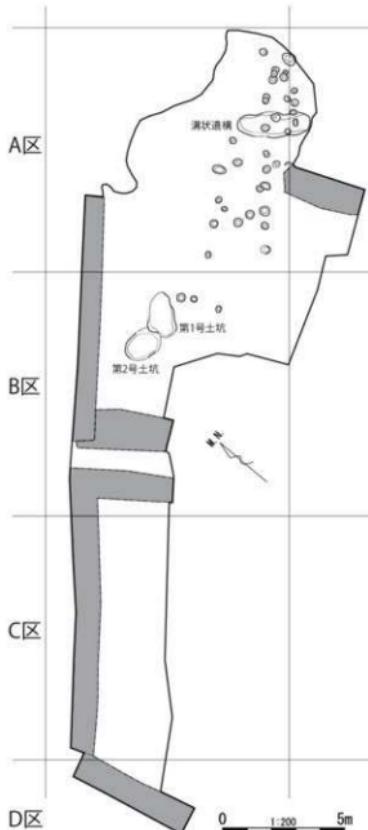
3. 遺構と遺物

A区では疊混じり土層を掘り進めた後、疊層上面において溝状遺構1条、ピット38基が検出された。B区では土坑2基、ピット7基を検出した。土坑および包含層中から弥生土器、古墳時代の土師器を中心とした遺物が出土している。年代的には弥生時代後期後半の遺物を一部に含むが、およそ弥生時代終末～古墳時代初頭を中心とし、布留式系の甕（5）など古墳時代前朝の土師器も少量含む。

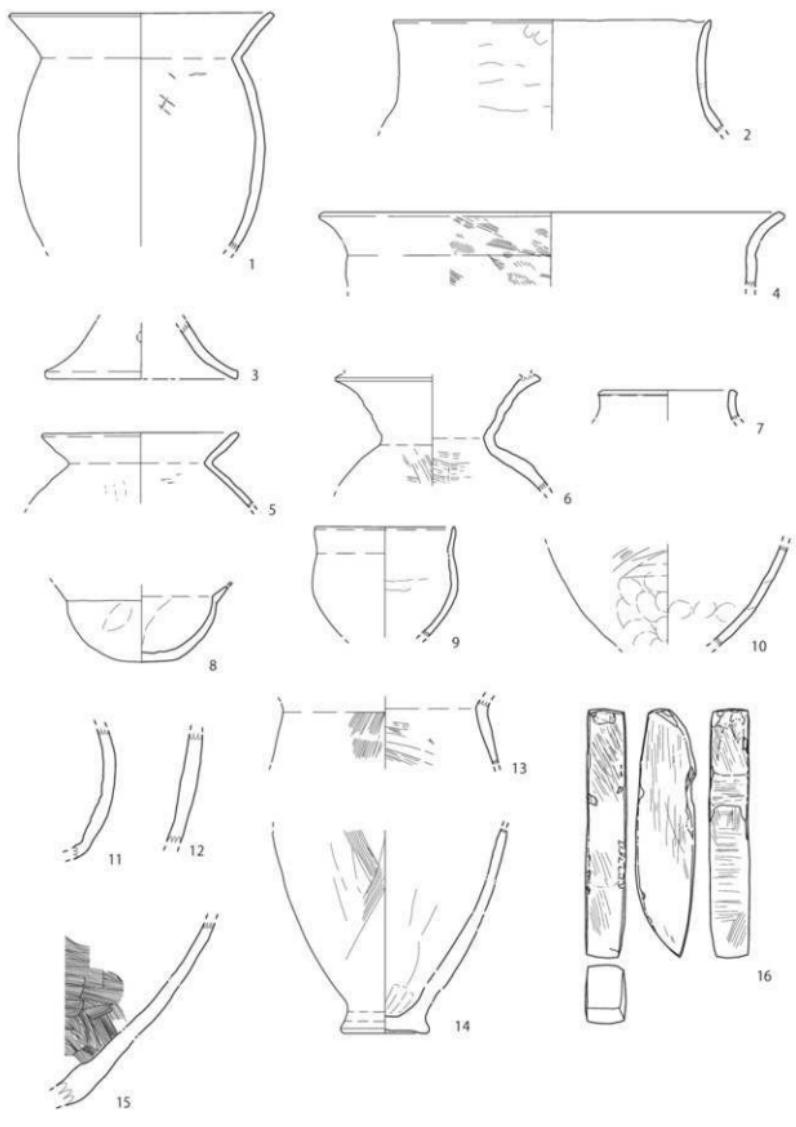
C・D区からは遺構は検出されなかったが、少量の土器片の他、抉入柱状片刃石斧1点（16）の出土が注目される。珪質凝灰岩を用いる。中期後半～後期初頭の所産と考えられ、A・B区出土の土器とは編年的に重複しない可能性が高い。



第28図 枝遺跡周辺地形図(S=1/2000)



第29図 枝遺跡遺構分布図(S=1/2000)



第30図 横遺跡出土遺物実測図 (S=1/4)
1・2・4・5・7・9～15：甌、3：高環、6：二重口縁甌、8：小形丸底甌、16：挿入柱状片刃石斧

第3節 高平城跡（たかひらじょう）

所在地：日向市大字塩見字久保 立地：塩見川左岸の小丘陵（標高30m）

調査原因：県営広域農業整備事業治海北部2期地区

調査年月日：平成3（1991）年12月2日～平成4（1992）年8月5日

調査面積：5,200m² 調査員：飯田博之・松林豊樹

1. 概要

高平城跡は、昭和59年に日向市が実施した遺跡詳細分布調査の時、地元から城跡という情報があり、現地踏査を行った結果確認された経緯を持つ。地元では、空堀で区切った丘陵西側を「高平城」、東側を「平城」と呼んでおり、地元に伝承されていた名称を遺跡名に使用している。

広域農道建設事業に伴い、昭和60年から高平城跡の取扱い協議が始まり、県や市の文化財部局、農政部局の協議が行われた。協議の進展に伴い日向市長から教育委員会に対して遺跡の取扱いについて意見照会があり、日向市教育委員会から諮詢を受けた日向市文化財保存調査委員会が現地調査を行い、現状で保存することが望ましいとの答申が出されるに至った。しかし農道整備事業推進委員会から事業推進の陳情書の提出などもあり、協議を重ねた結果、記録保存の措置を講じることになり、調査を実施することとなった。

調査の結果、主郭と考えられる曲輪に掘立柱建物跡や土坑等を確認し、周囲の帶曲輪には、造成による少なくとも二つの時期の遺構面を確認している。遺物は、土師器の环や皿、小皿が出土し、ほとんどがヘラ切り底で一部系切り底も見られる。輸入陶磁器類は、青磁、白磁の碗や皿が出土し、国産陶器では、備前焼の壺や拂り鉢、常滑焼の壺等が出土している。遺物から見て城跡の存続時期は、13世紀前半から16世紀にかけての時期が考えられ、ピークは13世紀前半～後半、14世紀中～後半、15世紀中頃～後半の時期が見られる。高平城跡の所在する丘陵の東側には、日向三城の一つである塩見城跡があり、双方の城跡がひじょうに近接した位置に構築されている。塩見城跡は、遺物から14世紀後半～15世紀前半、15世紀後半～16世紀前半及び16世紀後半～末の3つの時期にピークが見られる。高平城に見られる13世紀代の時期は、塩見城では空白期とされていることから、この時期の高平城の持つ意味がとても重要なものとなりそうである。

高平城は文献に記載された形跡がないようであるが、塩見城は、伊東氏によって編まれた『日向記』や島津家文書『文明六年三州廻々領主記』の中に登場し、いずれも15世紀の中頃には存在していたようである。また、同じ頃に伊東氏と土持氏の戦いがあり、勝利した伊東氏が塩見城を含む10城を譲り受けた記述がある。土持氏は、島津家文書の『日向国図帳』の建久8年（1197）に記事があり、地頭が土持太郎信綱とされている。高平城や塩見城を含むこの地域は、12世紀後半から15世紀中頃までは土持氏が影響力を持っていたと考えられ、高平城跡出土遺物のピークに符合する文献記事が見られることは、大変興味深い状況といえる。

2. 遺構と遺物

高平城跡は、丘陵を分断するように掘られた空堀により、東西に区切られている。調査前に作成された縄張り図を見ると、西側の曲輪の規模が東西方向約90m、南北方向約40m、東側の曲輪が東西方向約80m、南北約25mの規模で空堀を構築し東側の防御と境界を設定している。東西の曲輪には、帶曲輪が巡っているが、城跡全体としての防御性は高くなく、居館的な構造と捉えられる。

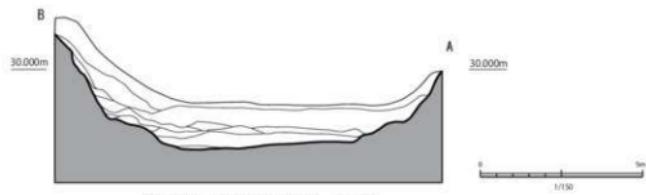
空堀の西側にある曲輪は城の主郭（曲輪1）と考えられ、東西方向約90mのうち約40m（45%）を調査した。

発掘調査により多数のピットや土坑、溝等が検出され、掘立柱建物跡が 12 棟確認されている。掘立柱建物跡は、南北方向と東西方向に軸を持つタイプがあり 1 間 × 3 間、1 間 × 4 間の規模が多い。調査区中央には両面庇をもつ大型の建物が確認されており、柱穴断面を観察したところ、柱を固めるように粘土が詰められた状況が確認された。土坑も多数確認されており、曲輪西北部には、幅約 1 m、長さ約 6.5 m、深さ約 0.6 m の細長い形状をした土坑が溝と並行するように検出された。空堀は丘陵を南北方向に切るように構築され、箱型状の断面を呈し長さ約 29 m、幅約 12 m、曲輪 1 からの深さ約 4 m の規模である。空堀床面の両側には、幅約 0.6 ~ 1 m 程度の犬走り状の平坦な段が設けてある。この空堀により区分された東側の曲輪（曲輪 2）は、耕作の影響を受けたためか遺構は確認できなかった。曲輪 1 の周囲には、帶曲輪が巡り南側の曲輪 4 では、溝やピット等の遺構が確認されたが、北側の曲輪 3 では遺構は確認されなかった。曲輪 4 は幅約 10 m ~ 12 m の規模で、曲輪 1 からの落差が 4 m ある。調査区西側の土層断面を観察したところ、少なくとも 2 面の造成面が確認できた。古い段階の面では、曲輪 1 側に沿って幅約 0.8 m ~ 1.2 m の犬走り状の遺構を巡らせ、空堀に直結させている。空堀近くでは、テラス状に広がった平坦地を設け、簡易な階段状の段差を築いている。曲輪中心から空堀に続く東側では 2 段階の段差を設け、曲輪の向きに並行し溝が掘られ、曲輪南側に向けて途切れています。この溝と調査区西側に検出された堀の間は、幅約 4 m の土槽状の遺構となっている。調査区西側で検出された堀は、幅 4 m、深さ 1.2 m の規模であった。また、曲輪中心付近の溝上場ではピットが 3 基確認され柵状の遺構があったことが想定される。溝が構築された平坦面からは、土師器の壺が出土し、13 世紀代の時期が想定される。新しい造成面は、古い段階の溝や堀を埋めて、犬走り状の高さと同じにして平坦な面を構築している状況が見れる。

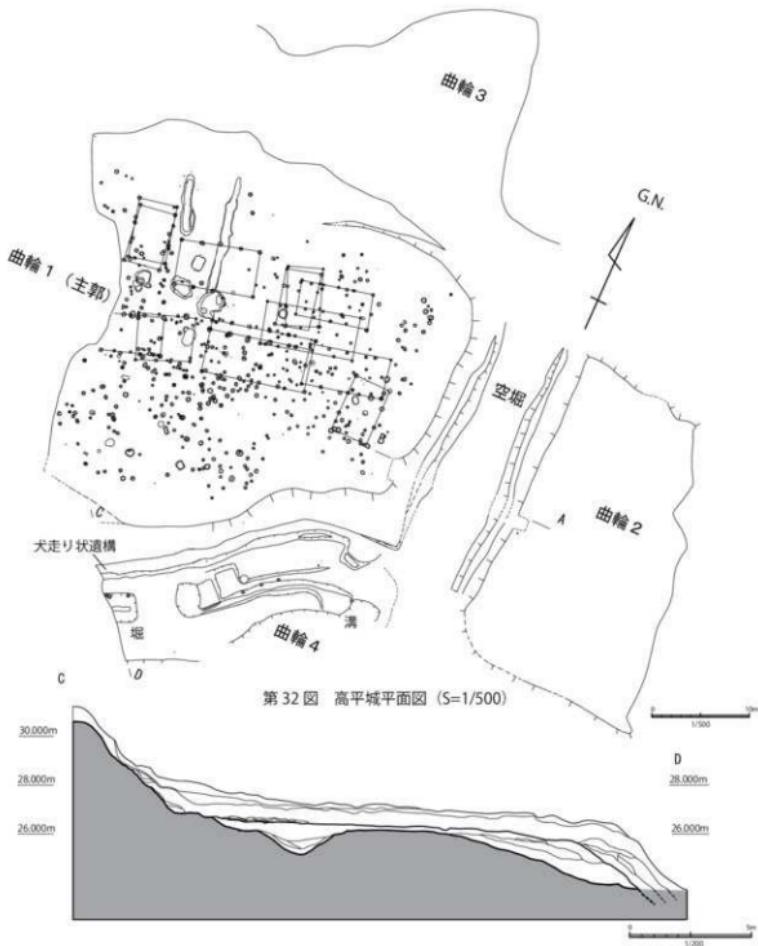
遺物は 1 ~ 25 が曲輪 1、26 ~ 32 が曲輪 4 から出土した。1 ~ 4 は土師器の壺である。すべてがヘラ切り底で 1 と 4 は底部から体部への立ち上がりが直線的であるが、2・3 はやや丸みをもった形状を呈しており、外側の調整も精緻である。2・3 は 13 世紀前後の時期が、1 と 4 は 13 世紀後半の時期が考えられる。6 は白磁で大宰府編年図類に相当するもので 13 世紀後半～14 世紀前半の資料である。7 は景德鎮産の青花で 15 世紀代、8 は青磁の碗で櫛描進文が施され 16 世紀代と考えられる。9・10 は備前焼の擂り鉢で 14 世紀中～後半の時期と考えられる。13～15 は曲輪 1 の 1 号土坑出土で、13 は壺、14 は小皿でヘラ切り底である。15 は東播系須恵器、16 は土師器の擂り鉢で 3 号土坑出土、17 は 4 号土坑出土の土師器小皿、18 は 5 号土坑出土の土師器の壺でいずれもヘラ切り底である。18 は底部から体部にかけてやや丸みを持ち外側の調整も精緻である。19～23、25 は 6 号土坑出土で、19～21 は壺、22 は小皿である。23 は青磁で蓮弁文が見られ 14 世紀の所産である。24 は東播系の須恵器、25 は土師器の擂り鉢である。26～28 は青磁片で曲輪 4 から出土している。27 は碗で雷文帯が見られ、28 は輪花皿である。29 は備前焼の壺で口縁部の断面が玉ぶち状を呈しており、14 世紀中頃の時期と考えられる。30・31 は常滑焼窯の口縁部片である。32 は青磁の碗である。

参考文献

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012 『塙見城跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 210 集
日向市教育委員会 1988 『高平城跡の概観－中村地区所在の中世城館調査概報－』
宮崎県教育委員会 1999 『宮崎県中近世城跡緊急分布調査報告書』Ⅱ
森村健一 2008 『12～17 世紀の陶磁器の編年と茶の湯』宮崎県埋蔵文化財センター研修会資料
桑畑光博 2004 『都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）』宮崎考古第 19 号

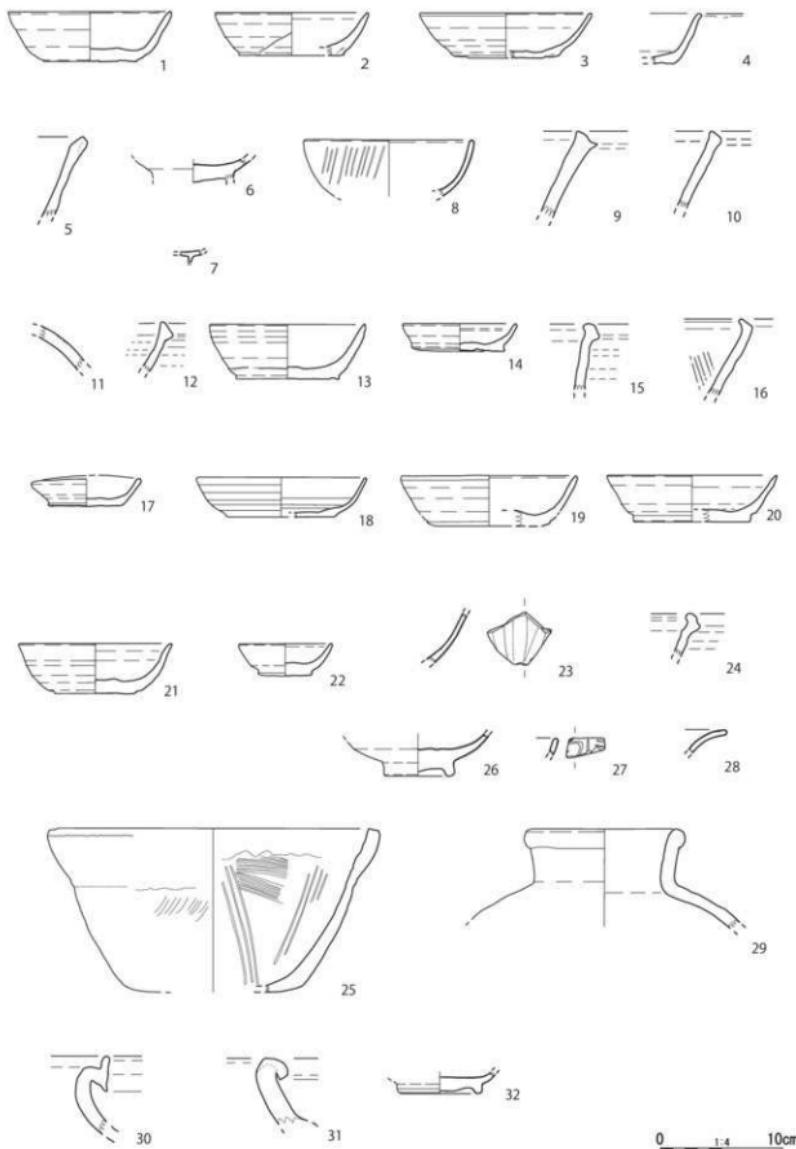


第31図 空堀断面図 ($S=1/150$)



第32図 高平城平面図 ($S=1/500$)

第33図 曲輪4断面図 ($S=1/200$)



第34図 高平城出土遺物実測図 ($S=1/4$)



写真2 遺跡遠景（西から）



写真3 遺跡遠景（東から）



写真4　遺跡遠景（北から）



写真5　曲輪1と曲輪4（南から）



写真6 曲輪4（東から）



写真7 空堀（南から）

第4節 野首遺跡（のくび）

所在地：日向市大字日知屋字野首 立地：標高 96 m の櫛ノ山の南東斜面

調査原因：県道財光寺仙ヶ崎通道路改良工事

調査年月日：昭和 58（1983）年 6 月 13 日～8 月 6 日

調査面積：2,020m² 調査員：菅付和樹

1. 概要

遺跡は櫛ノ山の南東側に位置し、この斜面は大きく 4段に造成されている。宅地造成で削平された最上段を除き、上から 1～4 区として調査した。耕土置き場の関係で限定的な調査となつたが、検出した遺構や遺物は、遺跡の南東側、海に突出した岬にある中世日知屋城跡との関連をうかがわせる。

2. 基本層序

I 層：暗褐色土（耕作土）、II 層：黒褐色土、III 層：黄褐色土（アカホヤ火山灰層）、IV 層：黒褐色土、V 層：暗黃褐色土

3. 遺構と遺物

上から 2～4段目（1～3 区）と最下部の低地（4 区）からは、1 区でピット群約 460 基・土坑 2 基・溝状遺構 1 条、2 区でピット群約 270 基・石列 1 基、3 区でピット群約 25 基・石垣状遺構 2 列・溝状遺構 1 条を検出した。包含層は後世の耕作等により失われていたが、遺構等から主に中世後半の遺物が出土している。

ピット群からは掘立柱建物跡も想定できたが、確實な遺構は確認できなかった。地元の伝承に、日知屋城関連の武家屋敷があった、薬師寺への参道があったなどというものがあり、或いはこれらに関連する遺構であった可能性はある。遺構の検出状況からは、この地の大規模な造成は中世後半に行われたと考えられる。4 区は、大小の自然礫が密集し、その中に数時期の遺物が混在していた。堆積時期を含めその性格は不明である。

中世以前の遺物として、後期旧石器時代の角錐状石器基部（3 区）、撫文時代晚期黒川式浅鉢・無刻目突帯文深鉢片（4 区）、弥生時代中期後半の中溝式・下城式甕片（4 区）などがいずれも少量出土しているが、これらの時期の遺構は見られない。このほか各区（1・3・4 区）から打製石斧 19 点が出土している。

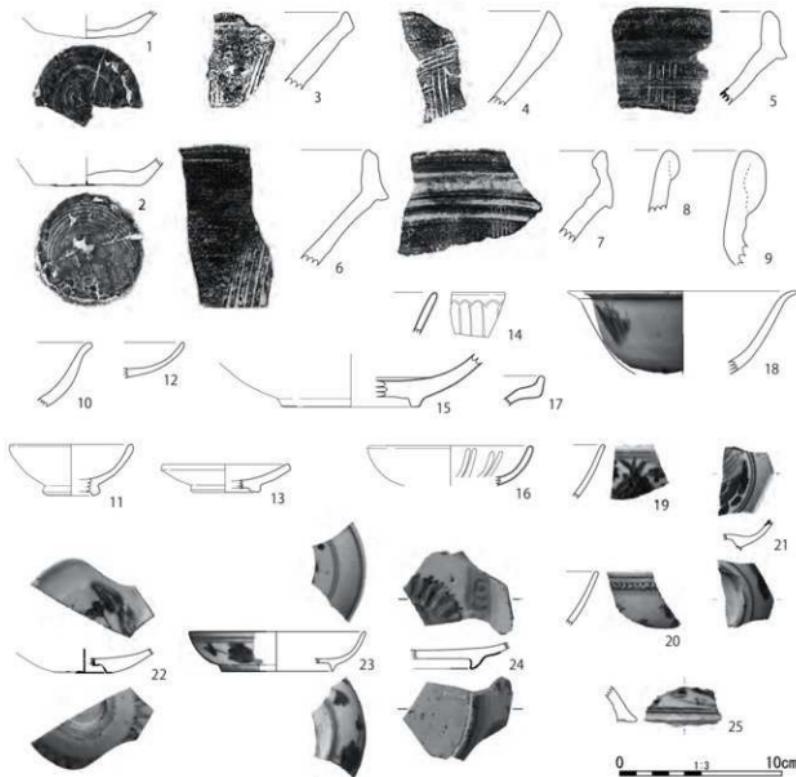
古代以降の遺物は、中世を中心に一定量の出土を見ている。時期的には 14 世紀から 16 世紀にかけての遺物が多く、南東側に位置する日知屋城跡の遺物との類似性が見られることか



第 35 図 野首遺跡遺構分布図 (S=1/800)

ら、並行期にあっては何らかの関連をもった遺跡であったと考えることができる。

古代の遺物としては、土師質土器（壺・皿・高台付碗）が確認できるが、量的には少なく遺構も確認されていない。中世の遺物は、先述のとおり量的に優越しておりこの遺跡を特徴付ける。陶磁器類としては、国産陶器の備前鉢鉢が数多く出土しており、14世紀前半から16世紀末の時期幅がある。輸入陶磁器としては、中国産の白磁・青磁・青花が確認されている。白磁は碗・皿が出土しているが、15世紀後半から16世紀に位置付けられ、中世前半の白磁類は確認されていない。青磁は図化した遺物のほかにも出土しているが、線刻細蓮弁文(14)の時期以降の碗が大半を占め、施釉も厚くやや粗製のものが目立つ。15世紀後半からの時期に位置づけられる。青花は、碗・皿のほかに壺蓋が1点出土している。19～21、23は景德鎮産と考えられ、21の腹頭心の碗と23の皿は釉の発色が良く、絵付けも丁寧な優品である。25は壺蓋であり、釉調から福建・廣東地域のものと考えられる。このほか、土製品として土鍾が37点出土しており、生業との関連が垣間見える。近世の遺物は量的にはさほど多くなく、日用雑器としての肥前系の碗や鉢鉢などが確認されたのみである。



第36図 野首遺跡出土遺物実測図 (S=1/3) ※ただし23は日知屋城跡採集品

第5節 大戸ノ口第3遺跡（おおとのくち）

所在地：高鍋町大字上江字大戸ノ口 立地：

調査原因：高鍋農業高校生徒寮建設に伴う確認調査

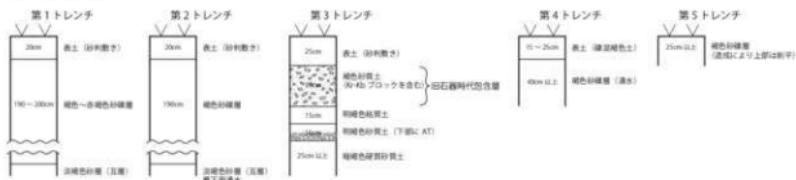
調査年月日：平成8（1996）年7月4日

調査面積：40m² 調査員：菅付和樹

1. 概要

寮建設予定箇所に東西方向のトレンチを5本設定し、確認調査を実施した。西側（男子寮予定地）の2本は人力、南側（女子寮予定地）の3本は主に重機を用いて掘削した（第37図）。その結果、第3トレンチにおいて旧石器時代の遺物包含層を確認し、地表下約35cmより頁岩製の石器類が出土した。その他のトレンチを設定した部分は、すでに大規模な削平を受けており、遺物包含層は消滅したものと考えられる。

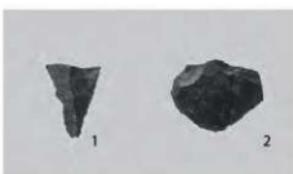
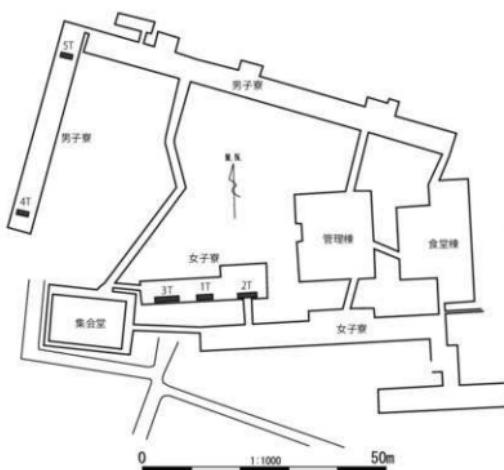
2. 基本層序



3. 遺物

旧石器時代の石器2点を確認した。1は二次加工片または削器である。2は石核である。人為の可能性が高い

2枚の剥離面が観察されるが、そのうち1枚は自然破碎面に切られている。いずれも珪質頁岩製。自然磨ではあるが、他に2点同質石材の資料を回収している。



第38図 第3トレンチ第2層出土の石器

第37図 大戸ノ口第3遺跡トレンチ配置図 (S=1/1,000)

第6節 諏訪遺跡（すわ）

所在地：西都市大字右松 2330番地 立地：西都原古墳群が立地する台地の東縁辺部の標高約35m地点

調査原因：県立妻高等学校特別教室棟建設

調査年月日：平成7（1995）年11月1日～11月30日

調査面積：250m² 調査員：重山郁子・橋本英俊

1. 概要

諏訪遺跡（妻高校校庭遺跡）は、特別史跡西都原古墳群が立地する台地の一段下の日向国分寺跡が立地する国分台地に位置し、国分尼寺の推定地である。大正年間の妻中学校建設時や図書館建設の際にも大量の瓦が出土している。昭和63年度には国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査に伴って、図書館横の国分尼寺の石碑（大正年間に建立）の周辺（現聖陵会館）を調査している。平成7年度の調査では、特別教室棟の北側（A地点）および妻高校敷地内の運動場部分（B地点）・プール西側（C地点）、西都原古墳211号（円墳）の西側（D地点）の調査を実施した。

2. 基本層序

調査対象地である妻高校内には北側の谷部から南にかけて3段の地形の段差が認められ、前方後円墳1基と円墳6基が立地している。

基本層序は表土、3層の盛土層（昭和の盛土2、大正の盛土1）をはさみ、Ⅰ層：黒色土層（遺物包含層）、Ⅱ層：アカホヤ火山灰層、Ⅲ層：暗褐色硬質土層、Ⅳ層：明黄褐色土層、Ⅴ層：明黄褐色粘質土層である。

3. 遺構と遺物

調査の結果、A地点で旧石器時代の石器20点が出土した。調査区内は複数回にわたる施設の建て替えのためか、攪乱が広範囲に及んでおり、土層堆積状況が一様ではなく遺構の検出はみられなかった。また、縦文時代以降の包含層の残存も認められなかった。出土した石器のなかには、青味がかる風化した安山岩製（多久産か？）の翼状剥片（10）も出土している。

B地点は最も調査面積が広い調査区であり、対象地の南に位置している。調査はトレンチ法により実施した。該期の建物の規模からトレンチは長さ5m以上に設定した。遺構や遺物はグランドの東側を中心に出土し、幅約4m、深さ1.5mを測り東西方向に延びる溝状遺構も確認された。埋土中から土師器や布目・格子目叩き瓦が多数出土している。寺域の一部を区画した溝と推定される。トレンチ内からは一辺約1mの方形の柱穴が数基検出されたものの、一棟の掘立柱建物跡として復元できるものはなかった。遺物として須恵器壺、ヘラ切底や高台付の土師器壺（1～8）、塊（9）、台付鉢、平瓦、丸瓦、須恵器壺蓋を転用した硯（11・12）等が出土している。7世紀末から8世紀を中心とした時期が主体である。また、採集資料として韁の羽口も確認されている。

C地点は、調査対象地内では最も西側に位置している。地形の削平のためか遺構や遺物は確認されなかった。

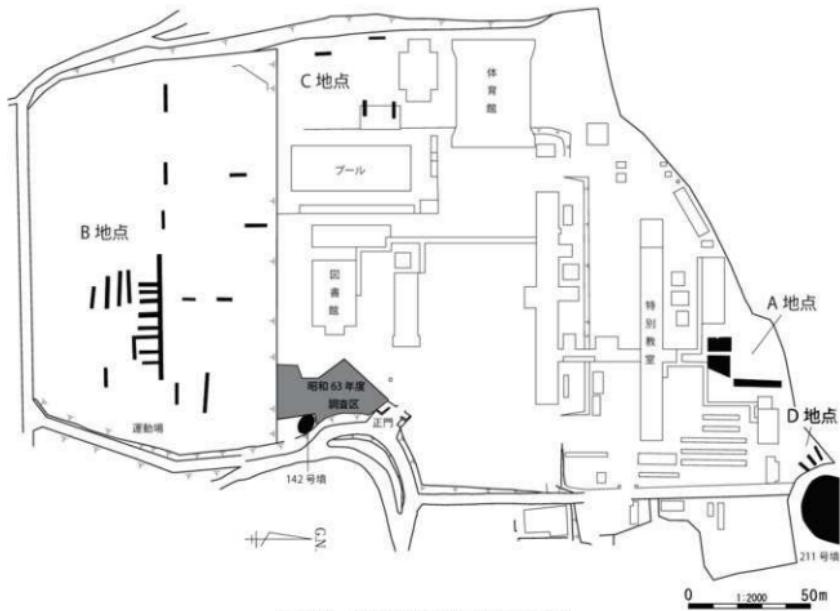
D地点では、トレンチより211号墳の周溝が確認され、須恵器壺、甕などのほか石包丁の出土もみられた。

参考文献

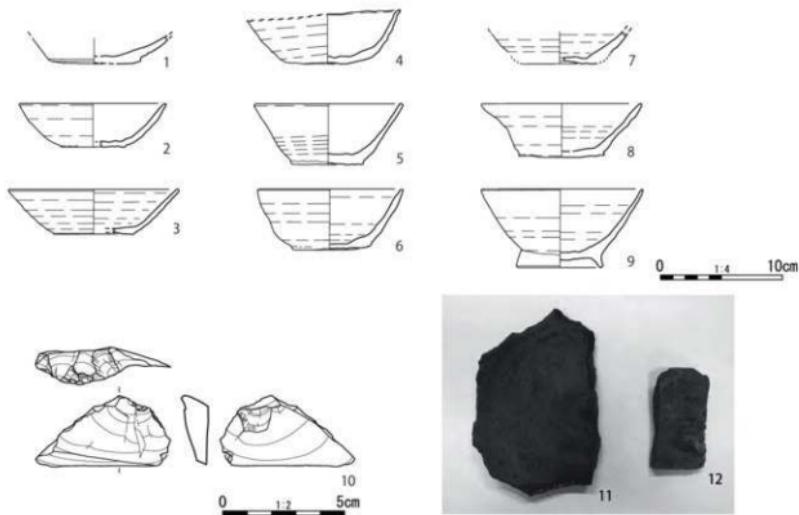
宮崎県教育委員会 1989 「国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書」

宮崎県教育委員会 1996 「国衙・郡衙・古寺跡等範囲確認調査報告書V」

宮崎県西都市教育委員会 1990 「諏訪遺跡 県立妻高等学校聖陵会館建設事業に伴う調査報告」西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書第12集



第39図 調査遺跡調査位置図 ($S=1/2,000$)



第40図 調査遺跡出土遺物実測図 ($S=1/4 \cdot 1/2$) 1～8：土師器壺、9：土師器塊、10：剥片、11・12：須恵器転用硯

第7節 穿田遺跡（うさぎだ）

所在地：国富町八代 2708番地 立地：三名川と後川に挟まれた標高約132mの丘陵上

調査原因：県道都農綾線道路改良工事

調査年月日：平成6（1994）年11月22日～12月20日

調査面積：196m² 調査員：竹井真知子

1. 概要

アカホヤ上面において遺構の有無を確認し、その後アカホヤ下位の暗褐色土層の掘削を実施した。

2. 基本層序

約1mの客土を除去すると、黒色土、アカホヤ、硬質黒色土、軟質黒色土、硬質黒褐色土、暗褐色土、暗褐色土（スコリア混）、黄橙色スコリアの順に土層の堆積が観察された。アカホヤ上位の黒色土も包含層である可能性が考えられたが、調査区内には全体的に整地目的の搅乱が及んでおり、遺構・遺物の残存状況は良好ではなかった。

3. 遺構と遺物

溝状遺構を中心に、近世・近代の土師器・陶磁器片を数点確認した（写真8）。近代の型紙摺りの肥前系磁器片（未掲載）は上層から、他の近世遺物は中・下層から出土している。

上段2点は土師質土器であり、左は脚付の底部片である。中段は肥前系磁器である。中央の底部片の脚下面には砂の付着が観察される。下段は薩摩焼系の陶器と考えられる。いずれもおおよそ18世紀後半の所産と考えられる。

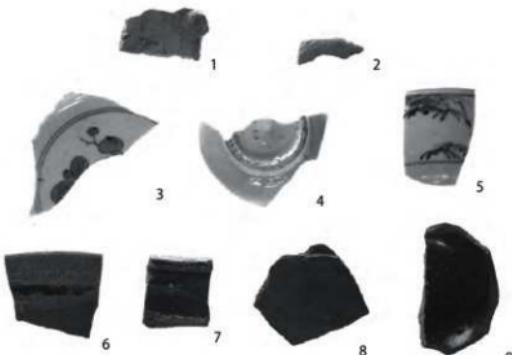
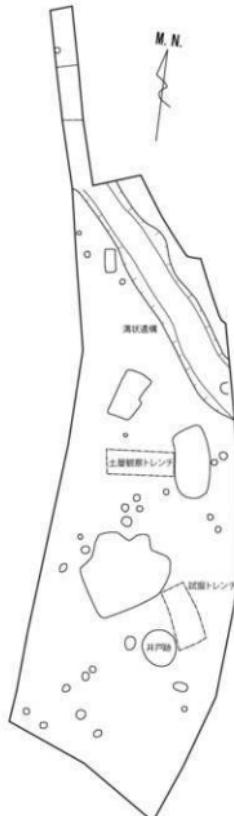


写真8 穿田遺跡から出土した遺物



第41図 穿田遺跡遺構分布図
(S=1/200)

第8節 上岩知野遺跡（かみいわちの）

所在地：東諸県郡国富町大字上岩知野 立地：大淀川至本町川の北岸に位置する段丘上

調査原因：農免農道建設に伴う調査

調査年月日：平成2（1990）年8月9日～11月30日

調査面積：2,200m² 調査員：東 憲章

1. 概要

農免道路建設に伴う発掘調査のため、調査区は東西に長く、3地点に分かれ。遺跡は近世の遺構を主体とし、弥生時代中期の溝や竪穴建物跡が検出された。

2. 基本層序

I層：表土、II層：黒褐色土、III層：K-Ah、IV層：黒褐色土、V層：暗褐色土、VI～VII層：褐色土、IX層：黄褐色土、X層：AT

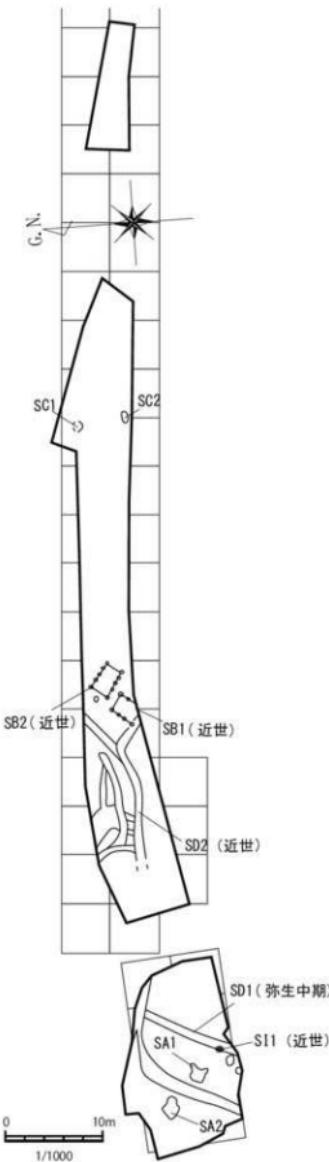
3. 遺構と遺物

弥生時代中期の遺構（SD1）、同竪穴建物跡2棟（SA1・2）、近世の溝状遺構6条（SD2他）、集石遺構1基（SI1）、同掘立柱建物跡（SB1・2）、時期不明土坑2基（SC1・2）などが検出されている。

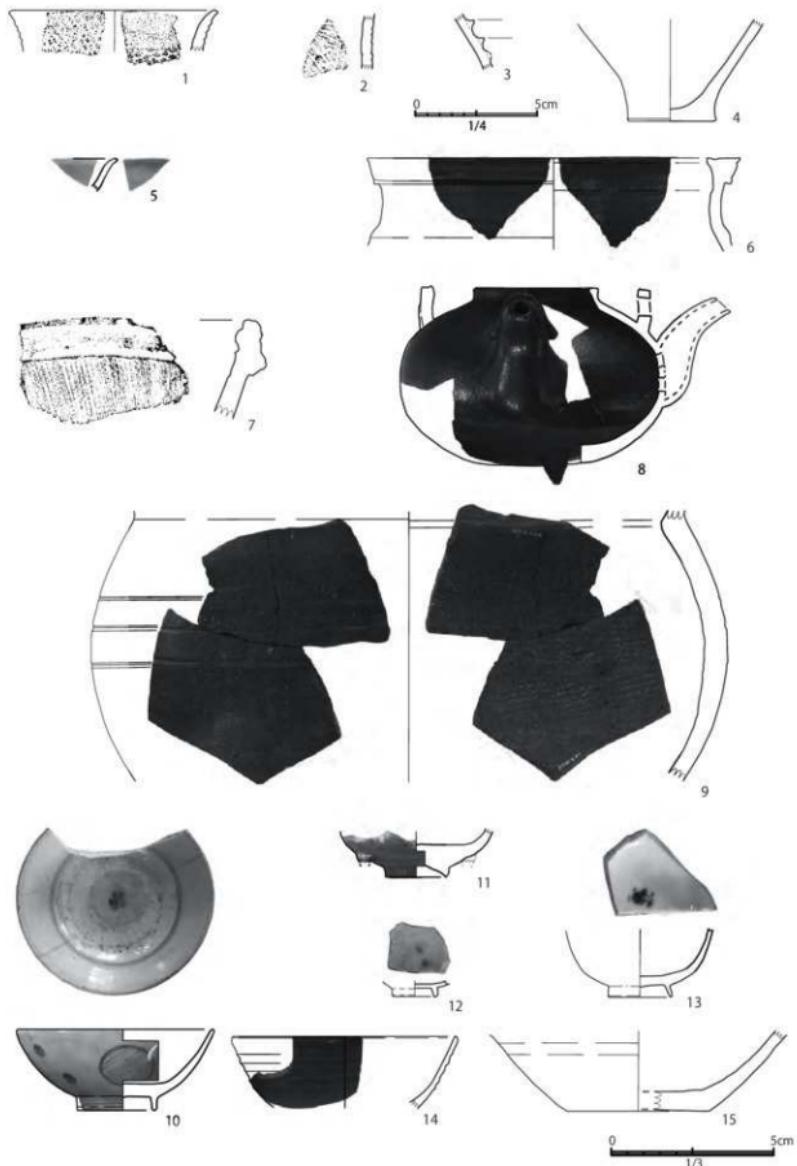
縄文時代の遺構は確認できないものの、早期の押型文土器と曾畠式土器片が出土している（1、2）。その他、弥生時代中期の甕（3、4）や11世紀の白磁碗（5）も出土している。

近世の遺物は18～19世紀の遺物が主体となっており、薩摩系陶器甕、擂鉢（6、7、9）、同土瓶（8）の他、18世紀後半頃肥前系染付碗や火入れ（10、11）、京焼や19世紀初頭の瀬戸美濃磁器碗なども出土している（12、13）。

* 近世陶磁器については佐賀県九州陶磁文化館（当時）の大橋康二氏にご教授をいただいている。



第42図 上岩知野遺跡遺構配置図 (S=1/1,000)



第43図 上岩知野遺跡出土遺物実測図 (S=1/4)

第9節 竹之下遺跡（たけのした）

所在地：宮崎市大塚町竹之下 立地：大淀川右岸の微高地（標高8m）

調査原因：街路整備工事

調査年月日：昭和63（1988）年5月24日～9月3日

調査面積：2,300m² 調査員：長津宗重

1. 概要

古墳時代後期の竪穴建物跡10軒が検出され、すべて方形プランの4本柱である（第44図）。SA6が6.6m×5.4mと最大規模であるが、主体は一辺5.1～5.7mで、SA4の一辺4.6mが最小である。火爐としてSA4・7・8は竪穴部の北側の壁には竈に類似する遺構を有するのに対して、SA1・6・9は竪穴部の床面中央にいわゆる「埋甕」という土器埋設炉（今塙屋2004）を有する。土器埋設炉とは、竪穴建物跡の床面の中央部に土師器の甕が入るだけの穴を掘り、そこに甕の口縁部だけを床面より上に出して据え付けたものである。甕を据え付けた穴の壁は固く焼き締まっており、甕の口縁部の周辺には焼土塊が這っている。炉として機能したと思われる。切り合ひ関係はSA5→SA4のみである。出土した須恵器・土師器は陶邑編年のTK209古段階～TK217古段階で6世紀末～7世紀初4半期の集落である。

調査区の北側で近世墓が3基検出され、主軸が南北方向で長さ162～172cm×幅94～118cmの規模で、六道錢としての銅錢（寛永通宝）などが出土している。

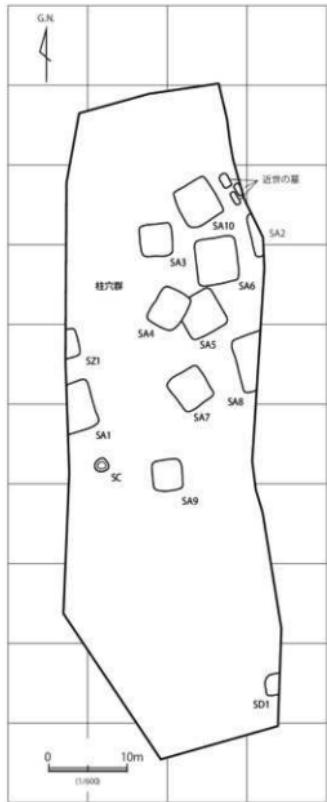
2. 遺構と遺物

SA1は一辺5.7mの規模で、床面中央の土器埋設炉の甕（第45図2）は板状工具による縱方向のナデを施し、口径・器高・胸部最大径がほぼ一致する球形胴で、底部は平底を残す。丸底鉢（1）、瓶（3）、ミニチュアの手捏ね鉢（4・5）、須恵器环蓋・身も出土している。SA2出土は口縁部が直に立ち上がる長胴甕（7）、平底長胴甕（6）である。SA3出土は口縁部が少し外反する長胴甕（第46図8）、口縁部が直に立ち上がる長胴甕（9）、胸部最大径に対して口径が1/2の大型壺（11）、瓶（16）、壺（12～14）、須恵器环身などである。SA4出土は瓶・壺である。SA5出土は瓶（17）、口径13.8cmの須恵器环蓋（18）である。SA6の床面中央の土器埋設炉の甕は平底の球形胴で、出土の須恵器环蓋は口径14.4cmである。SA7出土は口縁部が大きく外反する長胴甕（21）・口縁部がほぼ直に立ち上がる平底長胴甕（22）、木の葉底の小型壺（19）、大型高环（第47図24）、塊形高环（25）、丹塗り壺、受部径13.4cm・口径11.0～11.8cmの須恵器环身（26・27）、短い口縁部が大きく外反する須恵器甕（28）、長い口縁部が緩やかに外反する須恵器甕（29）である。SA9出土の土器埋設炉の甕（30）は平底の球形胴である。須恵器・土師器からSA5・6はTK209古段階、SA7はTK209新段階、SA2・3はTK217古段階である。

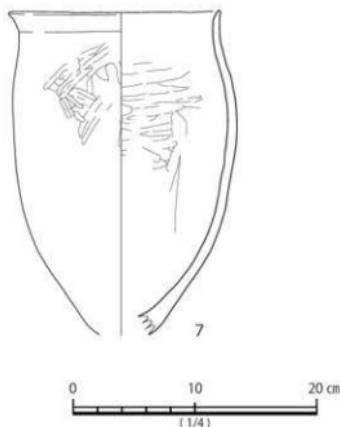
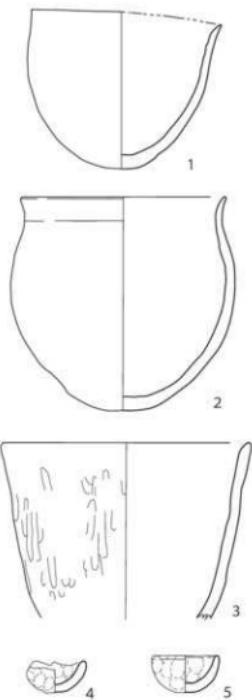
参考文献

長津宗重 1989 「竹之下遺跡」『宮崎県史』資料編考古2、宮崎県

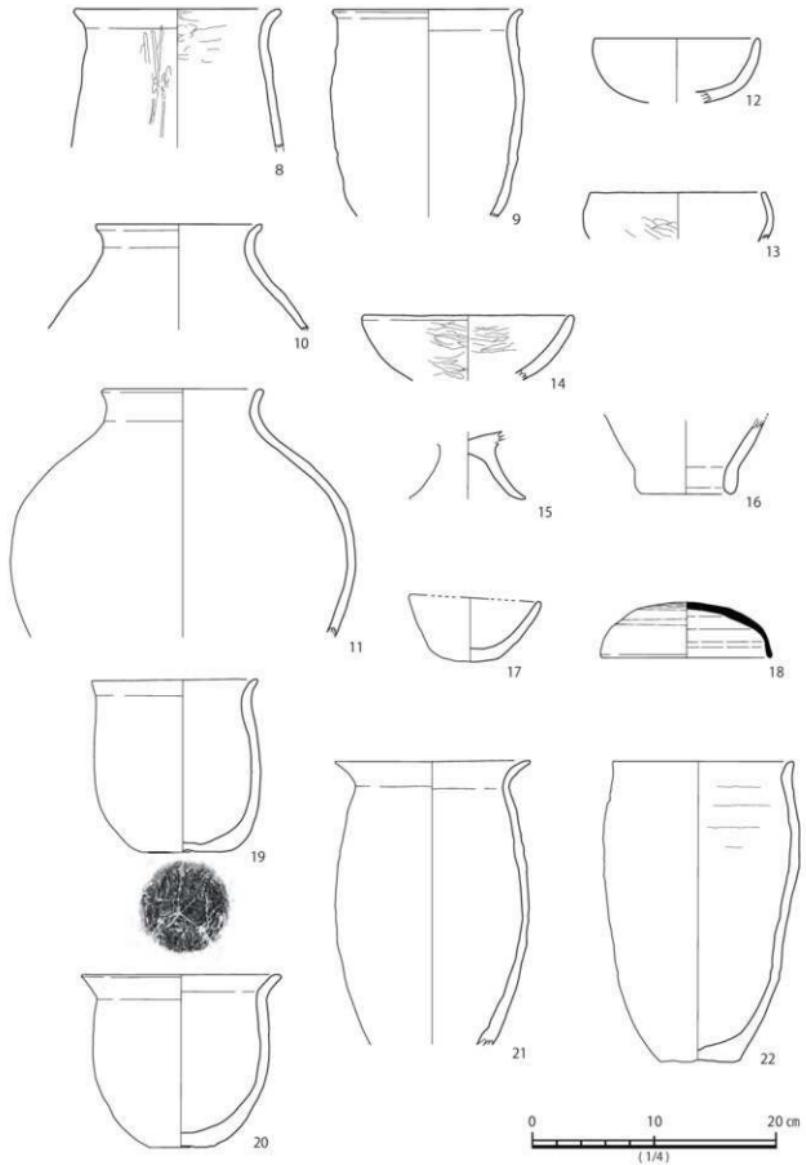
今塙屋毅行 2004 「南部九州古墳時代の火爐」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』



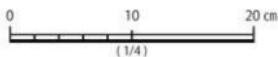
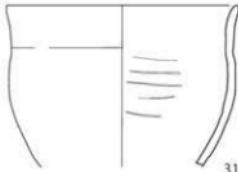
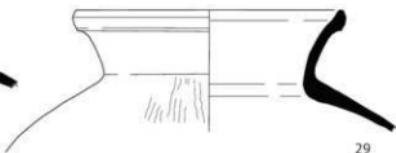
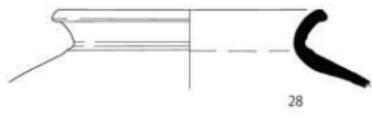
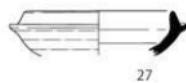
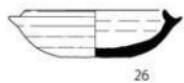
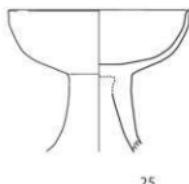
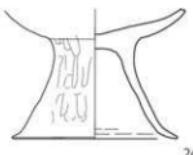
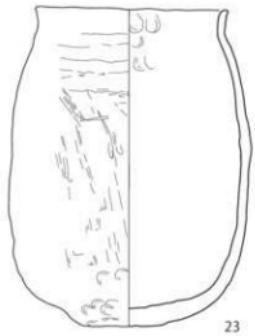
第44図 竹之下遺跡遺構分布図
(S=1/600)



第45図 竹之下遺跡出土遺物実測図 (1) (S=1/4) 1~5:SA1、6・7:SA2



第46図 竹之下遺跡出土遺物実測図(2) (S=1/4) 8~16: SA3, 17・18: SA5, 19~22: SA7



第47図 竹之下遺跡出土遺物実測図(3) (S=1/4) 23~29: SA7、30~32: SA9、33: SE4



写真9 竹之下遺跡全景（南から）



写真10（左上）4号・5号竪穴建物跡

写真11（右上）1号竪穴建物跡内埋甕出土状況

写真12（左下）7号竪穴建物跡



第10節 権現昔遺跡（ごんげんじやく）

所在地：宮崎市大塚町権現昔 立地：大淀川右岸の河岸段丘上（標高9m）

調査原因：街路目通線改良工事

調査年月日：昭和62（1987）年9月18日～12月5日

調査面積：550m² 調査員：面高哲郎

1. 概要

権現昔遺跡は南流する大淀川右岸の標高9mの河岸段丘上に位置し（第52図）、弥生時代後期の竪穴状遺構2基、中世の溝状遺構4条、時期不明土坑5基が検出された。弥生土器には口縁部が「く」の字に外反し、一条の刻目突帯を有する甕、いわゆる中溝式土器や、L字口縁の下位に突帯を有する大型甕があり、中期後半の土器を主体とする。古代の須恵器高台付塊、中世の糸切り・ヘラ切り底の土師器皿・備前焼甕・管状土錘なども出土している。竪穴状遺構は、一辺約2.7mの方形プランで、深さ0.1m残存し、弥生後期土器が少量出土している。溝状遺構4条のうち調査区北部を東西に走る1号溝状遺構は、上場約1m、下端約0.3m、深さ約1mで、埋土の堆積状況から溝として数度の掘り直しがされている。最初期の溝状遺構の埋土上部に「白ボラ」が見られる。通称「桜島文明輕石」と呼ばれている文明3（1471）年の桜島火山噴出起源の「桜島3テフラ」は宮崎市域の発掘調査でも確認されているので、この「白ボラ」は「桜島3テフラ」の可能性がある。この「白ボラ」の下位で糸切り土師器皿がまとまって出土している。

2. 遺物

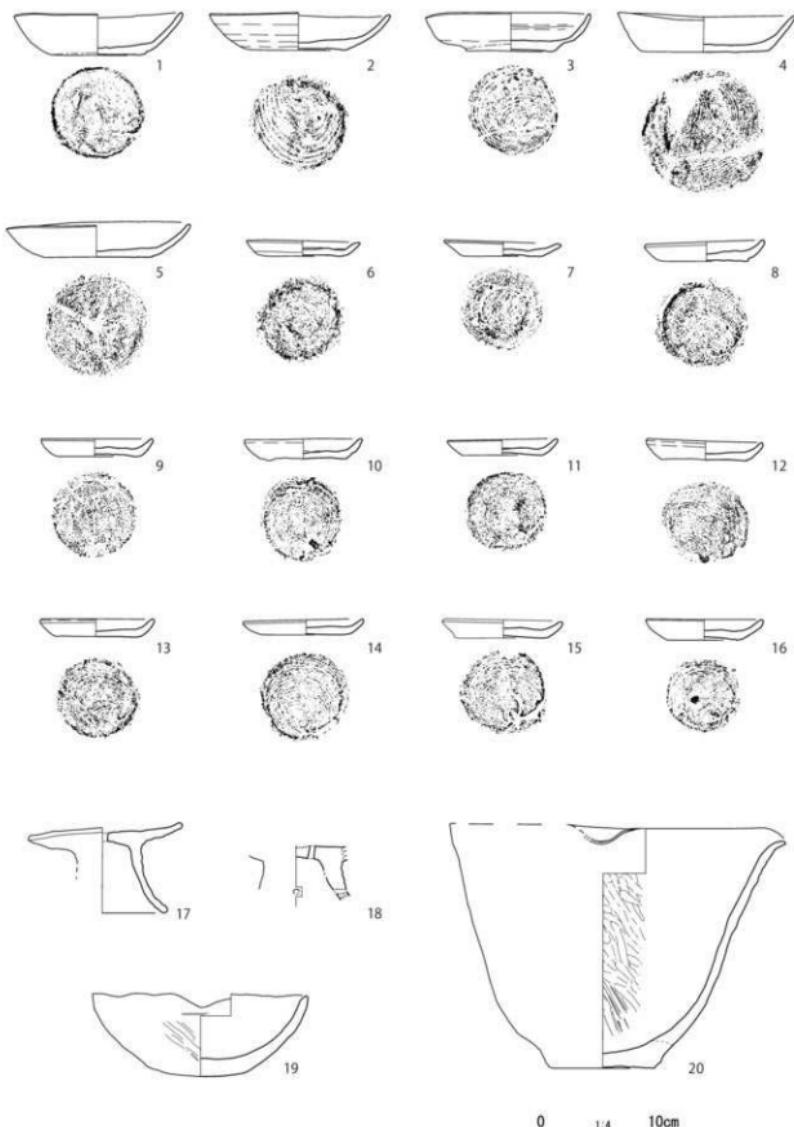
土師器の环・皿の底部の切り離し手法はヘラ切り皿の2点（6・7）以外はすべて糸切りである。环（1～5）は法量が口径13.4～14.9cm、底径7.4～8.8cm、器高2.9～3.4cmで、平底の底部から外上方にひらき、口縁端部は丸い。3は底部と体部との境が明瞭である。皿（6～16）は法量が口径8.9～9.8cm、底径6.0～7.4cm、器高1.2～1.7cmで、上げ底気味の底部から外上方に短くひらき、口縁端部は鋭い。託（17・18）は环部と脚部の接合部上面に穿孔を有している。片口塊（19）は丸底の底部から丸味を持ちながら緩やかにひらき、口径17.6cm、器高6.6cmである。片口鉢（20）は平底で口縁部がわずかに外反し、口径27.6cm、器高19.6cmである。底部切り離し手法のヘラ切りと糸切りの共存と法量（口径・底径・器高）から12世紀後半～13世紀前半の時期に比定される。

参考文献

面高哲郎 1988 「権現昔遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第31集、宮崎県教育委員会

岡本武憲 1995 「九州南部」『概説 中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会

桑畑光博 2004 「都城盆地における中世土器の編年に関する基礎的研究（1）」『宮崎考古』第19号、宮崎考古学会



第48図 権現昔遺跡出土遺物実測図 (S=1/4)



写真 13 権現昔遺跡全景（北から）



写真 14 北端の東西溝状遺構



写真 15 東西溝状遺構内遺物出土状況

第11節 多宝寺遺跡（たほうじ）

所在地：宮崎市大塚町六ツ合 立地：大淀川右岸の微高地（標高7m）

調査原因：街路生目通線改良工事

調査年月日：昭和62（1987）年9月18日～12月5日

調査面積：700m² 調査員：面高哲郎

1. 概要

昭和51年刊行の文化庁の『全国遺跡地図 宮崎県』では「六ツ合遺跡」として記載されていたが、昭和59年刊行の宮崎市教育委員会の『遺跡詳細分布調査報告書』で弥生時代遺物散布地として「多宝寺遺跡」に名称が変更された。

多宝寺遺跡は大淀川右岸の標高7mの微高地に位置し、北・西・南側を蛇行した竹下川に面する（第52図）。古墳時代後期の竪穴建物跡4軒・土坑2基・竪穴状遺構2基が検出された。すべて方形プランで、規模が確認できた2軒は、SA1が8.5m×8.2m、SA2が一辺5mである。SA2は柱穴が4本で、床面中央部に「理縫」である土器埋設炉と南壁西寄りに竈が共存している（第50図）。両者共存の事例としては県内初である。土器埋設炉はSA3も有する。切り合い関係は5号竪穴状遺構→SA1・4、6号竪穴状遺構→SA1→SA2、SA4→SA3である。出土した須恵器・土師器は陶邑編年のTK43～TK209新段階で6世紀後半～7世紀初頭の集落である。なお宮崎平野部では竈はTK43～TK209併行（6世紀後半）に本格的に導入され、その時期以降竪穴建物内での土器埋設炉との共存がみられ、特に大淀川下流域に顕著である（今塩屋2004）ことから、当遺跡はその初現期に相当する。また当該期の近接する集落跡である竹之下遺跡でTK209古段階～TK217古段階の竪穴建物跡が10軒調査されている。

平安時代～中世の焼土が1箇所検出され、古代の内黒土器や中世の口径8.7cm・底径6.6cm・器高1.4cmの糸切り土師器皿なども出土している。

2. 基本層序

I層：表土（盛土）、II層：褐色土層（粘質）、III層：砂層（褐色粘質土を若干含む）

3. 遺構と遺物

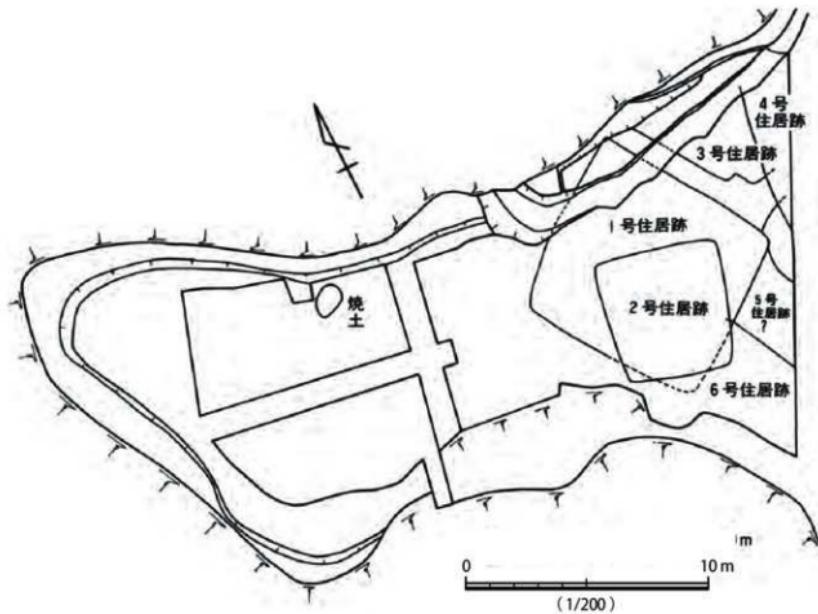
SA1出土には口縁部が胴部から内湾気味に立ち上がる平底鉢（第51図1）、口縁部が胴部から直に立ち上がる小型甕（2・3）、口縁部が直立する平底壺（4・5）、模倣壺、口径15.8cmの須恵器壺蓋（7）、長い立ち上がりがほぼ直の壺身（6）がある。SA2出土には口縁部がそのまま外に開く平底壺と口縁部が短く内湾する壺（8）である。SA3出土には口縁部と胴部の境に刻み目突帯を有する甕（12）、短い口縁部が内湾する球形胴部丸底の小型丸底甕（13）、ミニチュアの手捏鉢（16）、口縁部が屈曲する模倣壺（14）、口縁端部に段を有する口径15.0cmの須恵器壺蓋（17）、長い立ち上がりの壺身（18）、口縁部外面にヘラ状工具による刻み目を有する口径13.2cmの壺蓋（20）がある。SA4出土には模倣壺がある。SA6出土には刻み目突帯を有する甕（22）、小型高壺、脚部が大きく広がる大型高壺がある。

参考文献

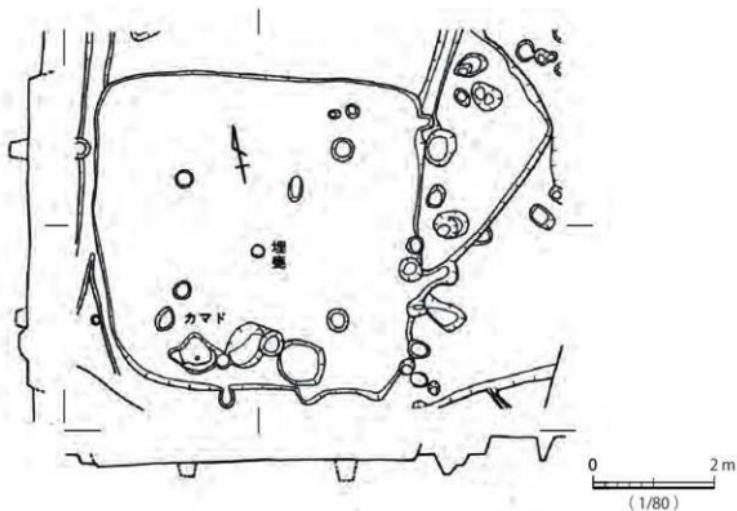
面高哲郎 1988 「多宝寺遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第31集、宮崎県教育委員会

面高哲郎 1989 「多宝寺遺跡」『宮崎県史』資料編考古2、宮崎県

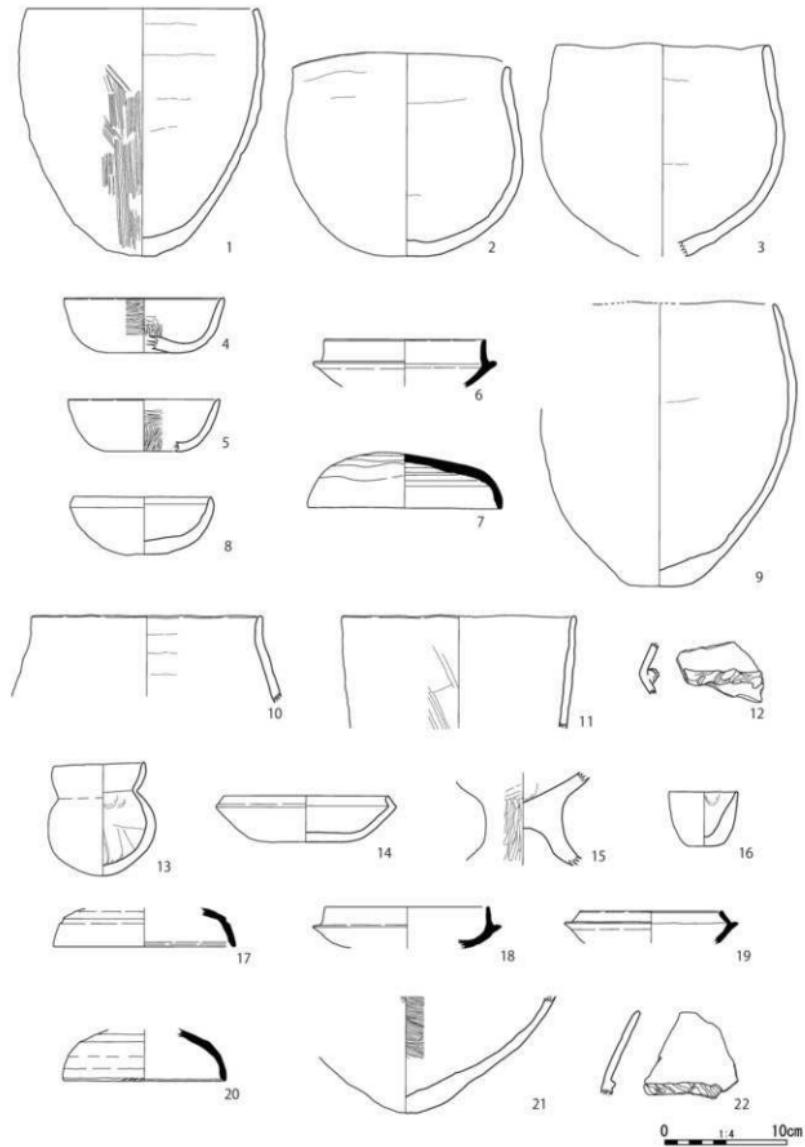
今塩屋毅行 2004 「南部九州古墳時代の火遁」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』



第49図 多宝寺遺跡遺構分布図 (S=1/200)



第50図 多宝寺遺跡 2号竪穴建物跡実測図



第51図 多宝寺遺跡出土遺物実測図 (S=1/4) 1～7: SA1、8: SA2、9～20: SA3、21・22: SA6
※ 4・5は同一個体の可能性あり



写真 16 多宝寺遺跡遺構検出状況

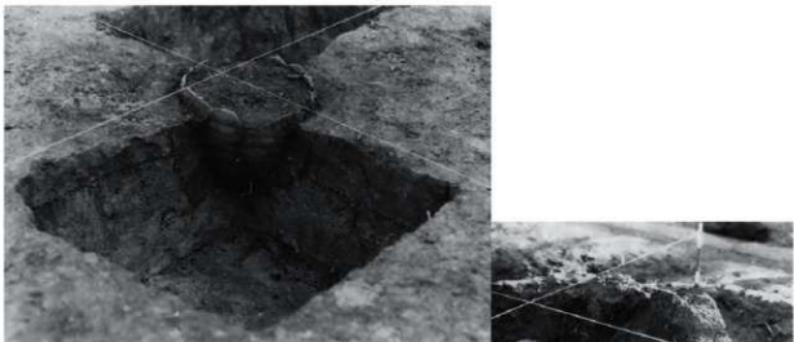


写真 17 2号竪穴建物跡埋甕出土状況



写真 18 2号竪穴建物跡窓内土製支脚出土状況

第12節 大淀3号墳（おおよど）

所在地：宮崎市大塚町時宗 立地：大淀川右岸の微高地（標高7m）

調査原因：街路生目通線改良工事

調査年月日：昭和62（1987）年5月19日～7月15日

調査面積：520m² 調査員：長津宗重

1. 概要

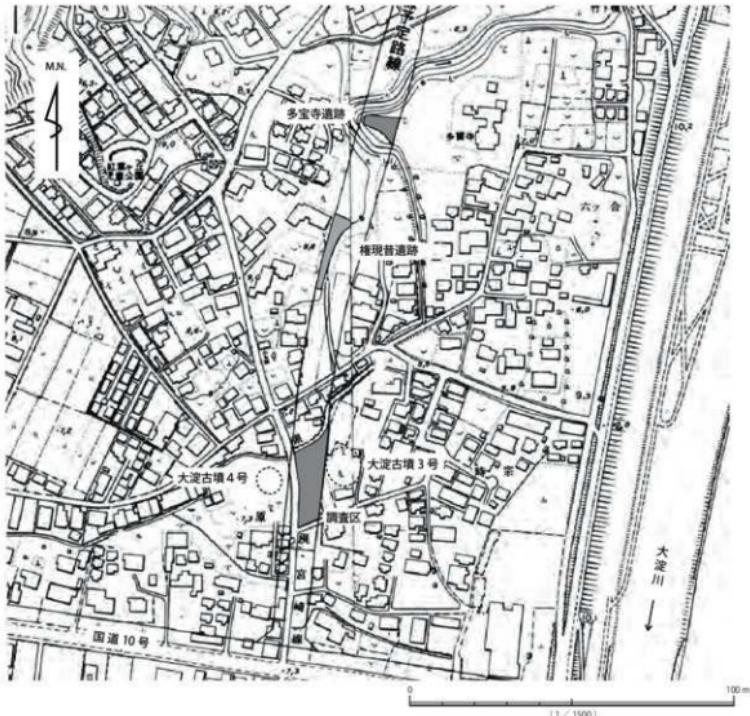
大淀3号墳は大淀川下流域に広がる宮崎平野低地群の大淀・本庄・綾南低地に位置する。昭和12（1937）年7月2日に大淀古墳群（前方後円墳3基・円墳3基・横穴墓1基）の前方後円墳として県指定されているが、周辺の宅地化によって前方部は完全に削平されており、現在は後円部のみが残る（第52図）。残存する後円部は直径約40m、高さ5.5mの規模であるが、墳端を削平しているところもある。今回の調査で確認された後円部西側の周堀は幅9.0～9.5m、深さ0.6～0.9mを測り、盾形の周堀ではなく後円部を円形に廻るため前方後円墳の可能性がある。後円部の埴丘から落下した壺形埴輪（底部穿孔二重口縁壺）が周堀底から出土している。この壺形埴輪は二重口縁を有し、筒状の頭部はやや長く太いタイプで、焼成前に底部穿孔している。形態は佐賀県金立銚子塚古墳例に近く、IV期（片岡1985）に相当し、前期の4世紀末に比定される。100m級の前方後円墳と推定される。

2. 遺構

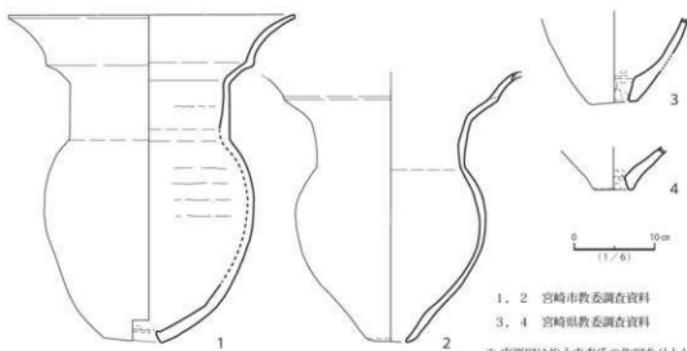
出土した壺形埴輪は焼成前に底部穿孔を行い、二次口縁部が大きく外反する二重口縁を有し、筒状に直立した頭部はやや長く太いタイプで、長胴である。今回の調査では口縁部（第54図1～9）・頭部（10～12）・底部（16～26）の部位のみで全体を復元できるものは出土しなかったが、全容を窺えるものは宮崎市教育委員会が後円部北側の調査で出土した壺形埴輪の実測図（第53図1・2）が紹介され、佐賀県金立銚子塚古墳例に近く、前方後円墳集成編年（広瀬1992）4期に比定されている（有馬2000）。壺形埴輪（底部穿孔二重口縁壺）の底部穿孔には、①刀子等で底部に穿孔を施す例り貫き成形法、②ドーナツ状の基底に粘土紐を積み上げて胴部を成形していく積み上げ成形法があり、①は福岡県三国の鼻1号古墳・佐賀県金立銚子塚古墳などの前方後円墳集成編年の3期まで、②は福岡県老司古墳・熊本県院塚古墳などの集成編年の4・5期を中心とするとしている（竹中2004）。大淀3号墳の壺形埴輪の底部穿孔は①もわずかにみられるが、ほとんど②である。

参考文献

- 片岡宏二 1985 「二重口縁壺の検討」「三国の墓道跡！」小都市文化財調査報告書第25集
- 長津宗重 1988 「大淀3古墳」宮崎県文化財調査報告書 第31集、宮崎県教育委員会
- 永友良典 1989 「大淀古墳群」宮崎県史資料編 考古2、宮崎県
- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」「前方後円墳集成」九州編、山川出版社
- 有馬義人 2000 「宮崎県の埴輪－その導入と展開－」「九州の埴輪－その変遷と地域性」、九州前方後円墳研究会
- 竹中克繁 2004 「九州壺形埴輪研究評論」「熊本古墳研究」第2号、熊本古墳研究会



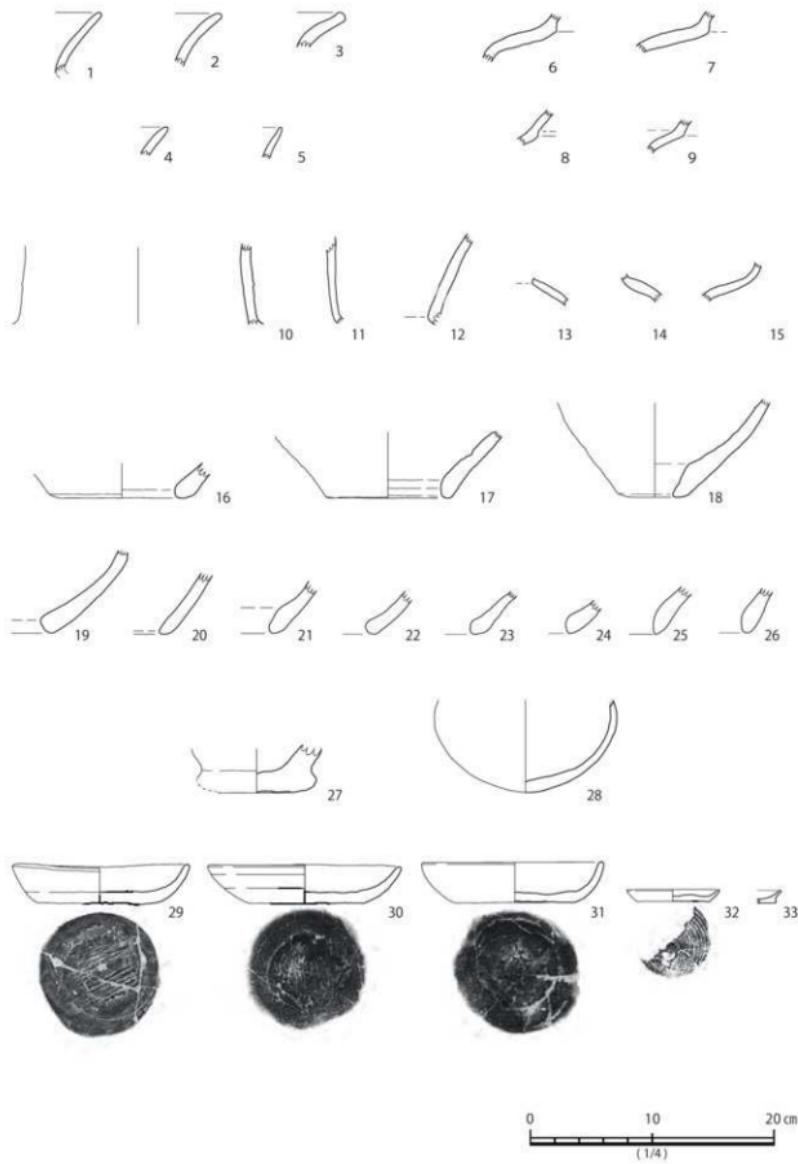
第52図 大淀3号墳調査区及び周辺遺跡位置図 ($S=1/1,500$)



1, 2 宮崎市教委調査資料
3, 4 宮崎県教委調査資料
※実測図は松永幸寿氏の作図をリトレース

出典:「九州の埴輪 その変遷と地域性 一亜形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾一」九州前方後円墳研究会 2000

第53図 大淀3号墳出土遺物実測図 (1) ($S=1/6$)



第 54 図 大淀 3 号墳出土遺物実測図 (2) ($S=1/4$)



写真 19 大淀 3 号墳遠景（西から）



写真 20 大淀 3 号墳周堀完掘状況（南から）

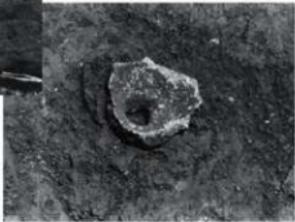


写真 21 大淀 3 号墳
底部穿孔壺形埴輪出土状況

第13節 青木遺跡（あおき）

所在地：宮崎市田野町大字梅谷 立地：山住川南岸の舌状に張り出した丘陵部

調査原因：国道269号バイパス改良工事に伴う調査

調査年月日：平成5（1993）年9月20日～12月23日

調査面積：8,000m² 調査員：竹井真知子・飯田博之・山田洋一郎

1. 概要

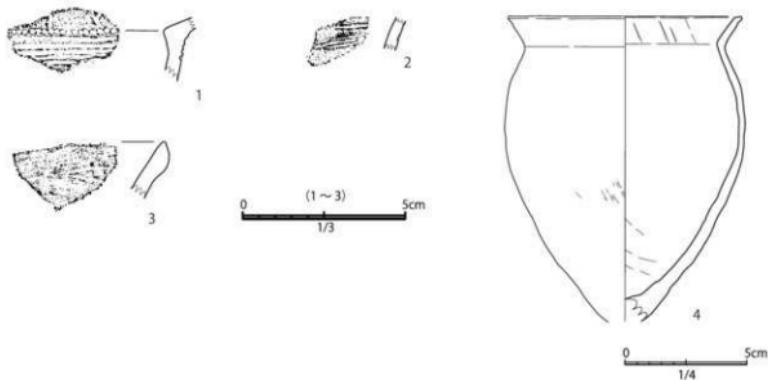
調査の結果、時期不明土坑2基が検出された。調査区全体に近代の遺構（芋貯蔵穴等）や近年の大規模な擾乱が多く、遺跡の立地条件の良さから推測される程の調査成果は得られなかった。台地の舌状丘陵部には古墳～平安時代の遺物包含層（I層）が堆積しており、層中より土師器や布目痕土器、須恵器、陶磁器類が200点程出土している。調査区の隨所にトレンチを設定し下層を確認するものの、K-Ahの堆積も悪く、すぐに基盤層に達する部分が多い。一部VI層直下より焼碟、石礎、土器片8点が出土した。

2. 基本層序

I層：やや明るい黒褐色土、II層：黒味の強い黒褐色土、III層：黄味の強い黒褐色土、IV層：黄褐色土（III～V層の漸移層）、V層：K-Ah、VI層：粗粒K-Ah、VII層：黄味のない暗褐色土

3. 遺構と遺物

遺物は縄文土器片（1～3）の他に、土師器の甕（4）や、須恵器の裏腹部片、近世の土人形片、18世紀後半頃の肥前系磁器類、同期備前焼花瓶片などが出土している。遺物は、4を除く殆どが小破片である。



第55図 青木遺跡出土土器実測図 (S=1/3, 1/4)

第14節 生駒遺跡（いこま）

所在地：小林市大字南西方字生駒 立地：霧島連山夷守岳の北裾部、巣之浦川支流の左岸標高約384mの台地上

調査原因：県営広域営農団地農道整備事業霧島北部地区

調査年月日：平成4（1992）年12月14日～平成5（1993）年1月22日

調査面積：750m² 調査員：菅付和樹・中村真由美

1. 概要

遺跡は、北東側の小河川へとなどらかに傾斜した斜面に位置する。調査区一帯は、南西にある小林市立幸ヶ丘小学校を含む生駒遺跡として縄文～弥生時代の周知の遺跡である。小林市史によると同小学校の運動場拡張の折、地表下約1m内外から磨製石斧・打製石斧・石匙・縄文土器（轟A式と思われる条痕文土器）・石庖丁などが出土したようである。

調査は、工事の工程上、期間的に厳しい状況であったため、遺物の出土状況を見ながらトレンチを拡張させる方法で実施した。調査区の現況は、緩斜面に造成された上中下3段の畑であったが、最上段（A区）はゴボウ作付け用のトレンチャード畑の長軸方向に攪乱を受けており、最下段（C区）は同じく格子目状に激しい攪乱を受けていた。中段（B区）の畑のみ遺物包含層が良好な状態で残存し、この畑を中心に縄文時代中期の遺物、散礫および集石遺構3基が検出された。

2. 基本層序

I層：黒褐色砂質土（20～30cm耕作土）、II層～II'層：暗黄褐色砂質土（30～50cm II層は軟質、II'層はブロック状に堆積し硬質、両層は面的には分けがたい）、III層：暗黄褐色砂質土（15～20cm II・II'層より暗色）、IV層：暗黄褐色砂質土（10～25cm 粘性強い II層より明色）、V層～V'層：暗黄褐色～黄褐色砂質土（30～50cm 上部はアカホヤ火山灰（K-Ah）の小ブロックを多量に含みIV層より明色、下部はブロック状に堆積したK-Ah）、VI層：灰褐色砂質土（10cm～硬質 牛のすね火山灰か）

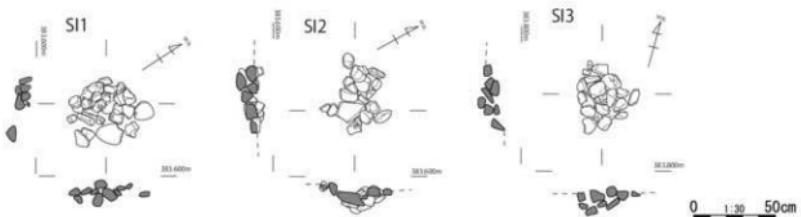
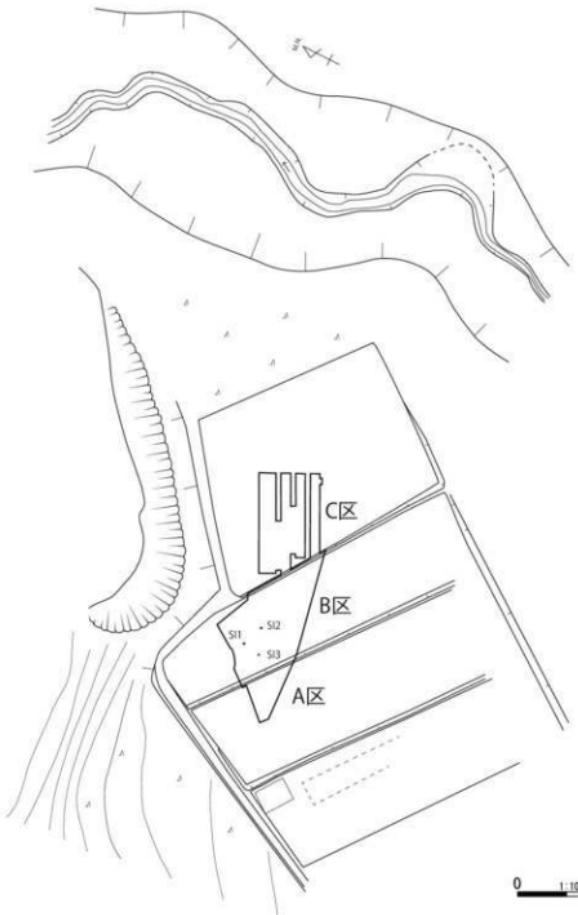
3. 遺構と遺物

遺物はII層からV層まで出土するがII・II'層が最も多く、III～V層は石器剝片などが少量出土するのみである。集石遺構（SI1～SI3）はIII層からIV層にかけて、多くの土器片より下位で検出された。遺物の出土が多かったII・II'層中では、遺構埋土と考えられるような遺物の集中箇所等は見られず、堅穴建物跡等の遺構は検出できなかった。しかし、縄文地文のいわゆる本野タイプの土器が比較的まとまって出土した付近でSI3は検出されている。

土器は、縄文時代早期の中原式・轟A式土器が各1点、前期の轟B式土器（屈曲タイプ）が少量、後期の轟B式・出水式・三万田式土器などが少量出土しているほかは、出土土器の大半は中期の野久尾式（条痕地文）・本野タイプ（縄文地文）・船元II～III式もしくは春日式北手牧～前谷段階と考えられる土器である。このうち底部には、条痕文が施される尖底、縄文が施される尖底・角張った平底・や上げ底のものが見られる。石器は、すり減った凹面を持つ石皿片6、一部に磨面が見られる台石5、磨石6、敲石2、凹石1、石鍬2（打欠1・切目1）、石錐22、石匙11、打製石鏃130（完形71・欠損59うちチャート55%、黒曜石40%）、同未製品6、異形石器1、楔形石器5、尖頭状石器27（うち4点は極小）、石核9、二次加工剝片8、調整剝片3のほかチャート・黒曜石等碎片を含む多量の剝片類が出土しているが、石斧は出土していない。

参考文献

宮崎県小林市役所 1965「小林市史」第一巻

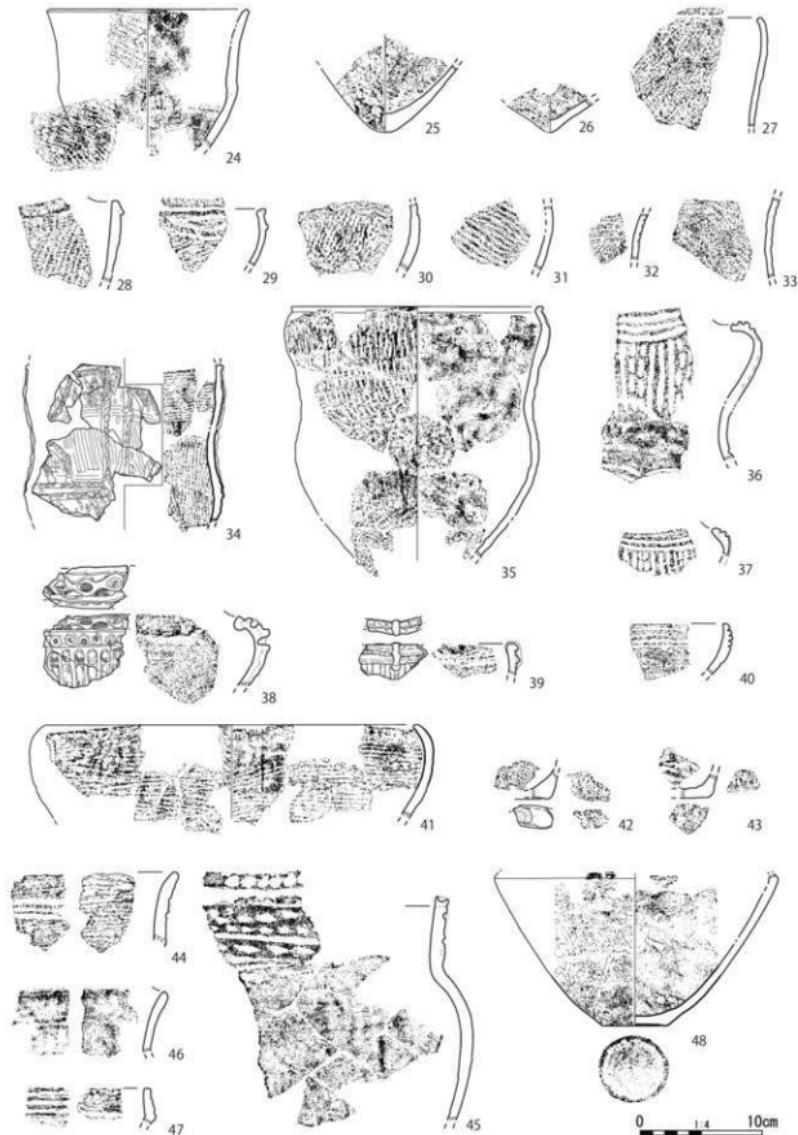


第56図 生駒遺跡遺構分布図 (S=1/1,000)・集石遺構実測図 (S=1/30)



第 57 図 生駒遺跡出土縄文土器実測図（1）(S=1/4)

1：中原式、2～6：轟B式、7～15：野久尾式、16～17：条痕底面部、18～23：本野タイプ



第 58 図 生駒遺跡出土縄文土器実測図 (2) (S=1/4)

24: 縄文、27~41: 船元・春日式、44: 縁 B 式、45: 出水式、46~48: 三万田式以降、25~26・42~43: 縄文底部

第15節 神の原遺跡（かみのはら）

所在地：小林市大字細野字神の原 立地：霧島連山奥守岳の東北東裾部、標高約287～288mの台地上

調査原因：県営広域営農団地農道整備事業霧島北部地区

調査年月日：平成7（1995）年8月4日～8月31日

調査面積：910m² 調査員：東 憲章

1. 概要

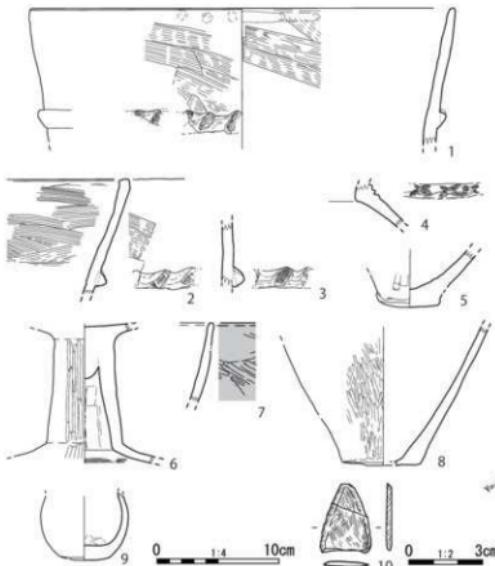
遺跡は、独立行政法人畜改良センター宮崎牧場西牧場の南斜面に位置し、II層明褐色土から古墳時代後期の遺物と溝状遺構1条、土坑3基などを検出している。

2. 基本層序

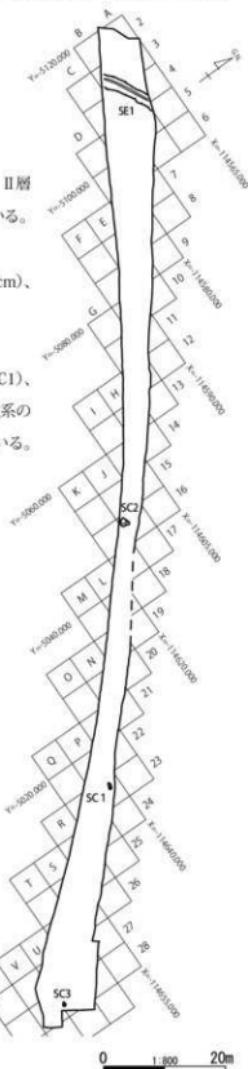
I層：表土（8cm）、II層：明褐色土（20cm）、III層：黄白色スコリア（7cm）、以下、IV層からⅨ層まで約1m続きⅩ層がアカホヤ火山灰層である。

3. 遺構と遺物

時期不明の溝状遺構のほか117×43cm、深さ23cmの楕円形土坑（SC1）、径約130cm、深さ54cmの不定形土坑（SC2）等を検出。II層からは成川式系の土器が一定量（丹塗土器は少ない）出土し、台石1・磨製石器1も出土している。



第60図 神の原遺跡第II層遺物実測図



第59図 神の原遺跡遺構分布図 (S=1/800)

第16節 前ノ原遺跡（まえのはる）

所在地：小林市大字細野字前ノ原 立地：霧島連山夷守岳の東北東裾部、

洗出川右岸標高約273mの台地上

調査原因：県営広域農道整備事業霧島北部地区

調査年月日：平成7（1995）年6月26日～7月28日

調査面積：1,000m² 調査員：東 憲章

1. 概要

遺跡は、独立行政法人家畜改良センター宮崎牧場の東向きの緩斜面で、一般県道霧島公園小林線と当該広域農道の交差地点から北西側に位置する。古墳時代中期の遺物包含層掘削後に竪穴建物跡2軒を検出した。

2. 基本層序

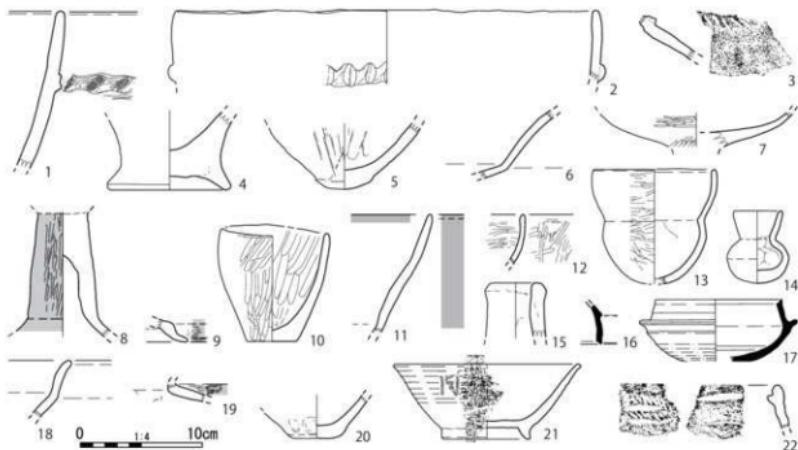
I層：耕作土（30cm）、II層：黒色土（18cm 調査区の1/3のみ残存）、

III層：褐色ローム（25cm～）、III'層：明褐色ローム（40cm～無遺物層）

両者の層境は漸移的。

3. 遺構と遺物

II層下位からIII層で、多量の古墳時代中期～後期の土器が出土している。III'層上面では調査区の北側で方形プランの竪穴建物跡2軒（SA1・2）を検出した。SA1は、一辺約3.55m、深さ約40cmで、床面中央には焼土や焼化物を含む深さ約20cmの土坑が、その両側には主柱穴2基が検出された。出土遺物のうち須恵器の环身・蓋は検出面付近の出土である。SA2も深さ約40cmの方形プランである。遺物は少ない。このほかIII層上面から古代の高台付跡が1点出土したが、この跡には「日」と思われる墨書きや「井」の字状の数本の線刻が見られ、高台に発色の異なる粘土を使用している。



第61図 竪穴建物跡 (S=1/200)

第 17 節 大鹿倉遺跡（おかくら）

大鹿倉遺跡では、2カ年度に渡って大きく2地点の発掘調査を実施した。そこで、以下では第1次調査と第2次調査に分けて報告する。

A. 第1次調査

所在地：西諸県郡高原町大字広原 5066 番地他 立地：霧島連山裾部の丘陵上（標高約 230～250m）

調査原因：畜産試験場生産基盤整備事業

調査年月日：平成9（1997）年7月16日～平成10（1998）年3月30日

調査面積：5,840m² 調査員：松林豊樹、大坪博子、太川裕晴

1. 概要

大鹿倉遺跡は霧島連山夷守岳東側裾部付近の非常に起伏に富んだ丘陵地に広がる遺跡で、西側の1段高い丘陵上には旭台地下式横穴墓群が分布している。遺跡の大部分は県の畜産試験場用地として活用されており、今回の調査原因も畜産試験場の試料畠の生産性向上を目的とした圃場整備であった。まず、調査対象地 27,000m²に対してトレレンチ 16ヶ所を設定して確認調査を行い、工事計画と照合して調査が必要な範囲を3ヶ所（I～III区）に絞り込んだ。その後、3ヶ所について本調査を実施し、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物を検出した。

2. 基本層序

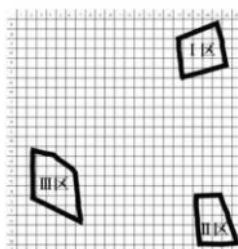
I層：表土、II層：高原スコリア、III層～VI層：縄文時代後期～古代遺物包含層、VII層：御池ボラ

3. 遺構と遺物

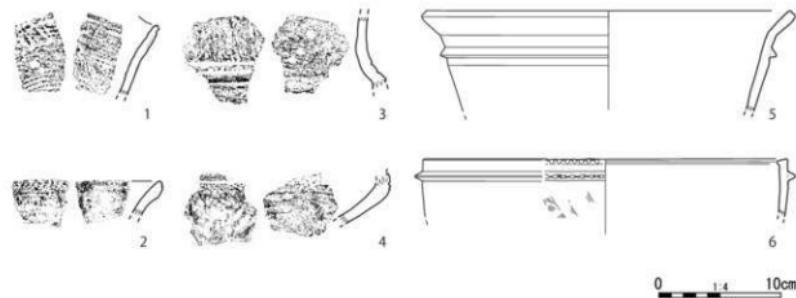
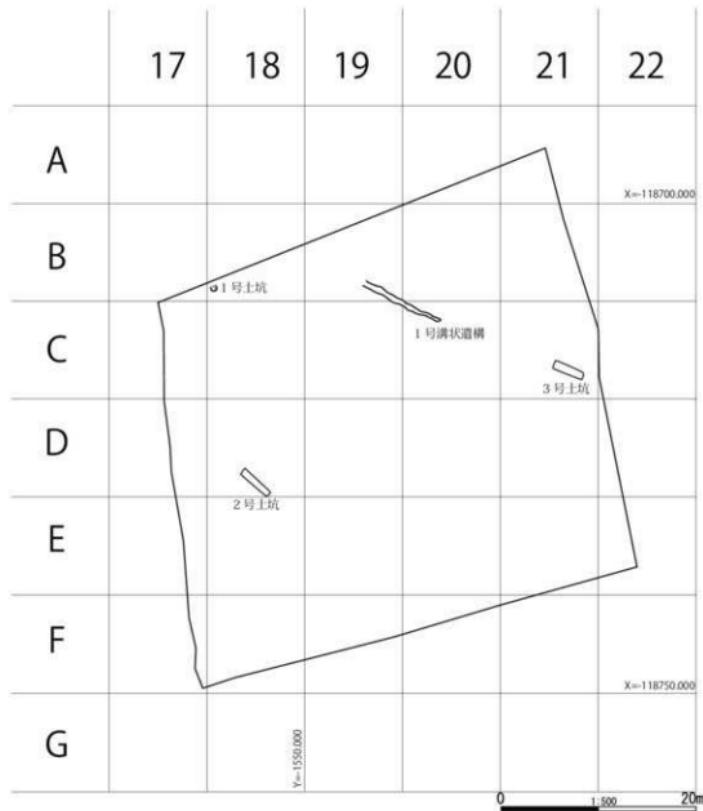
遺構としては、I区で溝状遺構1条、土坑3基、II区で土坑4基、III区で溝状遺構2条、土坑2基を検出した。検出された土坑9基のうち8基（2～8号）は陥れ穴状遺構で、いずれも細長い隅丸長方形状の平面プランで中央付近に長軸方向に並ぶ数基の逆茂木痕がみられた。遺物は伴わなかったものの、II層を主体とする埋土の状況から古代以降の所産と考えられる。なお、6号土坑の埋土中から検出された炭化材について年代測定を実施したところ、 370 ± 50 年 BP の補正 ^{14}C 年代を得ている。また、1号土坑ではコナラの炭化種実が検出され、 $2,020 \pm 50$ 年 BP の補正 ^{14}C 年代を得ている。溝状遺構についてはいずれも浅く、遺物が伴わないため時期用途とともに不明である。

遺物では、縄文時代後期の市来式や鐘崎式系の土器、晩期の三万田式、刻目突帶文土器、弥生時代中期～後期の土器、古墳時代前期～中期の土師器や須恵器、古代の土師質土器が出土している。出土状況としては、II区で縄文土器の出土が多く、III区で古代の土器が比較的多くみられた。

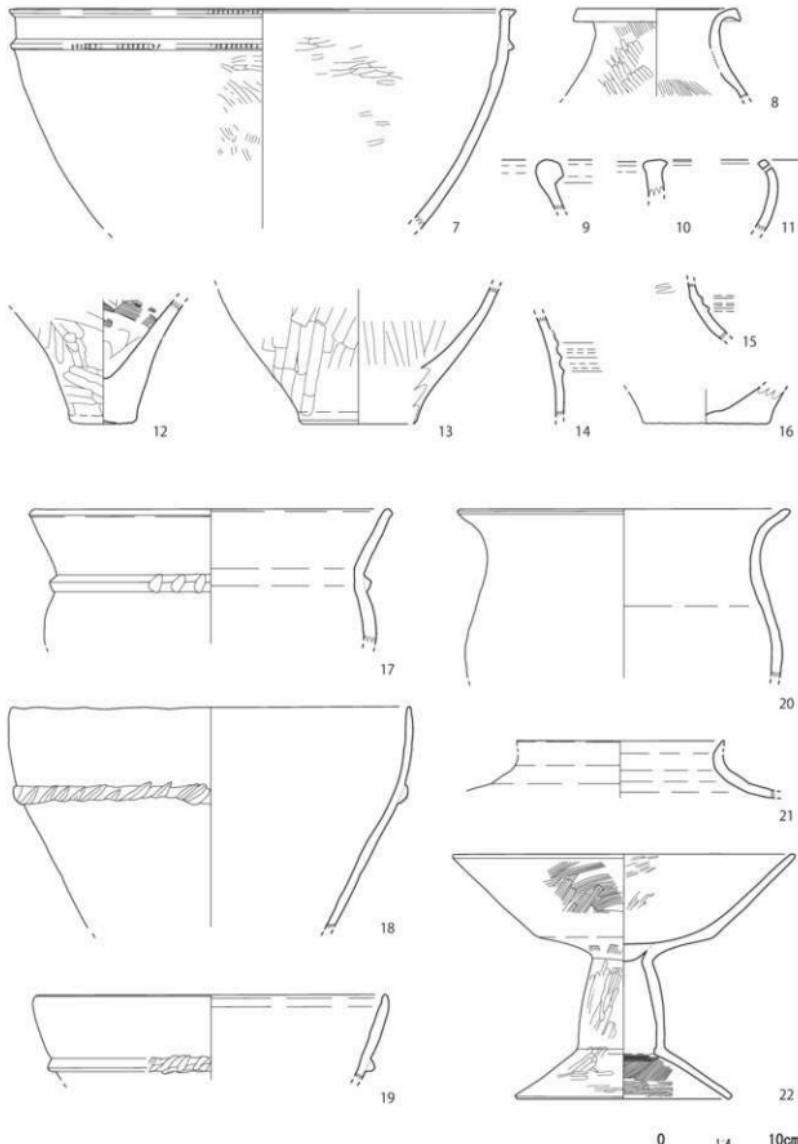
上記のほか、本遺跡ではII層直下で検出された樹根について樹種同定及び年代測定を実施しており、樹種はクスノキで 1110 ± 50 年の BP 補正 ^{14}C 年代を得ている。この樹根は焼けており、その原因是高原スコリアの降下と考えられることから、今回得られた年代観は、高原スコリアの降下年代に極めて近い可能性が高い。



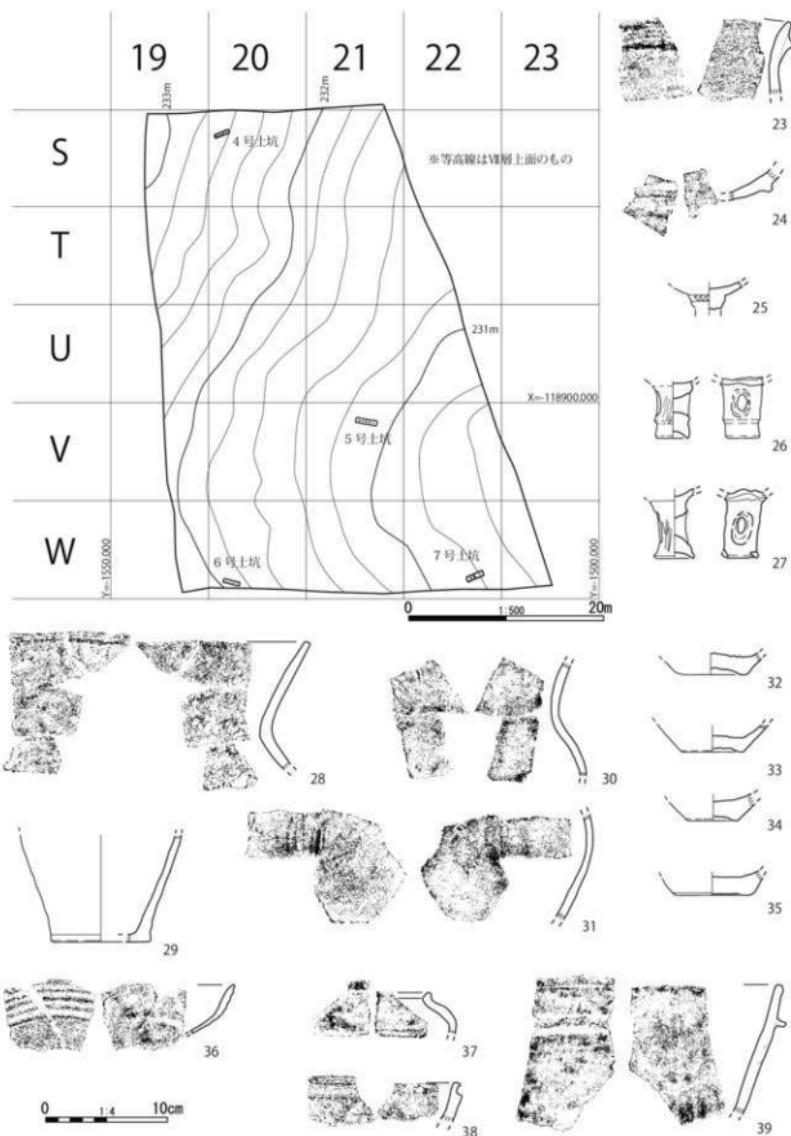
第63図 大鹿倉遺跡（1次）
調査区配置図（1/5,000）



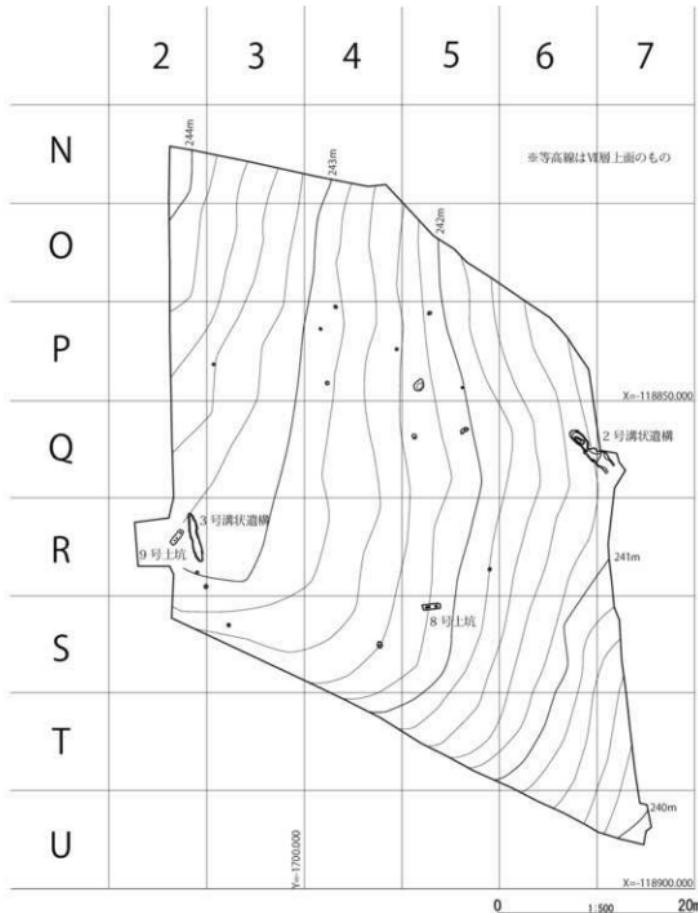
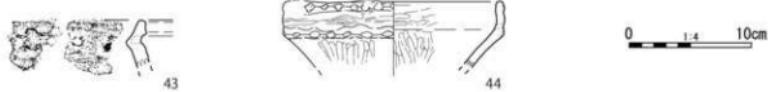
第64図 大鹿倉遺跡（1次）I区遺構分布図（S=1/500）及び出土遺物実測図（1）（S=1/4）



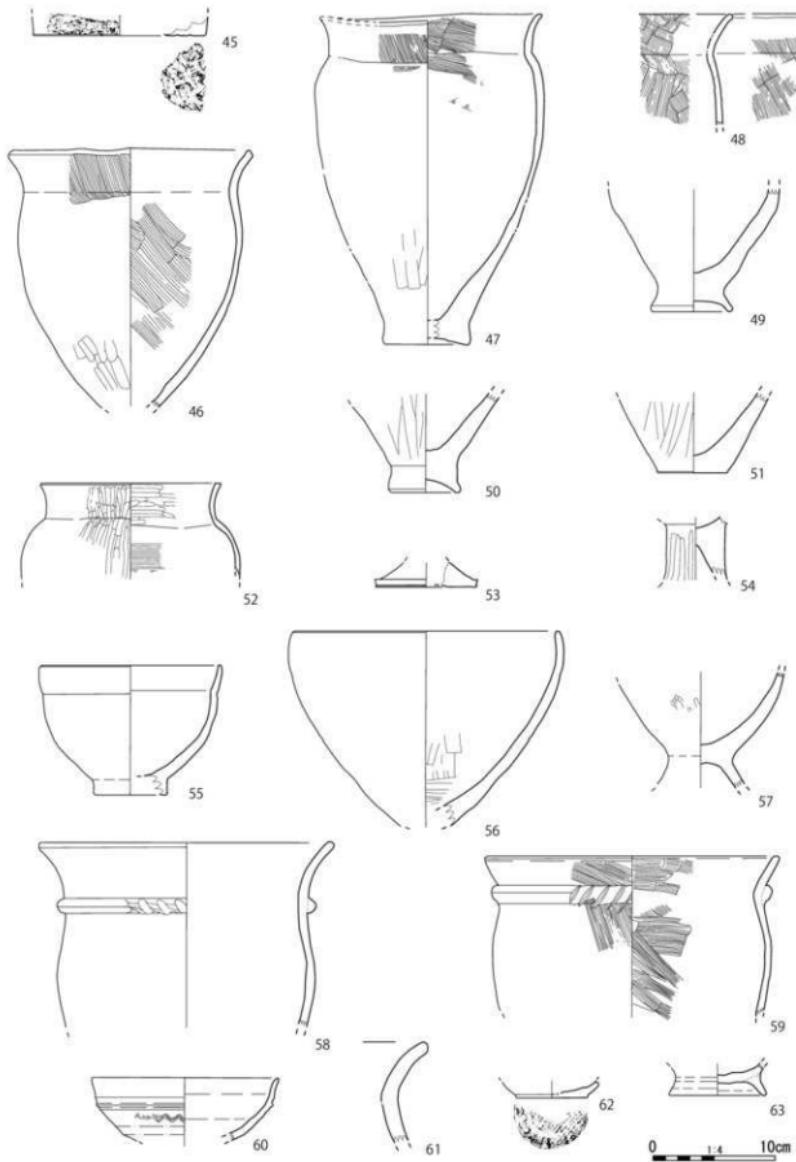
第65図 大鹿倉遺跡（1次）I区出土遺物実測図（2）(S=1/4)



第66図 大鹿倉遺跡（1次）II区遺構分布図（S=1/500）及び出土遺物実測図（1）（S=1/4）



第67図 大鹿倉遺跡（1次）II区出土遺物実測図（2）(S=1/4) 及びIII区遺構分布図（S=1/500）



第68図 大鹿倉遺跡（1次）Ⅲ区出土遺物実測図（S=1/4）

B. 第2次調査

所在地：西諸県郡高原町大字広原 5066 番地他 立地：霧島連山裾部の丘陵上（標高約 230～240m）

調査原因：畜産試験場生産基盤整備事業

調査年月日：平成 10（1998）年 10 月 26 日～平成 11（1999）年 3 月 31 日

調査面積：5,015m² 調査員：南正覚雅士、下田代清海

1. 概要

1 次調査に続き、1 次調査地点から 250m ほど南側の圃場について調査を実施し、縄文時代から中世にかけてまでの遺構・遺物を検出した。

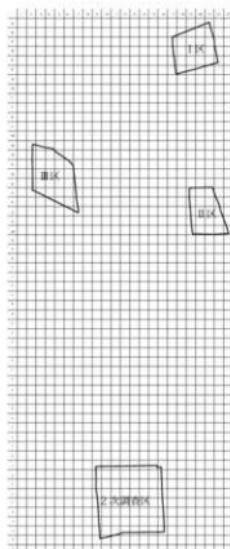
2. 基本層序

I 層：表土、II 層：高原スコリア、III 層：黒褐色土、IV 層：灰色土、V 層：灰褐色土、VI 層：黒褐色土、VII 層：暗褐色土（遺物包含層）VIII 層：黒色土（遺物包含層）IX 層：御池ボラ層

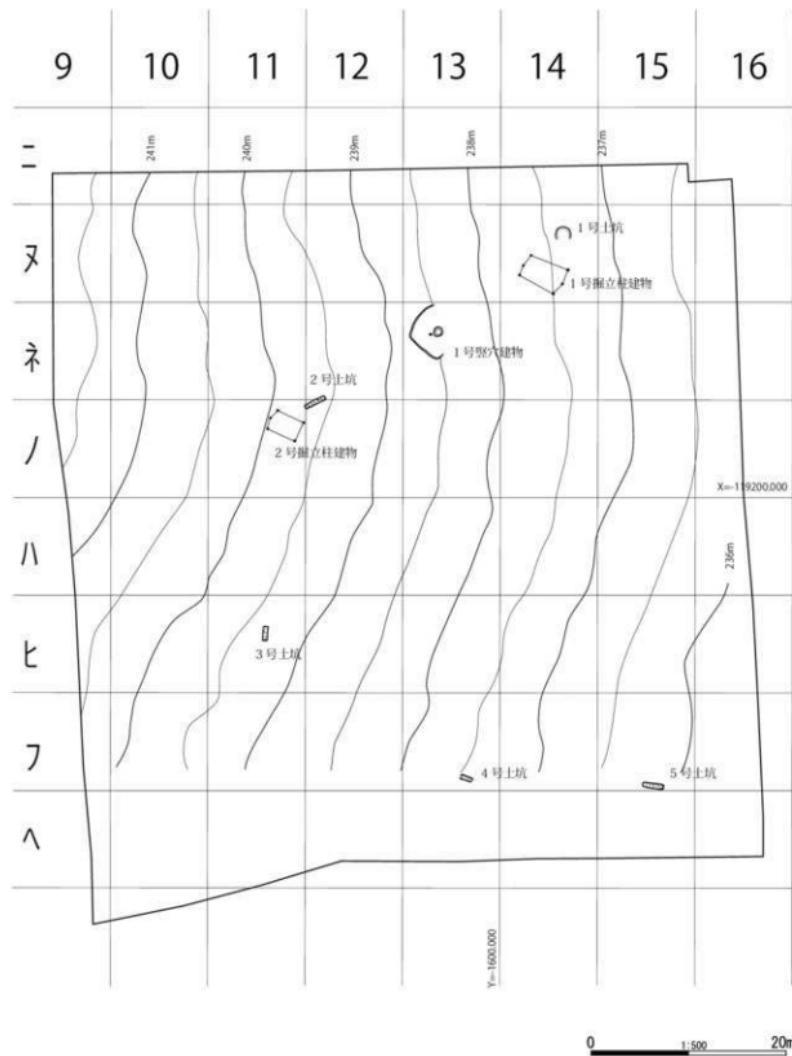
3. 遺構と遺物

遺構としては、IV 層上面で陥穴状遺構 4 基、土坑 1 基、IX 層上面で掘立柱建物跡 2 棟、竪穴建物跡 1 軒を検出した。陥穴状遺構は 1 次調査で検出されたものと類似した細長い長方形の平面プランで、その中央に長軸方向に並ぶ逆茂木痕跡がみられるものであった。埋土の状況も 1 次調査で検出されたものと同様に II 層を主体とするものであったことから、古代以降の所産と考えられる。掘立柱建物は 2 棟ともに 1 間 × 2 間の小規模なもので、周囲から古代の土師質土器の痕が出土している。竪穴建物は 4 m × 4 m 程度の方形に近い平面プランのもので、中央に土坑が伴い、その脇に柱穴がみられるが、1 基しか検出されていないため主柱は明確でない。出土遺物（77・79・84）から弥生時代後期の所産と考えられる。

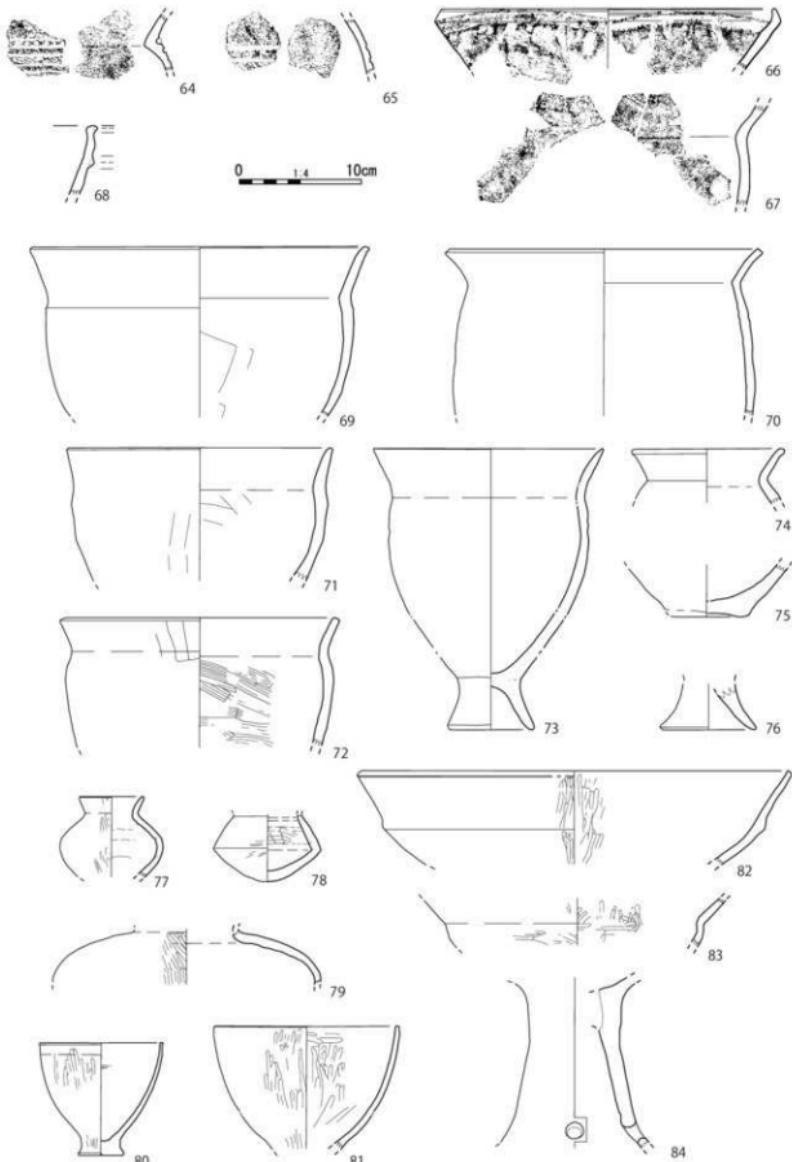
遺物では、わずかながら縄文時代晚期の、黒川式土器や石器が出土しているほか、弥生時代後期の土器が多く出土している。また、古代の土師質土器や回転台土師器も少量出土している。なお、固化していないが、竪穴建物跡からは数個体の石包丁が出土しているほか、植物珪酸体分析の結果、VII・VIII 層中から稻のプラント・オバールが検出されている。



第 69 図 大鹿倉遺跡（1・2次）
調査区配置図（1/5000）



第 70 図 大鹿倉遺跡（2 次）調査区遺構分布図 ($S=1/500$)



第71図 大鹿倉跡遺（2次）調査区出土遺物 ($S=1/4$)

第18節 大谷遺跡（おおたに）

所在地：西諸県郡高原町大字広原字大谷 立地：霧島連山新燃岳の東裾部、標高約278mの台地上

調査原因：県営広域營農団地農道整備事業霧島北部地区

調査年月日：平成7（1995）年6月19日～8月4日

調査面積：670m² 調査員：重山郁子

1. 概要

遺跡は、高崎川とその支流とに挟まれた左岸台地上に立地する。調査区は、北西側が高く南東側へと約2m程度傾斜する。調査では、表土や高原スコリア等を約1.8m除去した後、II層上面で竪穴建物跡・土坑各1基と多数の溝状遺構（畑の畝間の溝痕跡）が検出された。また、III層下部からIV層で、埋甕・配石遺構・竪穴建物跡各1基とピット群が検出されている。

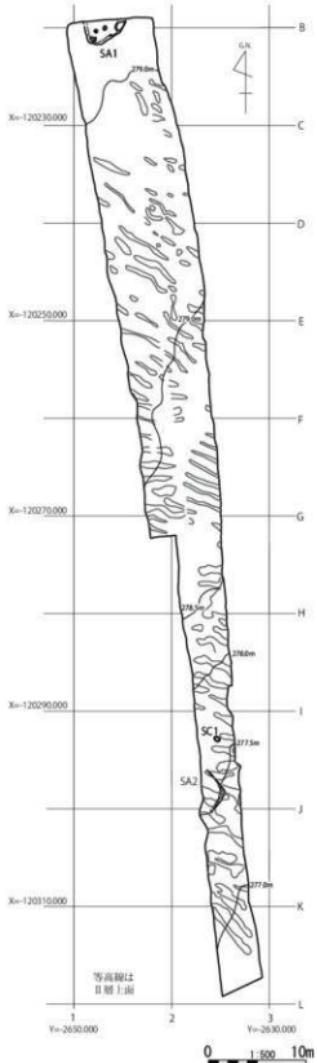
2. 基本層序

上層の火山灰層をA～G層に分層後、その下位層をI～VI層としている。

A層：表土（40cm前後）、B層：高原スコリア（85cm前後、黒色土を挟んで3層に分層できる）、C～E層：灰黒褐色土～黒褐色土（40cm前後、乾燥すると凝固）、F層：黒褐色土、G層：赤褐色火山砂（2cm前後）、I層：黒褐色土（18cm前後）、II層：明褐色土（40cm前後）、III層：黒色土（15cm前後）、IV層：御池軽石混黒褐色土（27cm前後）、V層：黒褐色土（10cm前後、御池軽石微量）、VI層：白色火山灰（2cm前後）、以下、黒褐色土、赤橙色軽石と続き、約2m下でアカホヤ火山灰層となる。

3. 遺構と遺物

I～II層からは、多数の古墳時代後期の丹塗磨研土器片（主に高环等）が出土し、量は多くないが縄縦突帯のある甕・壺形土器も出土している。II層上面検出の竪穴建物跡（SA1）は部分的な検出ながら深さが約70～80cmあり、床面に3基のピットを有する。SA1からは少量の丹塗磨研土器片や風化した磨製石斧ほか縄文土器片が出土している。高原スコリア（B層）が13世紀前半の噴出とされているため、その下位のC～G層およびI層の下で検出された畝間の溝痕跡と思われる多数の溝は、古墳時代後期以降平安時代までの間にわざる畑跡と考えられ、SA1は古代の遺物が出土していないことから古墳時代後期の遺構であろう。なお、I層からは1点のみ須恵器片が出土している。

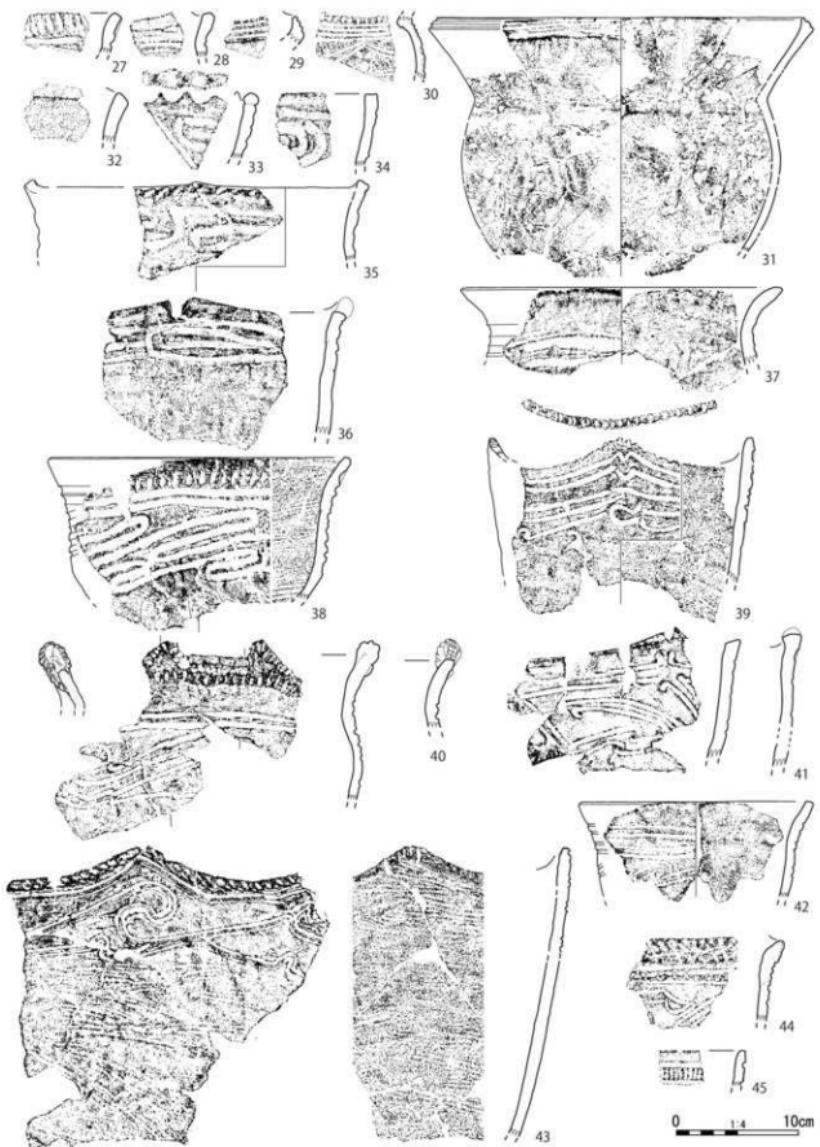


第72図 大谷遺跡遺構分布図 (S=1/500)

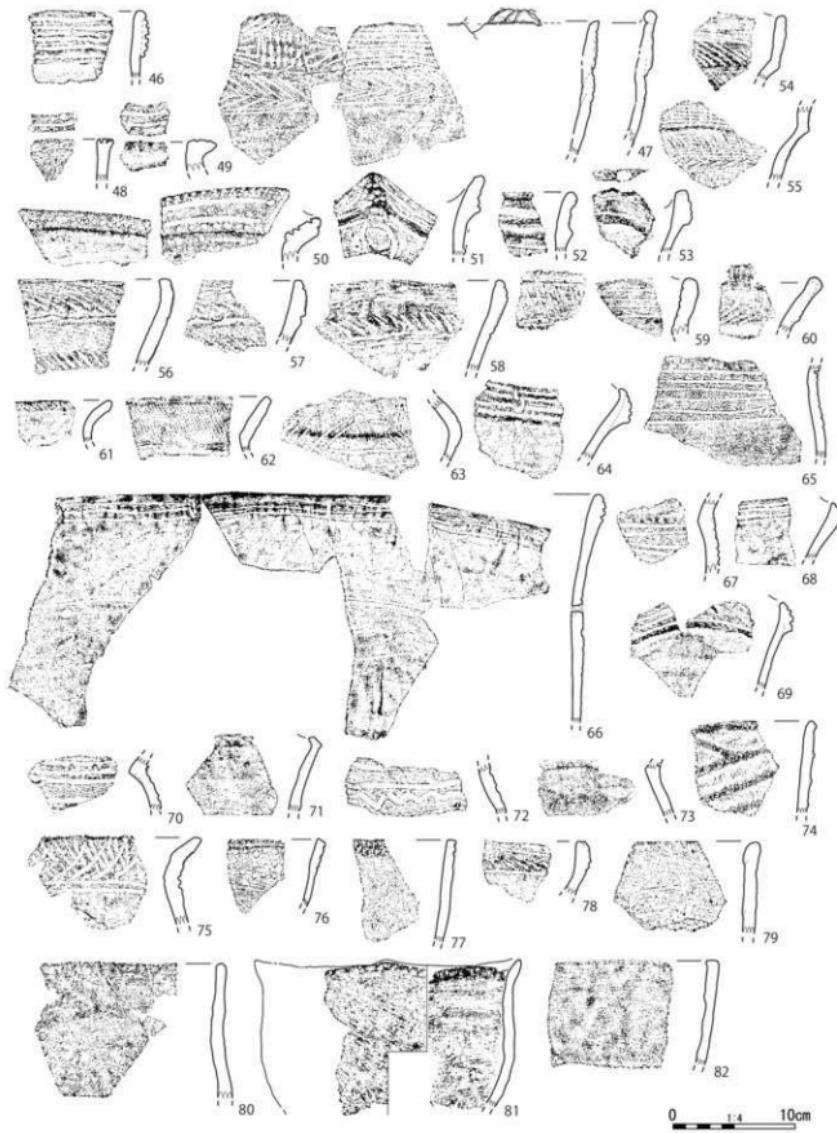
III層下部からIV層では、多量の縄文時代後期土器片が出土した。IV層検出の竪穴建物跡（SA2）は部分的な検出ながら深さ64cm程の方形プランで、太郎迫式土器の比較的大きな破片（31）が出土していることから該期の所産と思われる。III層下部からは埋甕と考えられる深鉢胴部下半（88）が立位で検出されているが、作図時の混乱から検出位置が不明である。この埋甕の近くでは、直径30cm、深さ25cmの土坑に大小の小兒頭大の礫が入る配石遺構も検出されたようであるが、同じく検出位置が不明である。この礫のうち4個は石皿片（2個体分）である。石皿は1～2・E～FグリッドのIV層からも長径47.5cmの完形品が1点出土している。石器は、石皿3、台石1、打製石鏃8、磨製石斧13、打製石斧3、磨石7、スクレイバー9、石核4、剥片151、碎片4、二次加工剥片等13、黒曜石原石2、楔形石器2、砥石・石錐（打欠、切目）、細石核各1の計224点が出土している。掲載した後期初頭から三方田式期までの土器のうち、市来式・丸尾式・北久根山式期の土器は周辺での採集品である。



第73図 大谷遺跡出土遺物実測図 (1～15:S=1/4、16～19:S=1/2、20～26:S=1/3)
 1・12・23・25: 表面採集、2・8: I～II層、4・5・9・11・13・15: I層、3・6・7・10・14: II層、16: II層下部、
 17・22・24: III層、18・26: IV層、19: SA2、20・21: SA1

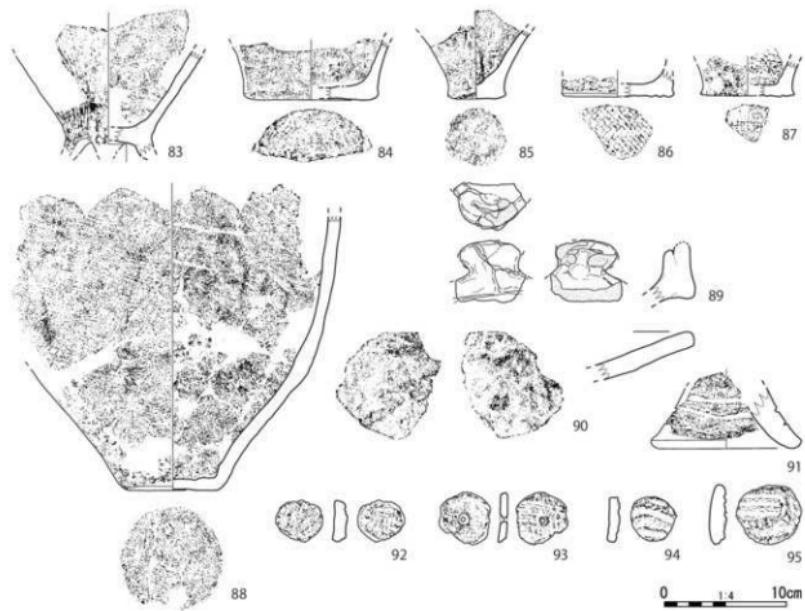


第74図 大谷遺跡出土縄文土器実測図 (S=1/4)
27～32: SA2、42: III層下部、33・35～41・43～45: IV層、34: 表面採集



第75図 大谷遺跡出土繩文土器実測図 (S=1/4)

48・51～55・60～63・75・76：表面採集、57・68・70・73：II～II層下部、46・69：III～III層下部、
47・49・50・56・58・64～67・71・72・74・78・80～82：IV層、59・77・79：SA1



第 76 図 大谷遺跡出土縄文土器実測図 (S=1/4)
85・89：表面採集、86：II層、88：III層下部埋蔵、83・84・87・90～95：IV層



写真 22 第IV層出土石皿と磨石 (23)

写真 23 指宿式土器 (41)
表面のコクゾウムシ圧痕



第19節 烏越前遺跡（とりごえまえ）

所在地：北諸群高崎町大字前田 立地：谷川東岸の丘陵上

調査原因：国道221号線道路改良工事に伴う調査

調査年月日：平成2（1990）年5月8日～5月18日

調査面積：100m² 調査員：谷口武範

1. 概要

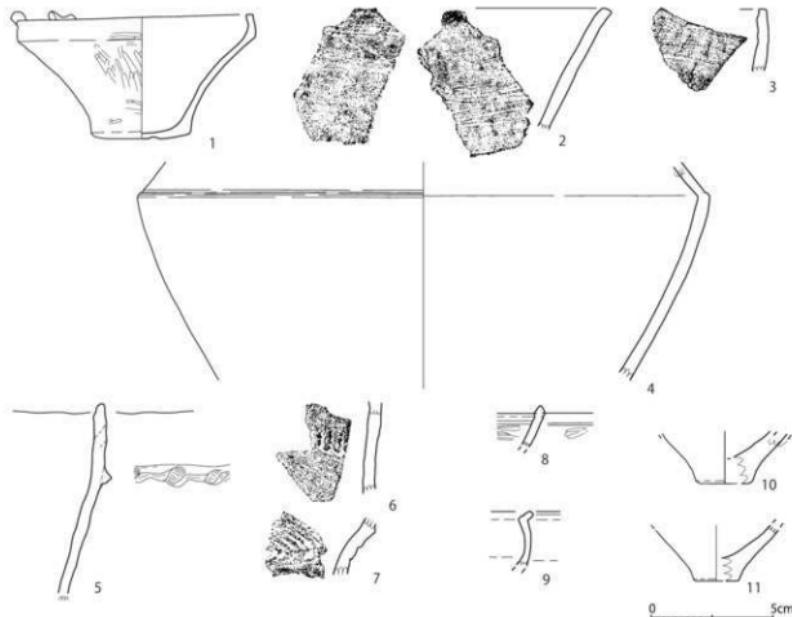
調査地は、本来は現在の道路面より1m程高くなっていたが、工事により道路面まで削平されており廃土中より土器片が出土していた。遺物包含層はすでに消滅していると考えられたが、今回の調査により縄文時代後～晩期(IV層)、弥生～古墳時代(III層)の二つの遺物包含層が残存していることが確認され、縄文時代の土坑も4基確認された。

2. 基本層序

I層：表土、II層：黒褐色土、III層：明褐色土、IV層：暗褐色土、V層：黒褐色土、VI層：黒褐色土

3. 遺構と遺物

縄文時代晩期の土坑3基(内1基は袋状土坑)、溝状遺構1条(古墳時代か?)。遺物は縄文時代後～晩期が主体となっている。一部ではあるがIII層中より弥生～古代に帰属される高环等の土器片や中世の天目碗等が出土している。



第77図 烏越前遺跡出土遺物実測図 (S=1/4) 1:SC4、2:SZ1-6、4:SZ1-2、3・10:排土

第 20 節 妙見原第 2 遺跡（みょうけんばる）

所在地：都城市下水流町 3377-1 番地他 立地：大淀川左岸の河岸段丘上（標高約 135 ~ 137m）

調査原因：県道中方限庄内線緊急地方道路整備事業

調査年月日：平成 2（1990）年 7 月 16 日 ~ 8 月 16 日

調査面積：1,000m² 調査員：吉本正典

1. 概要

妙見原第 2 遺跡は、倉内遺跡に隣接し、立地等についても同様である。工事原因も倉内と同様で、県道の拡幅工事に伴って当時の現況道路の外側を約 80m 程の区間にわたって調査を実施した。幅約 4m ほどの細長い調査区であったが、古墳時代終末期の遺構・遺物を中心に検出されている。

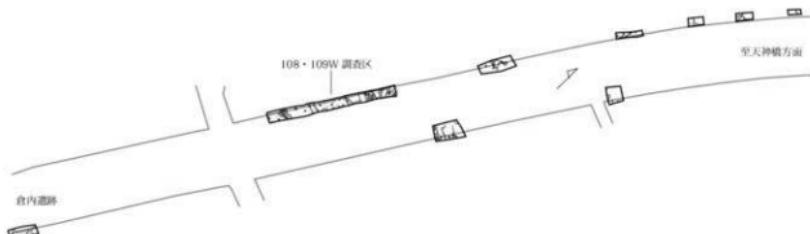
2. 基本層序

I 層：表土（耕作土）、II 層：黒色土（遺物包含層）、III 層：御池ボラ層

3. 遺構と遺物

遺構としては、竪穴建物跡 5 軒を中心には複数の土坑や小穴、溝状遺構を検出している。竪穴建物はいずれも部分的な検出であるが、全て 108・109W 調査区で検出されており、東西もしくは南北に主軸をもつ方形基調の平面プランと考えられる。規模は不明確だが、検出状況から東西方向の幅が明らかなものがあり、1 号は 6.3m、2 号は 3.7m、3 号は 5m を測る。主柱穴配置も不明だが、1 号竪穴建物跡については対角線上に並ぶ 2 つの柱穴がみられることから、4 本主柱の可能性が高い。その他、建物の構造的な特徴として、1・4・5 号建物では床面に埋設された甕が検出されており、屋内炉として利用されていたと考えられる。

遺物は相対的に少ないが、1 号竪穴建物で検出された埋甕（第 79 図 1）のように平底で胴部の張った粗雑な造りの甕が他の建物跡からも出土している。また、4・5 号竪穴建物跡から出土している須恵器の环（第 79 図 6・8）は TK209 形式並行期のものとみられることから、竪穴建物跡の時期としては古墳時代終末期を中心とした遺構と考えられ、隣接する倉内遺跡と一緒に集落を構成していたと考えられる。



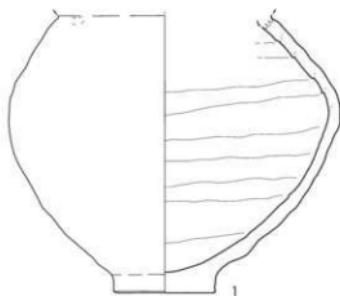
第 78 図 妙見原第 2 遺跡調査区配置図 (S=1/1000)

5号竖穴建物跡

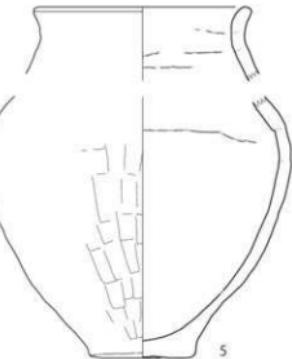


2号竖穴建物跡

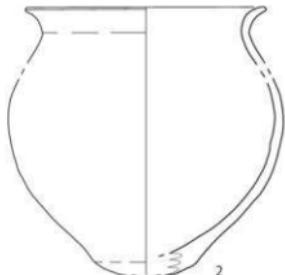
埋甕



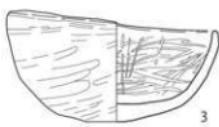
1号竖穴建物跡埋甕



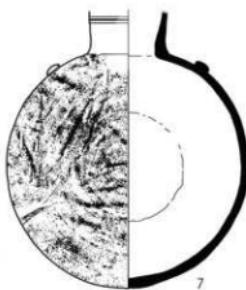
5



4号竖穴建物跡出土



2号竖穴建物跡出土



7



包含層出土



3号竖穴建物跡出土



5号竖穴建物跡出土



第 21 節 倉内遺跡（くらうち）

所在地：都城市下水流町 3355 番地他 立地：大淀川左岸の河岸段丘上（標高約 135 ~ 137m）

調査原因：県道中方限庄内線緊急地方道路整備事業

調査年月日：平成 3（1991）年 8 月 30 日 ~ 10 月 22 日

調査面積：1,200m² 調査員：長友郁子

1. 概要

倉内遺跡は大淀川左岸の河岸段丘（下水流段丘群）上、大淀川に面する丘陵縁辺部に位置し、現行河川周辺の氾濫原との比高差は約 10m ほどである。県道の拡幅工事に伴って発掘調査を実施したため、当時の現況道路の外側を約 100m 程の区間にわたって調査を実施した。幅約 4m ほどの細長い調査区であったが、古墳時代終末期頃の遺構・遺物を中心に検出されている。

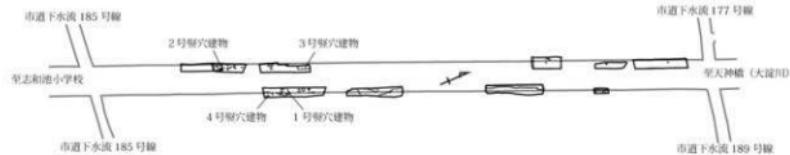
2. 基本層序

I 層：表土（耕作土）、II 層：黒色土（遺物包含層）、III 層：御池ボラ層

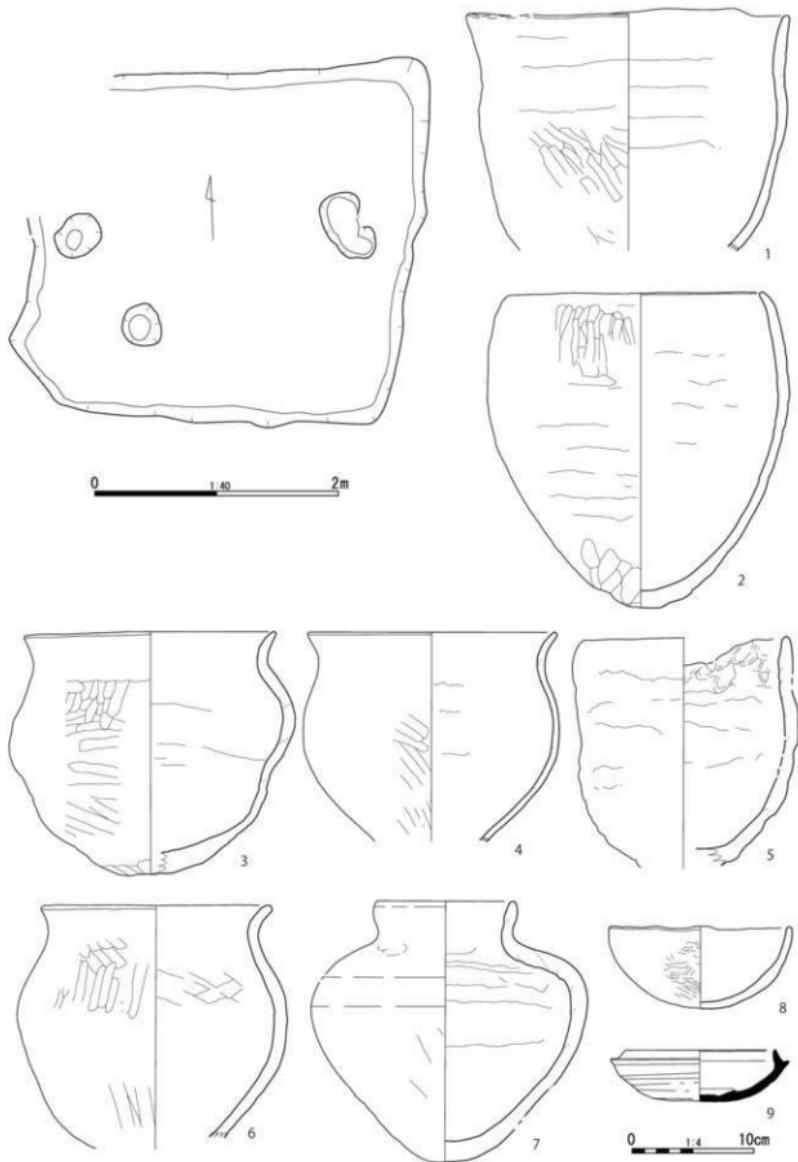
3. 遺構と遺物

遺構としては、III 層上面で竪穴建物跡 4 軒、土坑と小穴数基を検出している。1 号竪穴建物跡は 3.2m × 2.9m の長方形プランで他の建物よりも小型である。主柱穴は東西方向の 2 本柱で、やや壁寄りに位置する。2 号竪穴建物は 4.0m × 4.5m の長方形プランで、壁際を周囲する壁帯溝を有する。3 方の壁面側から中央に向かって倒れこんだような炭化材が検出されていることから主柱は 4 本とみられるが明確ではない。3 号竪穴建物は規模は明らかではないが、検出された残存状況から平面プランは方形を基調とし、規模は 1 辺 5m を超える。南西側壁寄りの地点でまとまった炭化材が出土している。4 号竪穴建物はコーナーの一部が検出されたもので、方形を基調とする平面プランとみられるが、規模等は明らかでない。このほか、土坑も複数確認されているが、遺物もほとんどみられず、時期不明である。

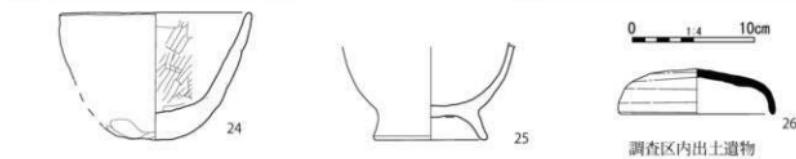
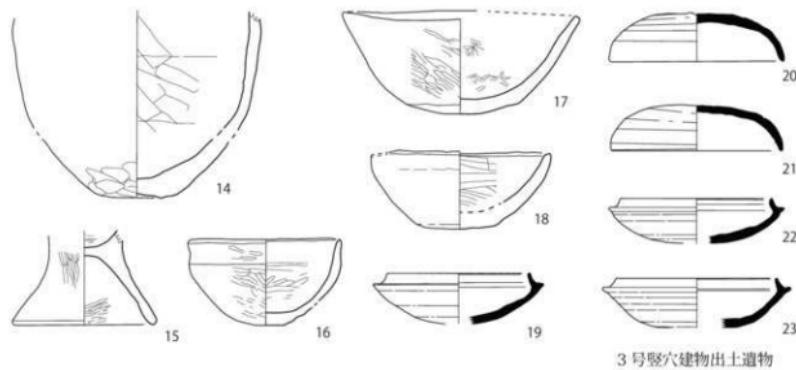
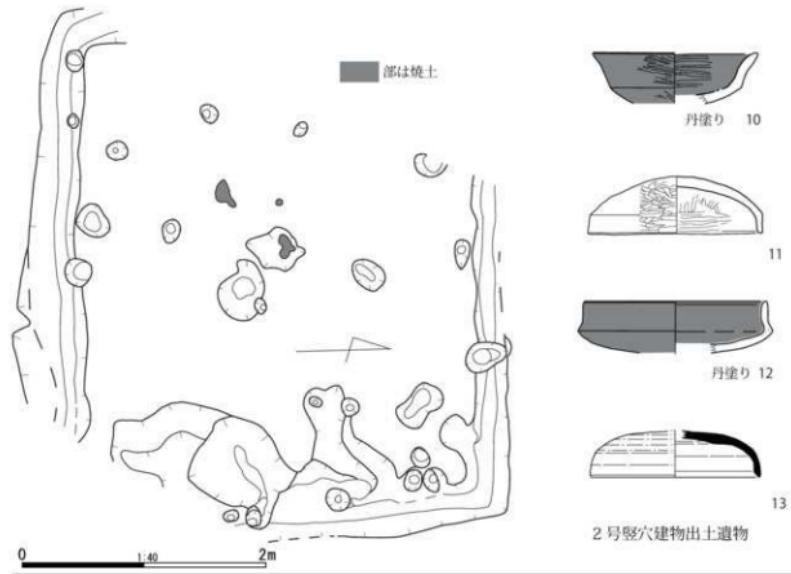
遺物としては、1 号竪穴建物で床面付近から複数の完形に近い復元可能な土師器の甕や壺、須恵器環等が出土している（第 81 図）。2 号竪穴建物ではあまり遺物が出土していないが、3 号では完形に近い複数個体の須恵器環が出土している（第 82 図）。これらは、須恵器環の形態から TK209 形式並行期のものと考えられ、各建物は同時期に併存もしくはごく近い時期に作られたものである可能性が高い。



第 80 図 倉内遺跡調査区配置図 (S=1/2,000)



第 81 図 倉内遺跡 1 号竪穴建物跡平面図 ($S=1/40$) 及び出土遺物実測図 ($S=1/4$)



第82図 倉内遺跡 2号竖穴建物跡平面図 ($S=1/40$) 及び調査区出土遺物実測図 ($S=1/4$)

第22節 築池遺跡（ちくいけ）

所在地：都城市下水流町1713番地ほか 立地：大淀川左岸の河岸段丘上（標高約142m）

調査原因：県道中方限庄内線緊急地方道路整備事業

調査年月日：1次 平成4（1992）年5月12日～平成4（1992）年9月18日

2次 平成4（1992）年12月9日～平成5（1992）年1月

3次 平成5（1992）年2月22日～平成5（1993）年3月12日

4次 平成5（1992）年6月7日～平成5（1993）年9月18日

調査面積：1次 1,300m²、2次・3次 不明、4次 1,800m²

調査員：1次 普付和樹・橋本英俊、2次 面高哲郎、3次 東憲章、4次 岩田博之

1. 概要

築池遺跡は倉内遺跡の南西に位置し、妙見原第2・倉内遺跡と同じ河岸段丘上であるが、両遺跡よりも1段高い平坦面上に立地している。工事原因も両遺跡と同様で、県道の拡幅工事に伴って当時の現況道路の外側を約260mの区間にわたって調査を実施している。1次調査では県指定志和池村1号墳周辺の道路拡幅部分で7基の地下式横穴墓を検出している。2・3次調査では1次調査で地下式横穴墓が集中的に検出されていた部分の現況道路下について調査を行い、さらに13基の地下式横穴墓などを確認している。4次調査では1～3次調査の北東側に続く道路の延長部分について調査を実施したが地下式横穴墓は検出されず、削平を受けた円形を基調とする花弁状間仕切りタイプの竪穴建物跡1軒が確認された。

2. 基本層序

I層：表土（耕作土）、II層：黒色土（遺物包含層）、III層：御池ボラ層

3. 遺構と遺物

（1）地下式横穴墓（第84～91図）

地下式横穴墓は20基確認されている。各地下式横穴墓の規模や出土遺物などについては、第1表を参照されたい。確認された20基のうち、いわゆる妻入りタイプのが6基、平入りタイプのものが14基である。竪坑の形状では、平入りタイプのものは大半が隅丸長方形状を呈するが、妻入りタイプのものは長方形や台形状のものなどバリエーションが多く、規模的には妻入りタイプのものほうがやや大きい印象を受ける。玄室の平面プランでは、平入りのものは隅丸長方形のものが6基、楕円形のものが5基と多いが、妻入りは竪坑と同様にバリエーションが豊富である。玄室規模では長軸の長さと幅の平均が妻入りタイプで2.63m×1.6m、平入りタイプで2.18m×1.06m（92-3号を除く）と相対的に妻入りタイプの方が大型であるが、玄室規模が最大のものは平入りタイプの92-1号である。玄室の天井部形状は陥没などにより不明なものが多いが、残存状況から判断されるものにはドーム型のものが多い。袖部形状では妻入りタイプは両袖1、無袖2、右片袖3と右片袖が多く、平入りタイプは両袖12、無袖2と両袖が大半を占める。玄室の閉塞についても明らかでないが、92-20号では奥門部に溝がみられ、溝と溝の間に木質の痕跡が見られたことから閉塞の可能性が高い。埋葬された遺体数も明確でないが、92-5号では2体埋葬の可能性がある。

出土遺物では妻入りタイプに剣や刀などが伴う場合が多く、やや優位性が伺われる。また、92-3号では竪坑内から轡が出土しており、竪坑に馬の埋葬を行った可能性が高い。なお、遺物の詳細については、諸般の事情により別途報告することとした。

(2) 土壙 (第92図)

土壙は4基確認されており、すべての遺構から馬に関連する遺物が出土していることから、いわゆる馬埋葬土壙と考えられる。各土壙の規模や出土遺物などについては、第2表を参照されたい。

平面形的には短軸と長軸が1:2程度の長方形のもの(2, 3号)と方形に近いもの(1号)がみられる。

遺物などの出土状況では、1号が土壙中央付近で検出されているが、2~4号は一方の短側辺に寄った位置で出土している。また、1・2号では5cmほどの高低差をもって広がる赤色土の広がりやUの字形の断面形を呈する赤色土が確認されており、有機質製の馬具も副葬されていた可能性も考えられる。

(3) 穫穴建物 (第92・93図)

竪穴建物は推定直径6mを超える円形を基調とする平面プランで、3か所の突出壁が残存していた。建物の約半分が削平されており、柱穴は1基のみしか確認されていない。建物の中央部と突出壁で囲まれた部分に高低差はみられず、いわゆるベッド状をしていない。突出壁のすべてに壁帶溝がみられるが、通常の壁部分では壁帶溝はほとんどみられない。第93図で断面図を提示した部分では突出壁と突出壁を結ぶ浅い溝がみられ、この部分のみ通常の壁部分にも壁帶溝が施されており、長軸1.7m、短軸0.8mの長方形形状に溝で区画された空間を形成している。出土遺物(第92・93図8~18)の形態から弥生時代後期の遺構と考えられる。

主要参考文献

矢部喜多夫 1993 「築池地下式横穴群」『宮崎県史』資料編 考古2、宮崎県

矢部喜多夫・曾付和樹 2006 「築池遺跡」『都城市史』資料編 考古、都城市

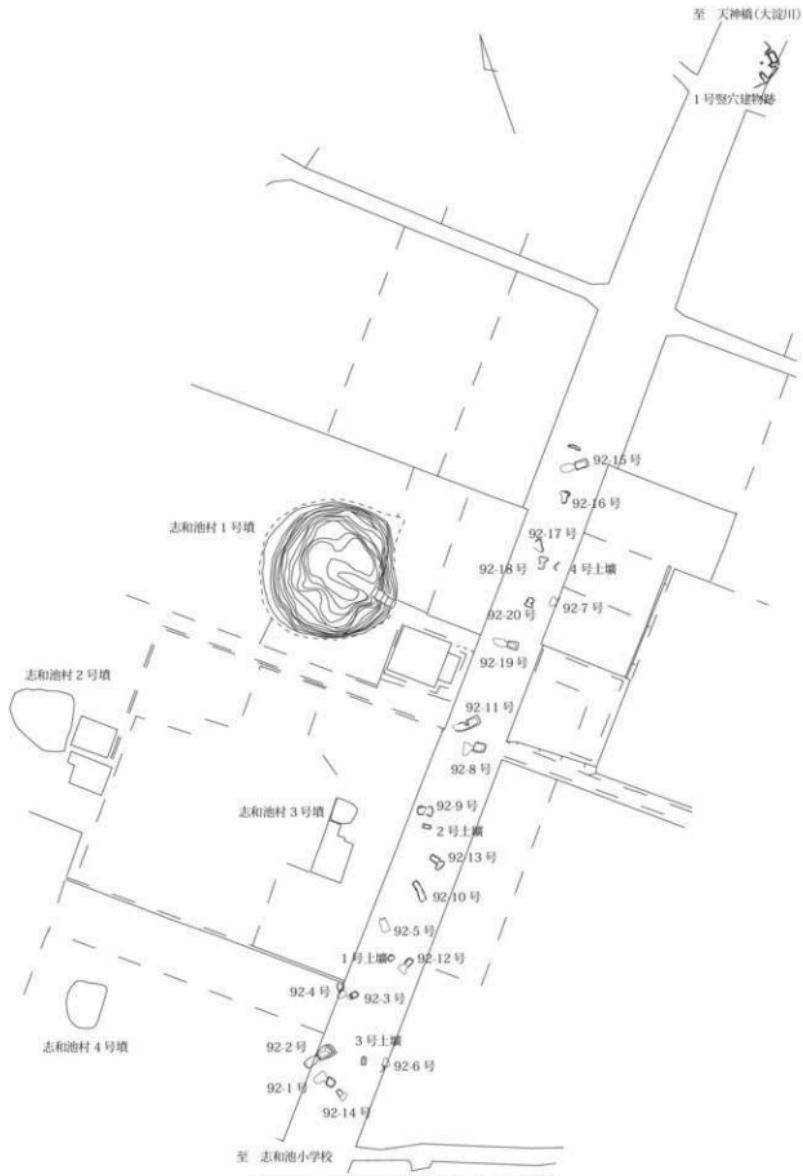
都城市教育委員会 2010 「都城市内遺跡3 第2章調査の記録 5県指定志和村4号墳」都城市文化財調査報告書第101集

第1表 築池遺跡地下式横穴墓一覧表

遺構名	竪坑			玄室			主な出土遺物			備考	
	平面形	長さ	幅	深さ	傾斜	平面形	長さ	幅	高さ	大井	
92-1 築丸方形	2.1	1.8	0.9	平入	長方形	2.9	1.7			両袖	
92-2 台形	3.2	1.5-2.7	-	妻入	長方形	2.7	1.7	1.2		両袖	
92-3 築丸長方形	1.6	1.2	0.9	平入	不整形			0.5		両袖	土師器、傳1 鉄鏹10
92-4 築丸方形	1.6	1.4	1.0	平入	築丸長方形	2.0	1.1	0.7		両袖	刀子1、刀2、鉄鏹10
92-5 不明	-	-	-	妻入	台形	2.9	1.6	1.1		両袖	刀子2、鉄鏹11
92-6 不明	-	-	-	平入	横円形	1.9	1.5	0.8	ドームか無地	両袖	刀子1、土師器2
92-7 不明	-	-	-	平入	築丸長方形	2.0	1.6	0.8	ドームか無地	両袖	刀子1、刀1、鉄鏹5
92-8 不整形方	2.3	2.1	0.8	平入	長方形	2.6	0.8-1.2	0.6		両袖	
92-9 不明	-	-	-	平入	築丸長方形	2.1	1.0			両袖	
92-10 築丸方形	1.3	0.7	妻入	築丸長方形	2.4	1.5				両袖	刀子1、鉄鏹1
92-11 長方形	2.6	1.9	0.9	妻入	不整形	2.6	1.1-1.6			右片袖	刀1、刀子2、鉄鏹23、不明1
92-12 築丸長方形	1.6	1.3	0.6	平入	築丸長方形	2.0	0.9			両袖	土師器片 刀子2、鉄鏹1
92-13 築丸長方形	2.0	1.2	-	平入	築丸長方形	2.2	0.9			両袖	鉄鏹2
92-14 築丸長方形	1.3	1.1	0.7	平入	横円形	1.9	0.9			両袖	
92-15 長方形	2.6	1.6	1.3	妻入	築丸長方形	2.7	1.7			右片袖	蛇行劍1、劍1、刀1、刀子1、鉄鏹8、須恵器 高环、土師器真环
92-16 横円形か	1.2	1.1	-	平入	横円形	2.1	1.0			両袖	
92-17 不明	-	-	-	平入	築丸長方形	2.7	1.2			両袖	
92-18 築丸方形か	-	-	-	平入	横円形					両袖	刀子1
92-19 台形	2.2	1.3-1.6	1.1	妻入	不整形	2.5	1.5			右片袖	劍2、刀子1、鉄鏹20
92-20 築丸方形	1.0	1.3	-	平入	横円形	1.9	0.5			両袖	

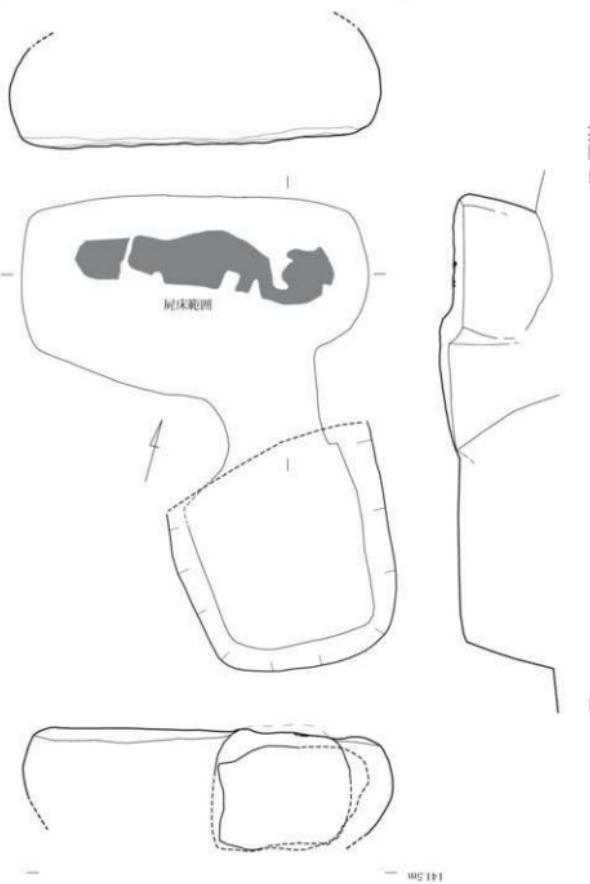
第2表 築池遺跡土壙一覧表

遺構名	平面形	長さ	幅	深さ	出土遺物	備考
92-1号土壙	築丸方形	1.4	1.2	0.7	馬銜、不明鉄器、釘	
92-2号土壙	築丸長方形	1.7	0.8	0.7	両	
92-3号土壙	築丸長方形	1.8	0.9	0.8	馬銜、両、辻金具、鉄兵、不明鉄器	
92-4号土壙	不明	(1.7)	0.9	0.7	両	



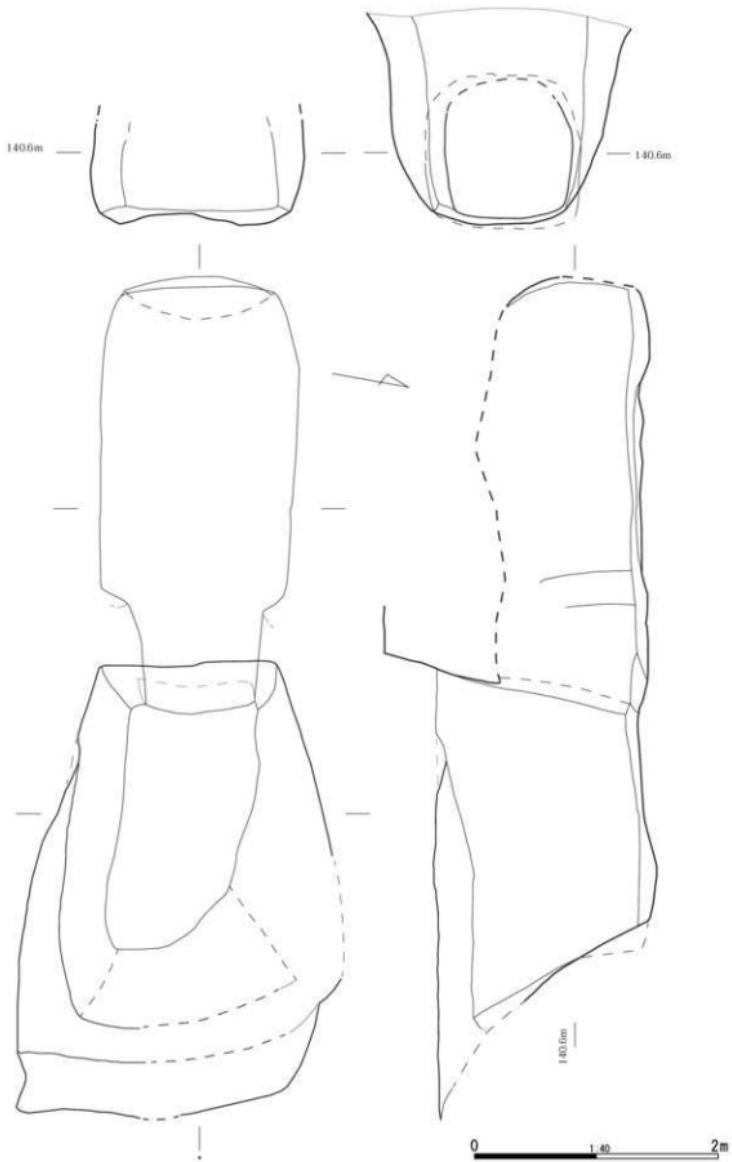
第83図 築池遺跡遺構分布図 (S=1/1,000)

141.5m —

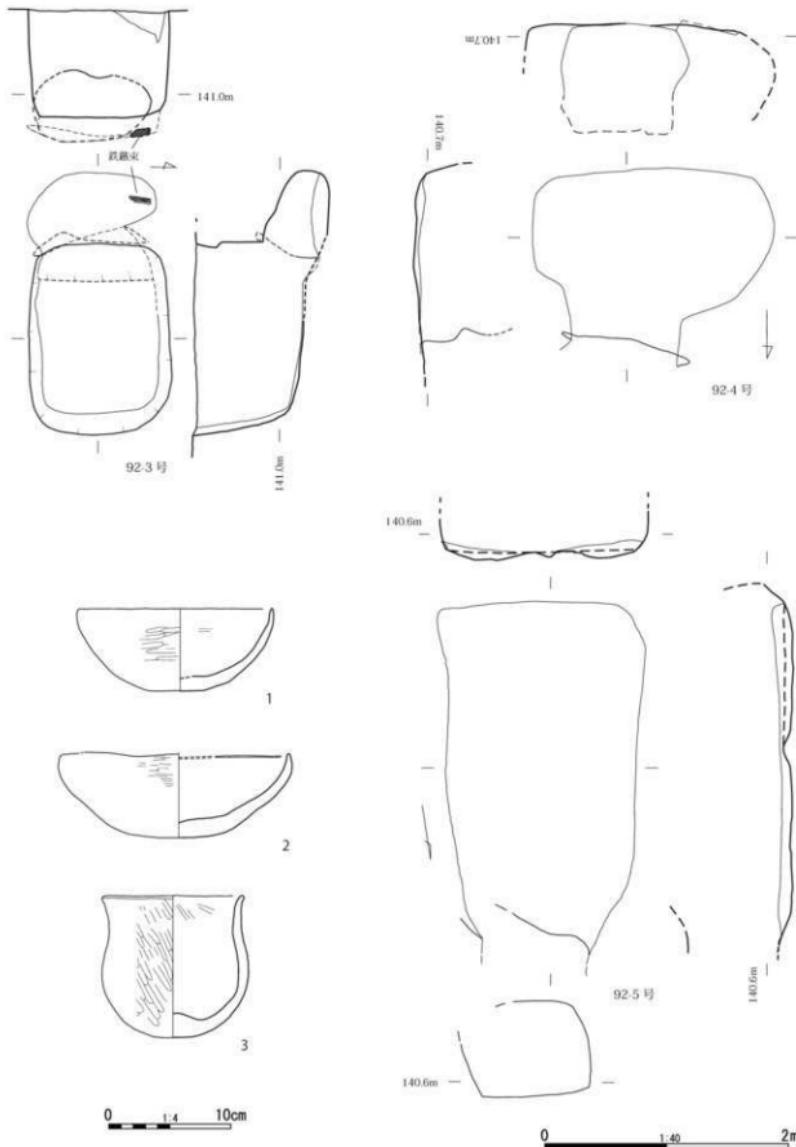


0 1:40 2m

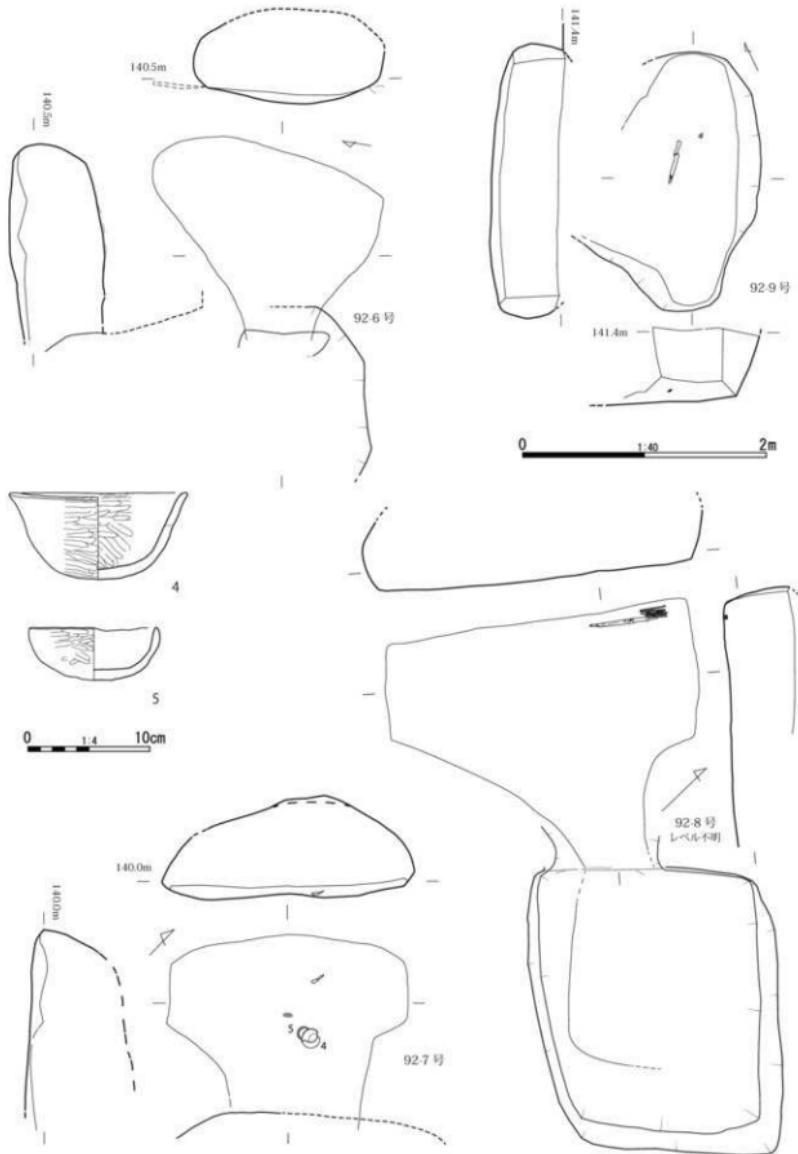
第 84 図 築池遺跡 92-1 号地下式横穴墓 (S=1/40)



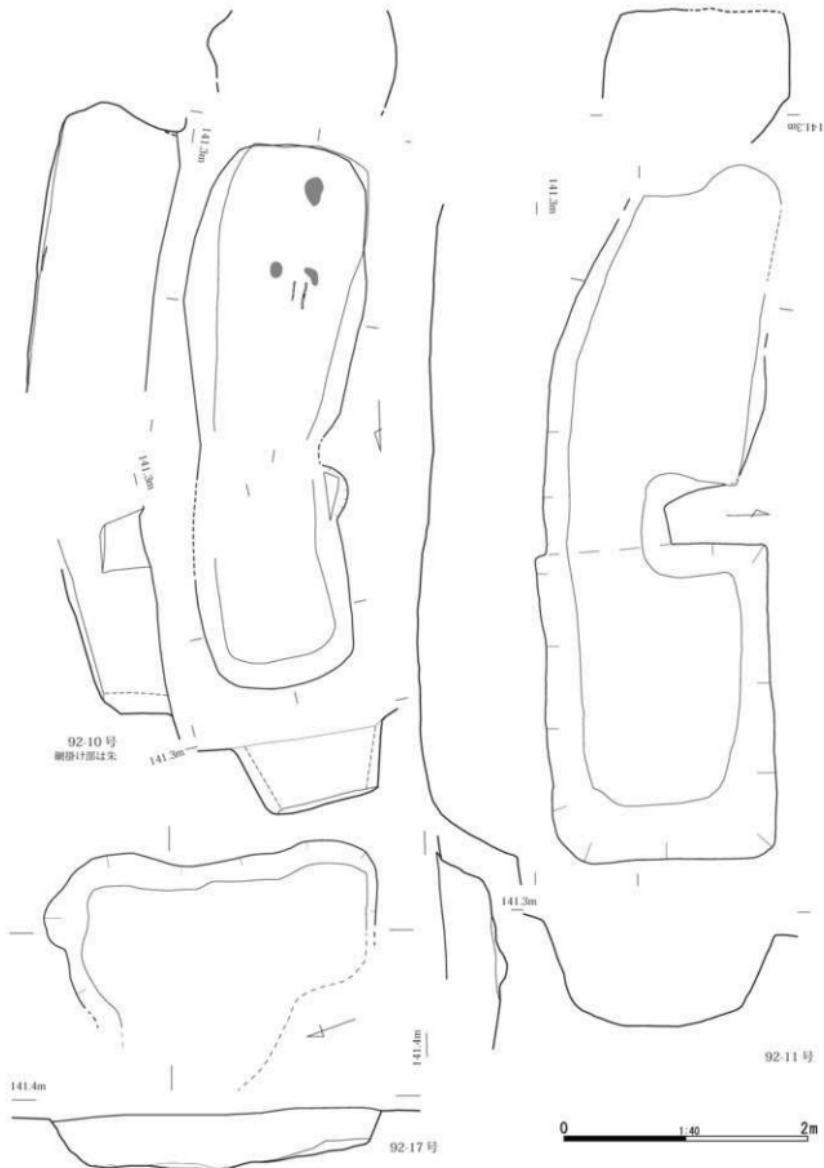
第 85 図 葬池遺跡 92-2 号地下式横穴墓 ($S=1/40$)



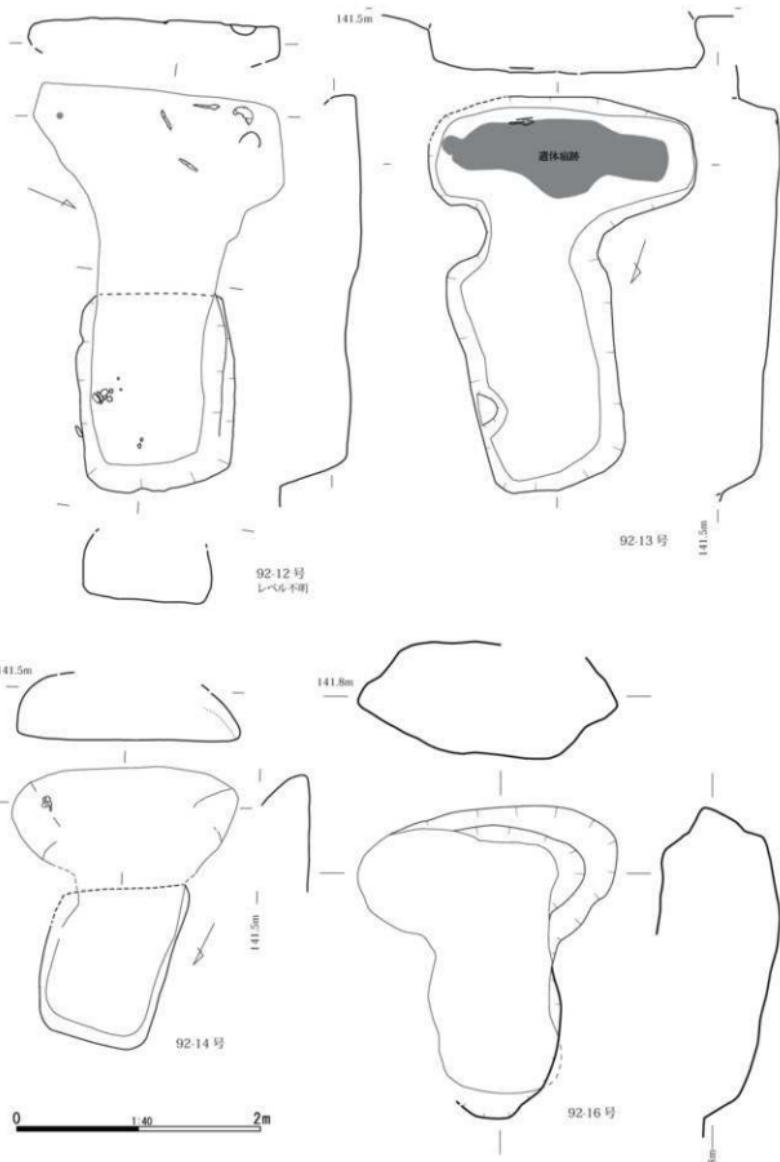
第86図 築池遺跡92-3・4・5号地下式横穴墓 ($S=1/40$) および92-3号出土遺物 ($S=1/40$)



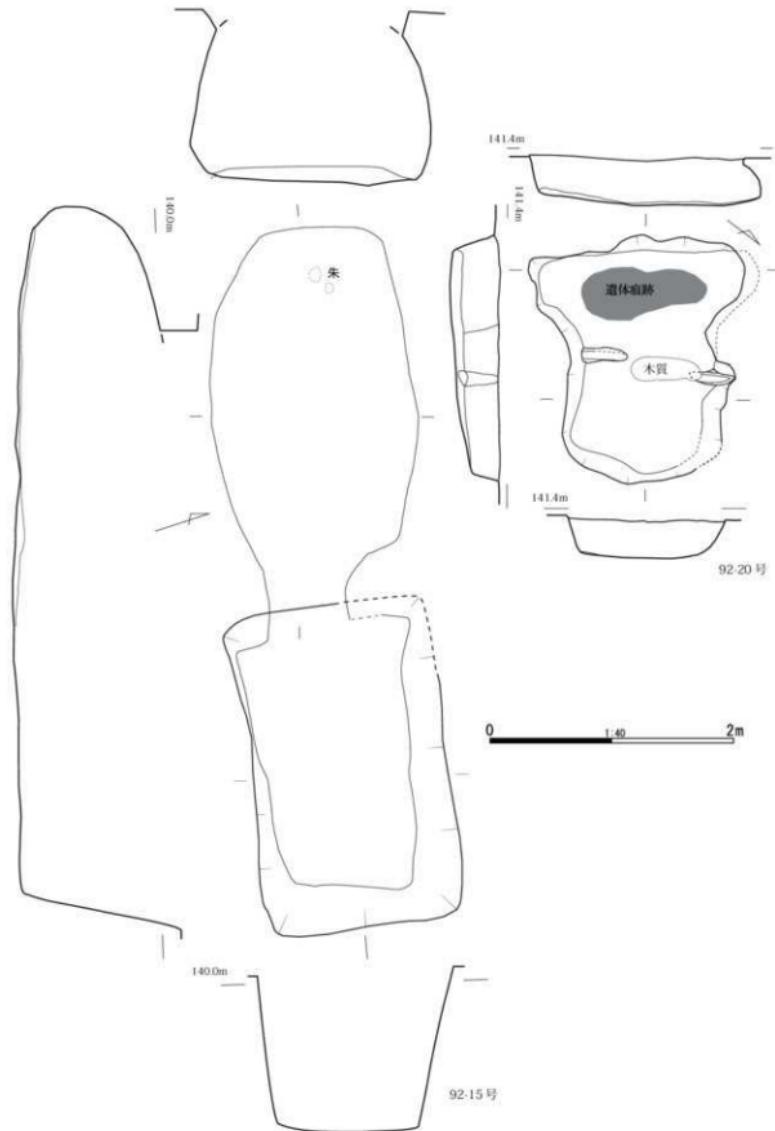
第 87 図 築池遺跡 92-6・7・8・9 号地下式横穴墓 (S=1/40) および 92-7 号出土遺物



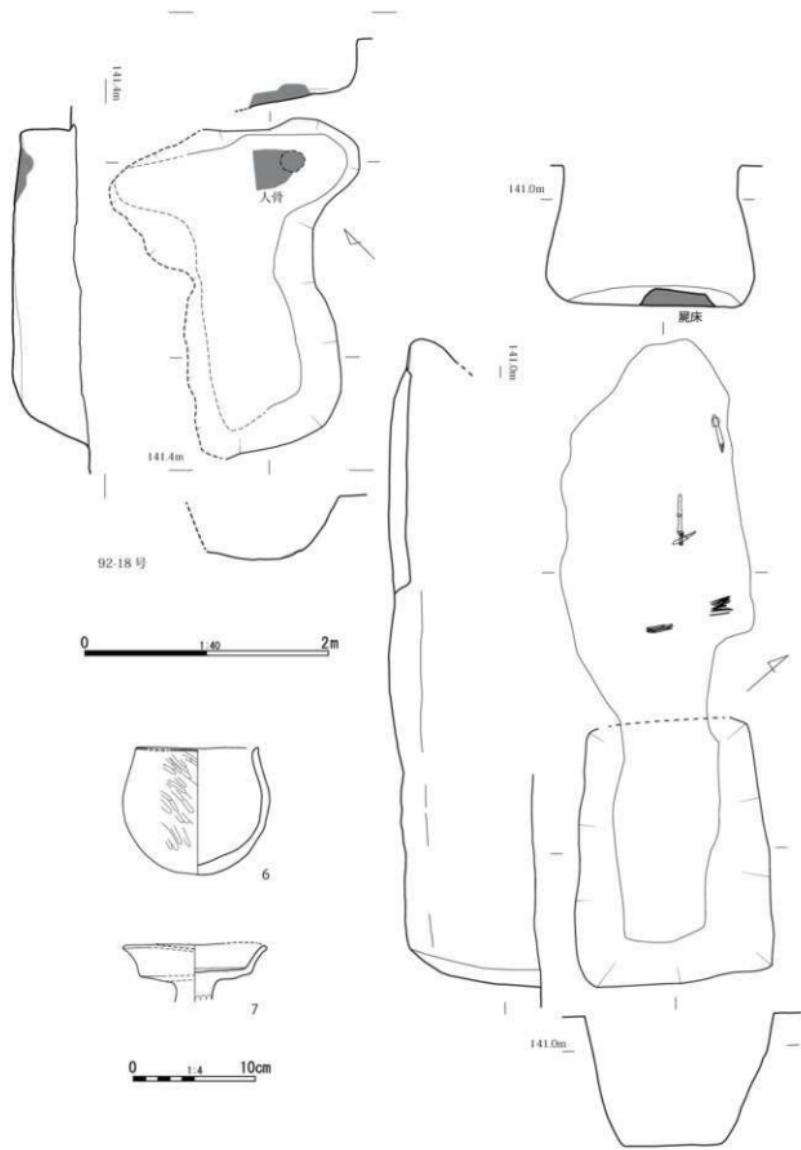
第88図 築池遺跡 92-10・11・17号地下式横穴墓 (S=1/40)



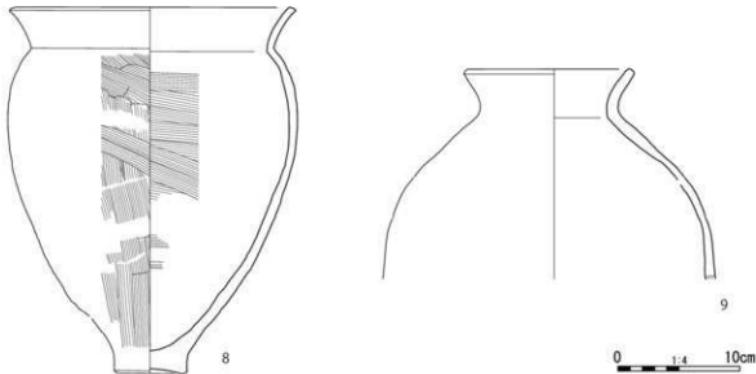
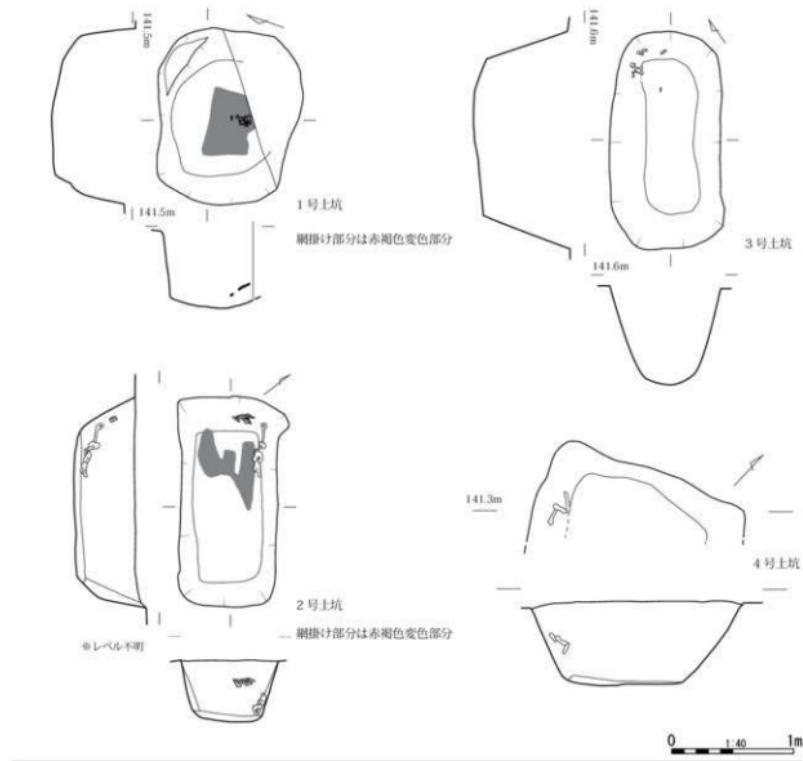
第 89 図 築池遺跡 92-12・13・14・16 号地下式横穴墓 (S=1/40)



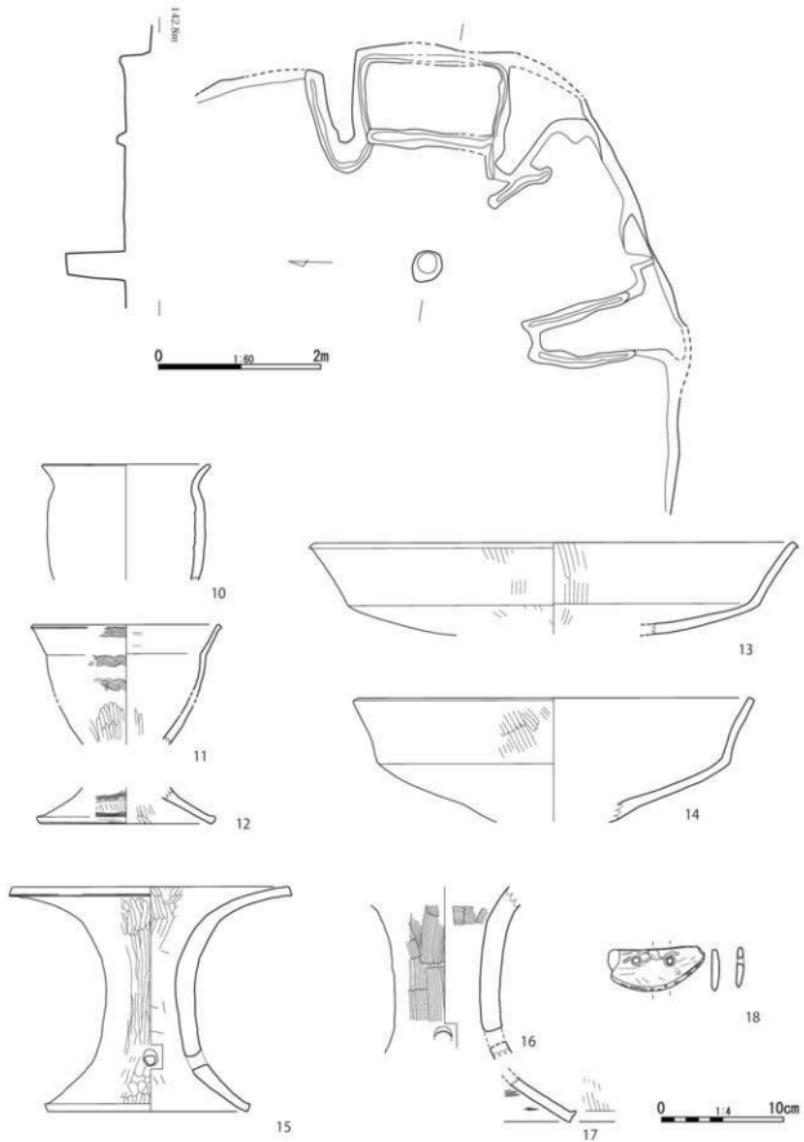
第90図 築池遺跡92-15・20号地下式横穴墓 ($S=1/40$)



第91図 築池遺跡92-18・19号地下式横穴墓 ($S=1/40$) および92-18号出土遺物 ($S=1/4$)



第92図 葬池遺跡1～4号土坑 (S=1/40) よび1号竪穴建物出土遺物 (1) (S=1/4)



第93図 築池遺跡1号竪穴建物 (S=1/60) および出土遺物 (2) (S=1/4)

第23節 楠木原遺跡（くすのきばる）

所在地：日南市吉野方字楠木原 1769- イ他 立地：酒谷川に南面する台地

調査原因：県営広域農道整備事業治海南部地区農道整備事業

調査年月日：平成11（1999）年6月14日～6月25日

調査面積：885m² 調査員：甲斐貴充

1. 概要

祇肥城の本丸から北西約500m、永吉口から北西約300mに位置する近世瓦窯であり、祇肥城及び祇肥城下町を中心で瓦を供給していたものと推定される。

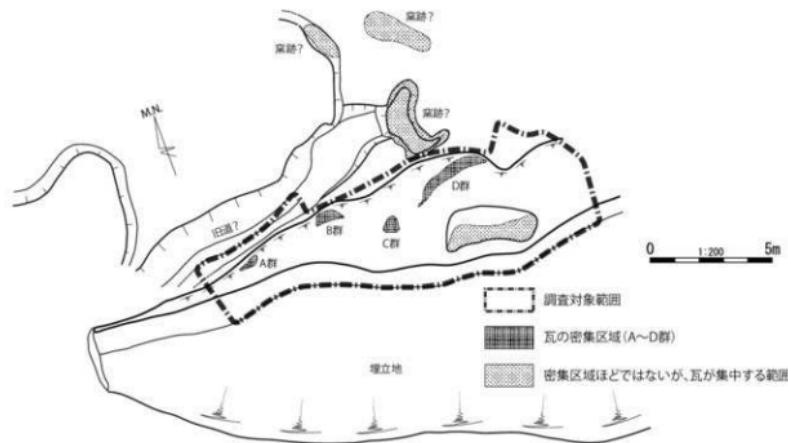
2. 遺構と遺物

調査対象範囲では瓦が密集する集中部が4箇所（A～D群）と、密集の度合いは低いが瓦の集積が観察された集中部が1箇所が確認された。調査対象範囲外でも、北側に隣接する山林中に窯跡の可能性がある瓦の集中部を3箇所確認している。堆積および出土遺物の様相から、A・D群は灰原、B・C群は灰原または窯本体の崩落跡である可能性が指摘できる。瓦は平・桟瓦が大半を占め、一定量の軒丸・軒平・軒桟瓦のほか役瓦も少數認められる。9～12には線刻および刻印が認められ、刻印には12・14・15に示す3種を確認した。14と同種の刻印は祇肥城下町遺跡出土の桟瓦でも確認されている。このほか、近世以降の陶磁器片約50点も出土した。

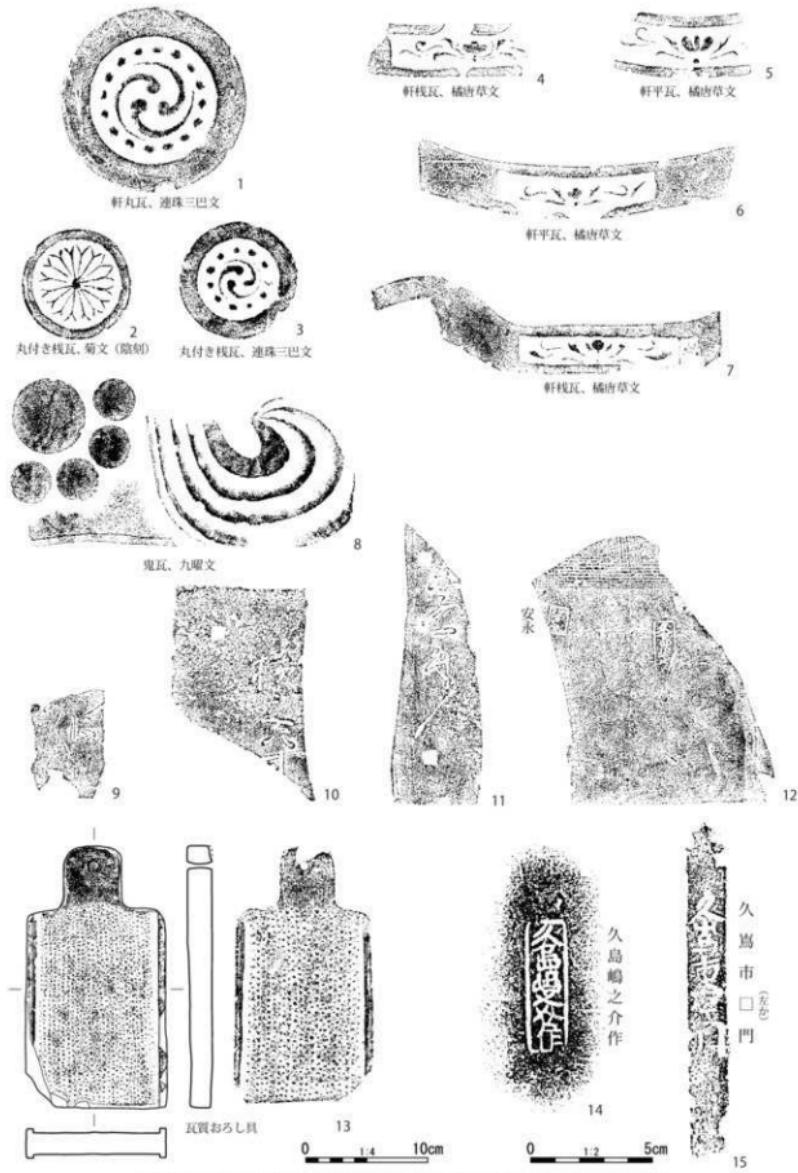
参考文献

宮崎県埋蔵文化財センター 2012 「祇肥城下町遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第220集

岡本武憲 1994 「南日向の中世城郭—祇肥城を中心として—」『宮崎考古』第13号、宮崎考古学会



第94図 楠木原遺跡遺構分布図 (S=1/200)



第95図 楠木原遺跡出土遺物実測図・拓影 (1~13: S=1/4, 14・15: S=1/2)

第24節 篠ヶ城遺跡（ささがじょう）

所在地：日南市大字吉野方字篠ヶ城 立地：酒谷川左岸の小丘陵（標高45m）

調査原因：県営広域農道整備事業治海南部地区農道整備事業

調査年月日：昭和63（1988）年6月6日～7月23日

調査面積：800m² 調査員：吉本正典

1. 概要

篠ヶ城遺跡は飫肥城の南西約1.5kmに位置し、字名から永禄11（1568）年に伊東義祐が飫肥城攻略のために陣を構えた「篠ヶ嶺」に比定される。ただし中心部と推定される今回の調査区の北東側は残念ながら破壊が及んでいる。

2. 基本層序

I層：表土、II層：中世遺物包含層、III層：K-Ahの二次堆積層、IV層：縄文早期遺物包含層

3. 遺構と遺物

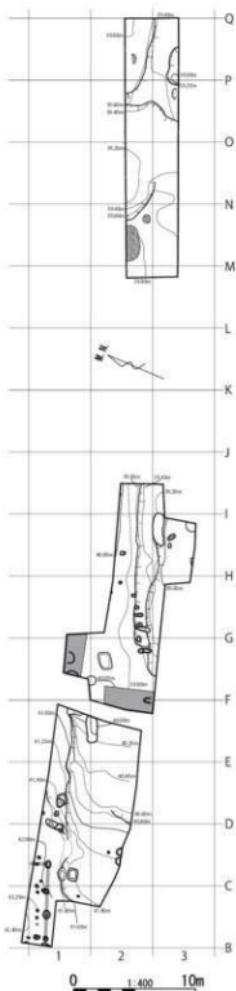
地山を掘削し階段状に平坦面を造り出す構造が注目される。最上段（調査区南西端）ではIII層上面から掘立柱建物跡あるいは柵列と思しきピット列が確認された。下記の主にII層出土の陶磁器各種の年代が14～17世紀代に収まるため、これらの遺構が「篠ヶ嶺」の存続期間と重なる可能性が指摘され、その場合は腰曲輪的機能を担ったものと推定される。方形の土坑もI基確認された。

出土した輸入陶磁器は、白磁・青磁は15世紀後葉～16世紀の所産が中心である。国産では唐津系の灰釉碗（18）が16世紀末～17世紀に位置づけられる。備前焼の捕鉢は21が14世紀中葉～15世紀中葉、22が16世紀初頭～後葉に位置づけられよう。土師器小皿（19・20）もおよそ14世紀前葉～15世紀中葉頃までの所産と考えられる。

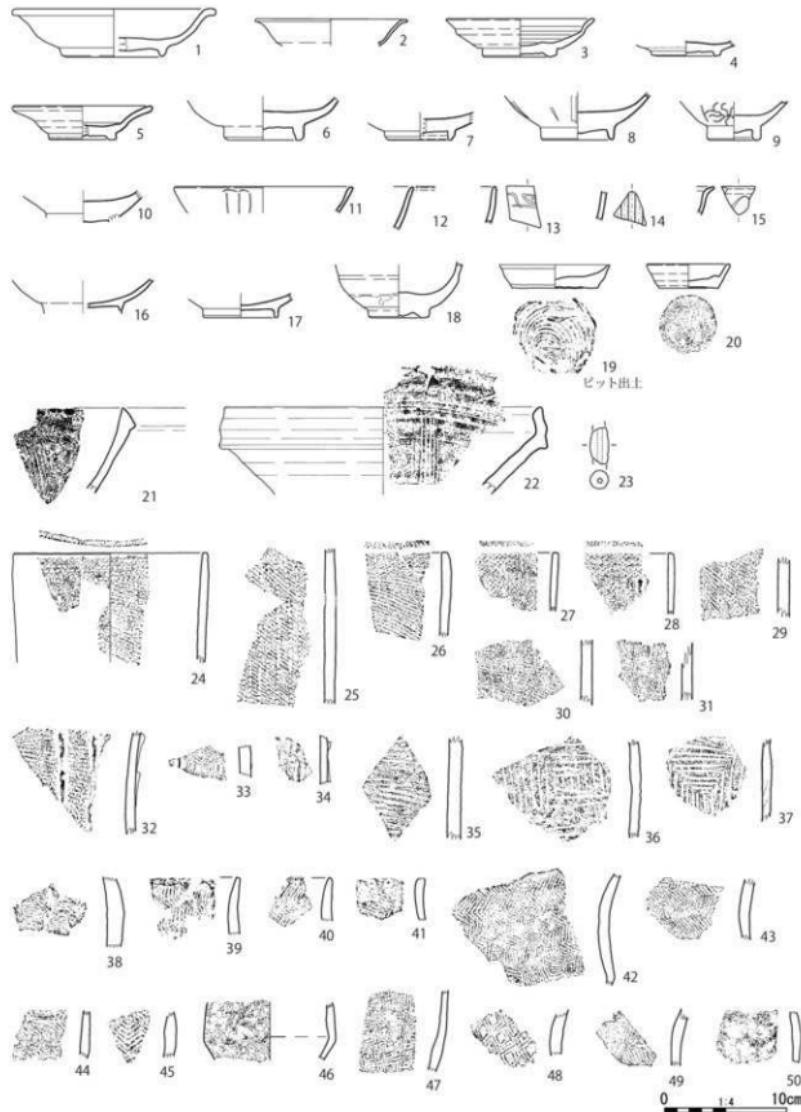
また部分的にIII層以下の深堀りを行なったところIV層以下を中心に縄文時代早期の貝殻文円筒形土器や押型文土器などの破片が出土した。35は外側は貝殻条痕文、内側は縦方向にケズリ調整を施す。36・37は沈線により同心矩形の文様を施す。押型文土器群は手向山式期の所産であり、38の波状撚糸文土器、47・48のような複合菱形文押型文土器も伴う。

参考文献

吉本正典 1989 「篠ヶ城遺跡—広域農道建設工事に伴う発掘調査概略—」『宮崎県文化財調査報告書』第32集、宮崎県教育委員会



第96図 篠ヶ城遺跡遺構分布図(S=1/400)



第97図 篠ヶ城遺跡出土遺物実測図 (S=1/4)

1・2:白磁皿（景德鎮窯）、3・4:白磁皿（福建・広東系か）、5:青磁棱花皿（福建・広東系か）、6・7:青磁碗（福建・広東系か）、8～15:青磁碗（龍泉窯）、16・17:青花、18:灰釉碗（唐津系）、19・20:土師器小皿、21・22:擂鉢（備前焼）、23:管状土錘、24～50:繩文土器（24～34:貝殻円筒形、35:条痕形、36・37:沈線文、38:撚糸文、39～50:押型文）

第25節 坂ノ上遺跡（さかのうえ）

所在地：日南市塚田甲字坂ノ上 立地：細田川右岸の丘陵（標高 76m）

調査原因：県営広域農道整備事業沿海南部地区農道整備事業

調査年月日：平成4（1992）年6月1日～10月1日

調査面積：1,300m² 調査員：長津宗重・長友郁子

1. 概要

縄文時代早期の竪穴建物跡12軒・集石遺構19基・土坑9基が検出され、早期土器（前平式土器・吉田式・石坂式土器・押型文土器）・円盤形土製品・磨製石斧・磨石・敲石・打製石器などが出土した。竪穴建物跡の平面プランには楕円形と方形があり、前平式段階の楕円形プランのSA3は石坂式段階の方形プランのSA2に切られている。楕円形プランのSA8は長さ4.6×幅2.7×深さ0.2mの最大規模で、方形プランのSA6・7は一辺3.3×深さ0.1m、SA2は一辺2.5×深さ0.25mである。SA8はSI5・6に、SA2はSI3に切られている。SA2のみが石坂式土器の時期で、他は前平式土器の時期である。縄文時代早期前葉の貝殻文土器（前平式・吉田式・石坂式）が主体で全体的に分布しているが、押型文土器は遺跡の北側（B区）で客観的に出土した。B区では押型文土器の下位から前平式土器が出土している。遺構の切り合いから3時期に分かれれる。なおチャート製ナイフ形石器がB区から出土している。

2. 基本層序

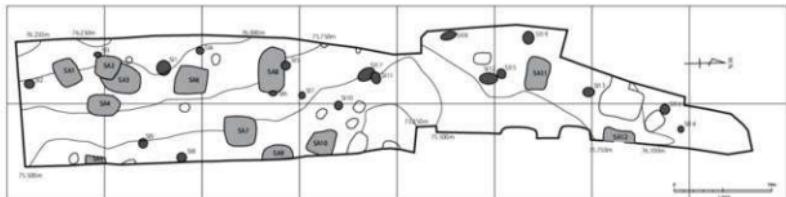
I層：耕作土、II層：褐色土層、III層：黄褐色土層（アカホヤ層）、IV層：暗褐色土層（縄文時代早期包含層）、V層：黒褐色土層（早期包含層）、VI層：明褐色土層（桜島薩摩火山灰）、VII：橙色土層、VIII：明黄褐色土層（シラス）

3. 遺構と遺物

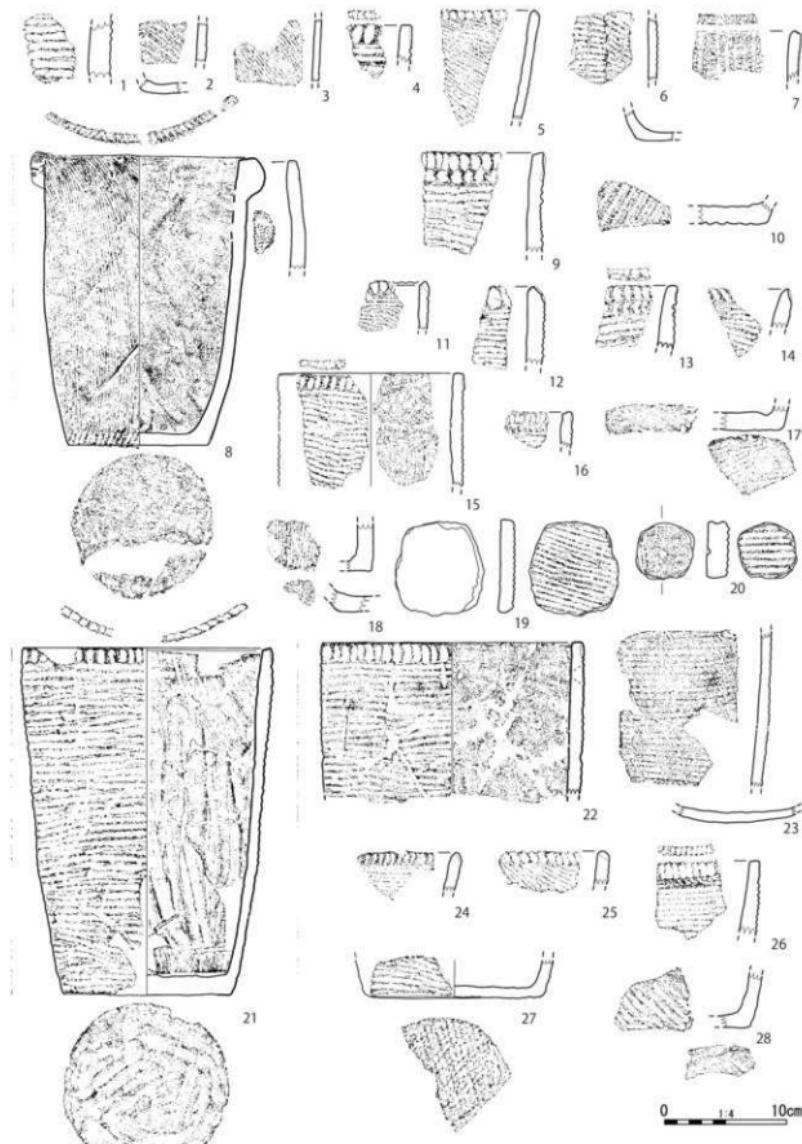
早期前葉の貝殻文円筒土器は古期前平式土器（岩本式、前平式、前原式）、中期吉田式土器（知覧式、吉田式、岩ノ上式）、新期石坂式土器（倉園B式、石坂式、下剥峯式・桑ノ丸式）に分類されている（新東2013）。21を典型とする前平式土器は円筒形で、口縁上端部の口唇稜部に貝殻・箆状施文具で1列あるいは2列の連続刺突文をめぐらし、胴部に横位・斜位の粗い条痕文を施す（58～79）。吉田式土器は口縁部に横位の貝殻刺突文をめぐらせ、その下位に楔形凸帶文を貼付し、器面には縦位に貝殻刺突文や押引文を施文する（81～99）。8を典型とする石坂式土器は口縁部外面に斜位や羽状の貝殻刺突文を施文し、胴部には縦位に綾衫状の条痕文を施す（41・44・100～110）。当遺跡の中心は前平式土器で、円筒土器以外に前平式・吉田式の角筒土器もみられる。

参考文献

新東晃一 2013 「九州南部」『日本の考古学3 縄文時代上』、青木書店

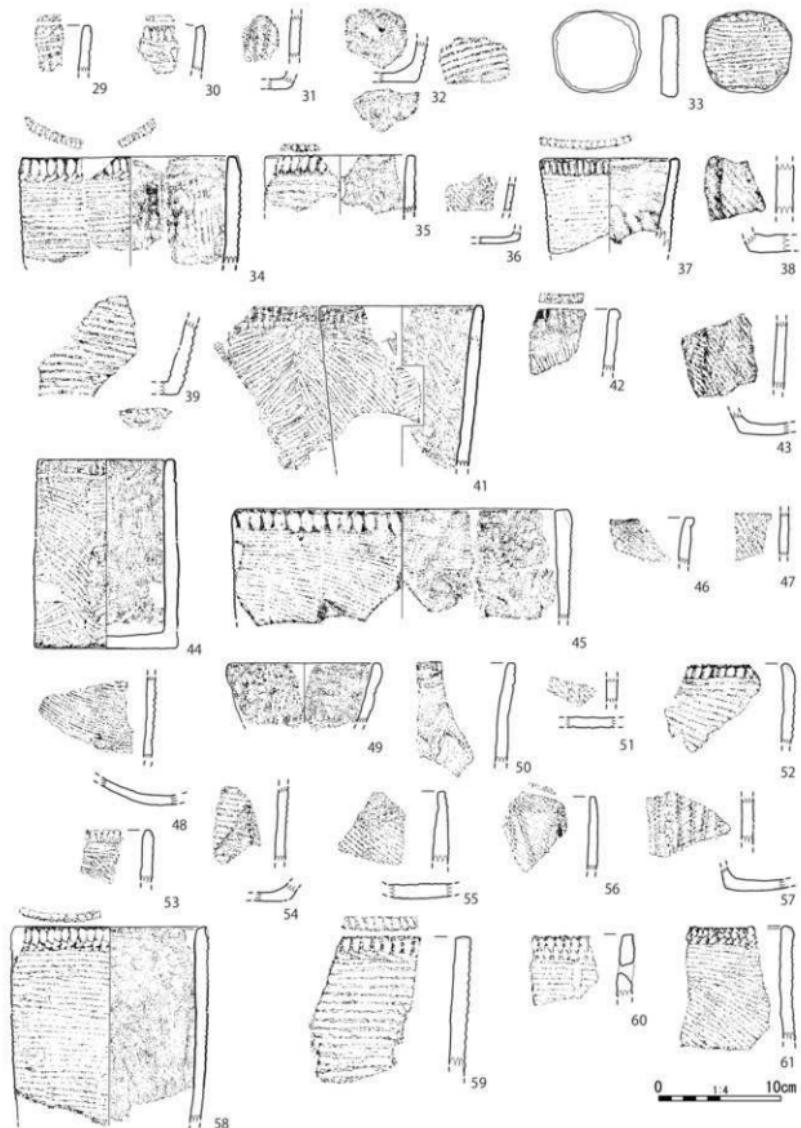


第98図 坂ノ上遺跡遺構分布図 (S=1/500)

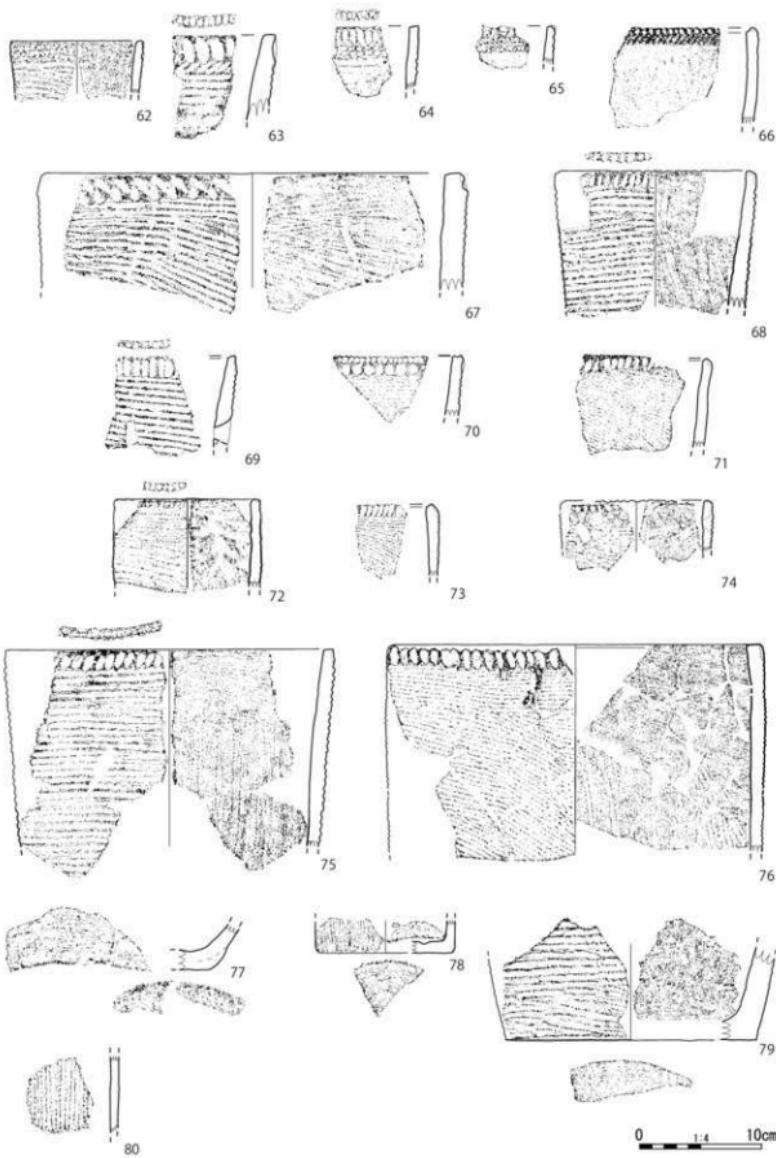


第99図 板ノ上遺跡出土繩文土器実測図(1) (S=1/4)

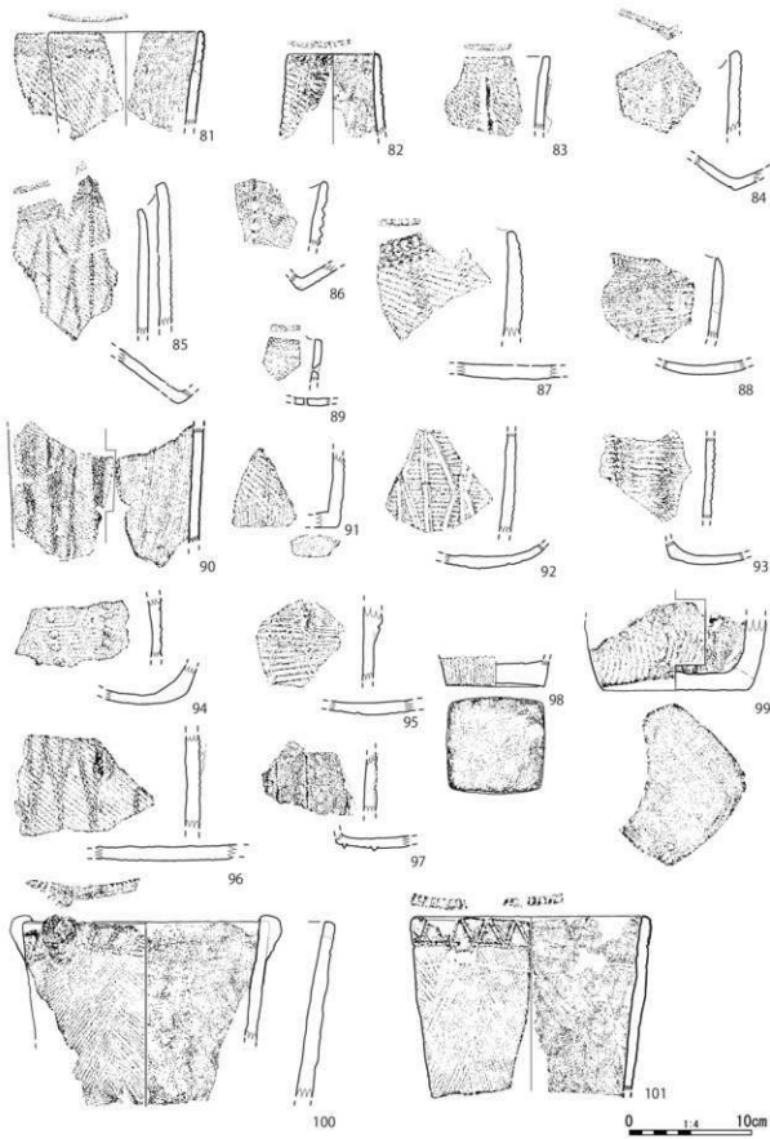
1~3: SA1, 4~8: SA2, 9~10: SA3, 11~12: SA4, 13~14: SA5, 15~20: SA6, 21~23: SA7, 24~28: SA8



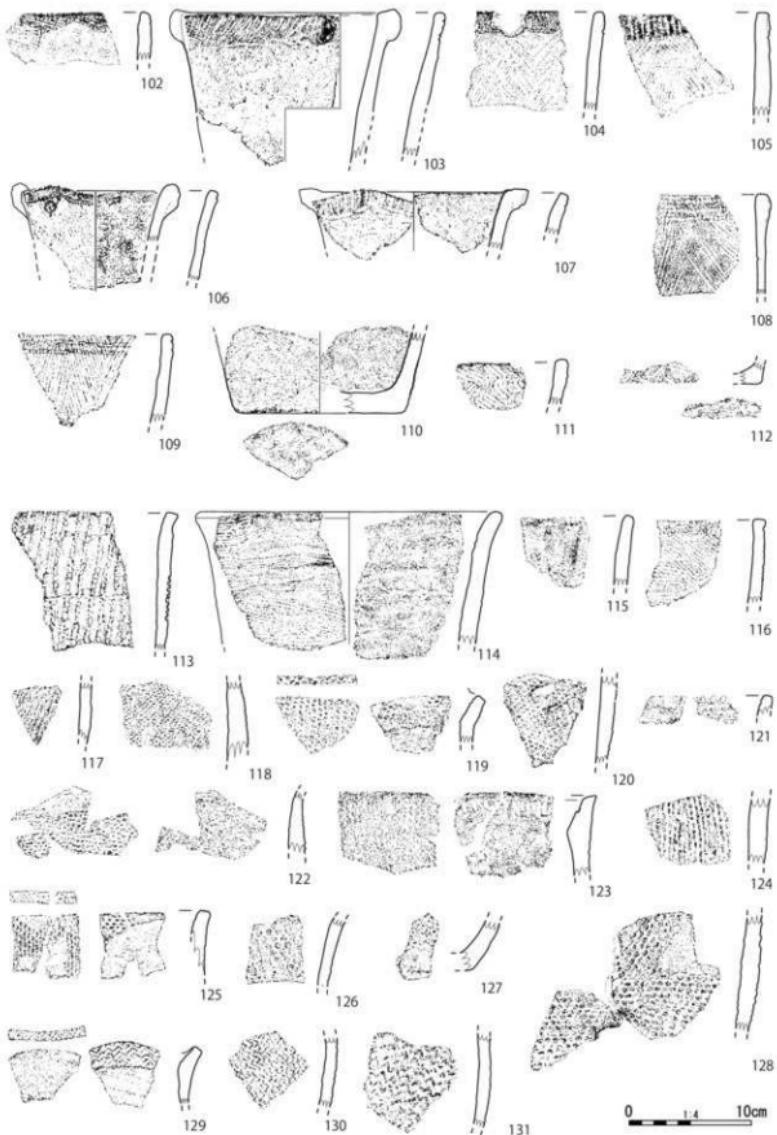
第100図 坂ノ上遺跡出土繩文土器実測図(2) (S=1/4)
29~33: SA9、34~36: SA10、37・38: SA11、39・40: SA12、41~43: SC1、44・45: SC2、46~48: SC10、49~51: SC16、52: SH6、53・54: SI1、55: SI4、56: SI5、57: SI17、58~61: A区



第101図 坂ノ上遺跡出土繩文土器実測図(3) (S=1/4) 68・73・75:B区、その他:A区



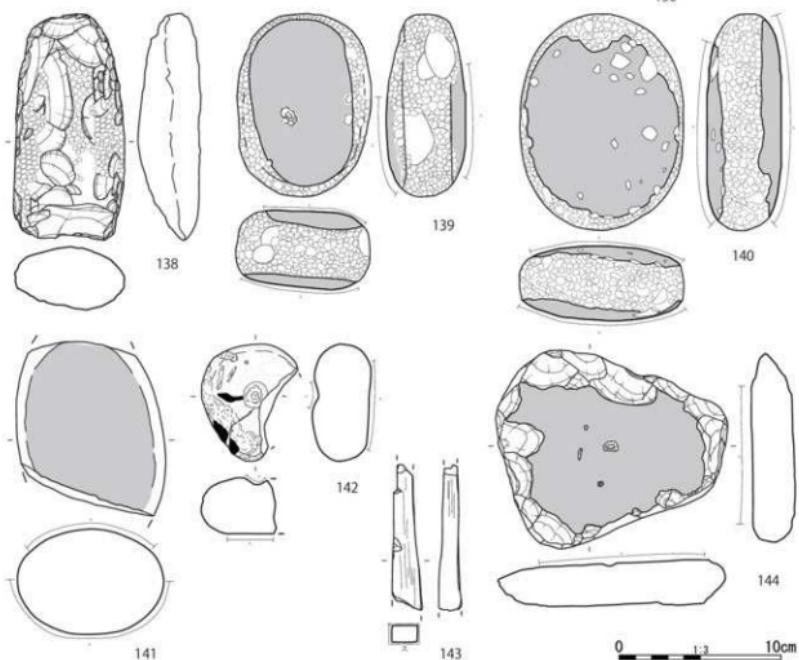
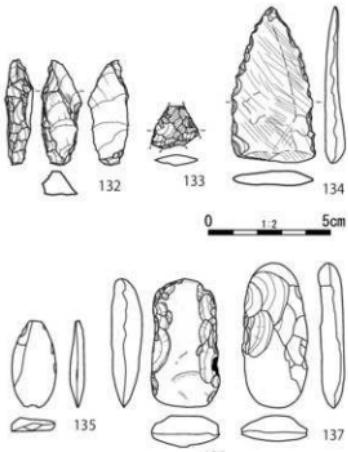
第102図 坂上遺跡出土縄文土器実測図(4) (S=1/4)
82・95・96・98・100・101:B区、その他:A区



第103図 坂ノ上遺跡出土繩文土器実測図(5) (S=1/4)
103・104・106～108・110・111：A区、その他：B区



写真 24 坂ノ上遺跡調査風景 (B 区)



第 104 図 坂ノ上遺跡出土石器実測図 (132 ~ 134 : S=1/2、135 ~ 143 : S=1/3)
132:ナイフ形石器、133:石樵、134:磨製尖頭器、135 ~ 138:磨製石斧、139・140:磨敲石、141:磨石、142:凹石、143:延石、
144:台石

第 26 節 前畠遺跡（まえはた）

所在地：日南市大字大窪字前畠 立地：丘陵端部（標高 120m）

調査原因：県営広域農道整備事業沿海南部地区農道整備事業

調査年月日：平成元（1989）年 4 月 25 日～9 月 7 日、平成元（1989）年 11 月 7 日～11 月 16 日

調査面積：1,500m² 調査員：吉本正典・面高哲郎

1. 概要

本遺跡は、南那珂山地の山腹に抱かれた集落（寺村地区）の背後の丘陵端部に立地する。遺跡の南には小河川が形成した小規模な谷底低地が広がる。調査地はその低地面より約 20m 高い。

現地での調査は、まず集落に近い側の区画（A～C-1～4 区）から着手した。A・B-1・2 区付近では、着手時に地表面に石塔などが散在しており、「寛文二」の紀年もみられたことから、まずは中世後期～近世の墓地を調査対象と定めた。掘り下げの結果、鬼界アカホヤ層（Ⅲ層）上面で当該期の墓坑群と溝状遺構が検出された。平部崎南の『日向地誌』には、この地に「長禅寺」があったことが記されており、それに関連する墓地の遺構群と目される。寺域の本体は調査地の下位（南東）側にあったと伝えられている。次いでⅢ層下位の褐色土・黒褐色土層の掘り下げを進めた結果、縄文時代早期前葉の遺物が出土し、基盤層上面で当該期の遺構が検出された。竪穴建物跡と目される方形の落ち込みも含まれる。縄文時代早期前葉の遺構・遺物は、北東側の B～D-5～9 区でも確認されている。記録は両調査区に共通する任意の基準線（N-29°-E）に沿った 10m グリッドに基づいて行った。上記両区画の間に存在した現代に続く墓地区域については 2 次調査と称してトレンチ調査を行った。

2. 基本層序

基本層序は以下のとおりである。なお、Ⅰ層をのぞく各層は北西から南東方向に向けて傾斜している。

Ⅰ層：樹根や草木根を含む表土。淡い暗褐色を呈する。Ⅱ層：暗褐色土。中世～近世墓が形成された時期に堆積した層と考えられ、墓地の存続幅を示す遺物が出土する。Ⅲ層：鬼界アカホヤ（K-Ah）にあたる。4 つの層（A～D）に細分可能で上位の a と b は土壤化が進み、黒味が強くなる。d は降下鉄石の集中箇所であり、断片的に認められる。Ⅳ層：褐色土で、乾燥すると灰色味が強くなる。下部に橙色の火山灰粒を含む。V 層との層界は明瞭でなく、漸移的である。V 層：黒褐色土。縄文時代早期の遺物包含層である。標高の高い北西側にはみられない。VI 層：シラス上部の粘質土。基盤層。

3. 遺構と遺物

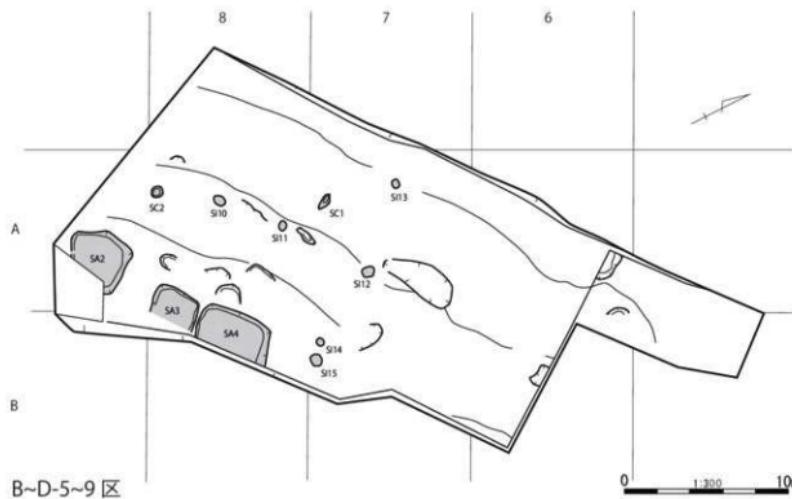
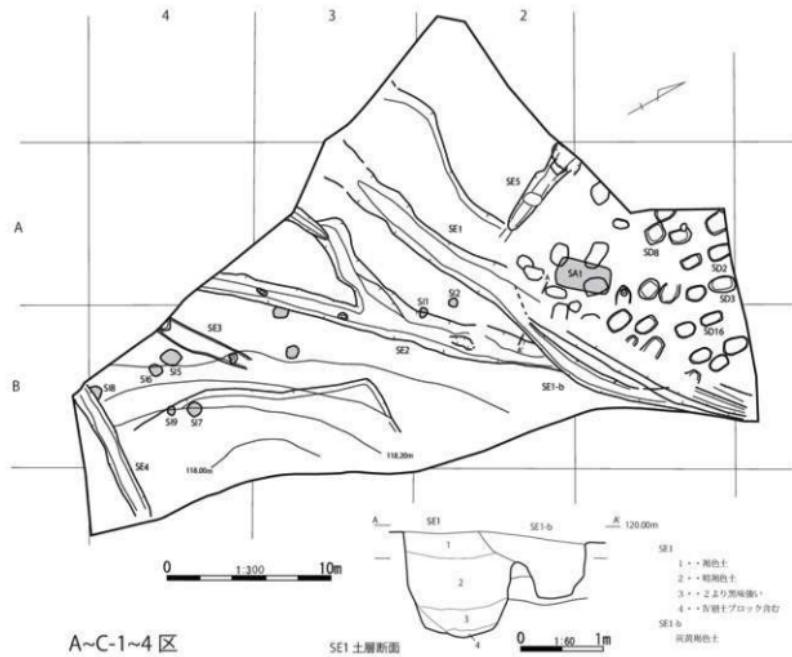
縄文早期の遺構の中で特筆すべきものとして竪穴建物跡と目される方形の土坑が挙げられる。確実な例は A-1・2 区の 1 基、C・D-8・9 区の 3 基。墓地部分 2 次調査区 2 基の計 6 基である¹⁾。いずれも VI 層の上面で V 層土を基調とする黒褐色土の落ち込みとして認識できた。明確に柱穴と認定できる pit はないが、2 次調査区で確認されたうちの 1 基には、床面南東側の壁寄りの箇所で焼上面が確認されている。SA1 は A-1・2 区で検出された。3.2m × 2.0m の長方形の平面形を呈し、検出面からの深さは約 40cm である（第 107 図左）。SA2 は A-9 区で検出された。一部は調査区外となるため確定的でないが、やや不正な方形を呈する遺構であろう。一边長は 3.7m、検出面からの深さは約 30cm（第 107 図右）。いずれも埋土中にやや大きな礫を含んでいる。SA2 の北西に並ぶように SA3 と SA4 がある。また図化できなかったが、2 次調査区でも隅丸方形の同様の遺構が検出された。いずれも埋土中から前平式の小破片が出土しており、後述するように V 層から出土した土器が前平式を主体とすることから、早期前葉の時期に構築されたものと推定できる。



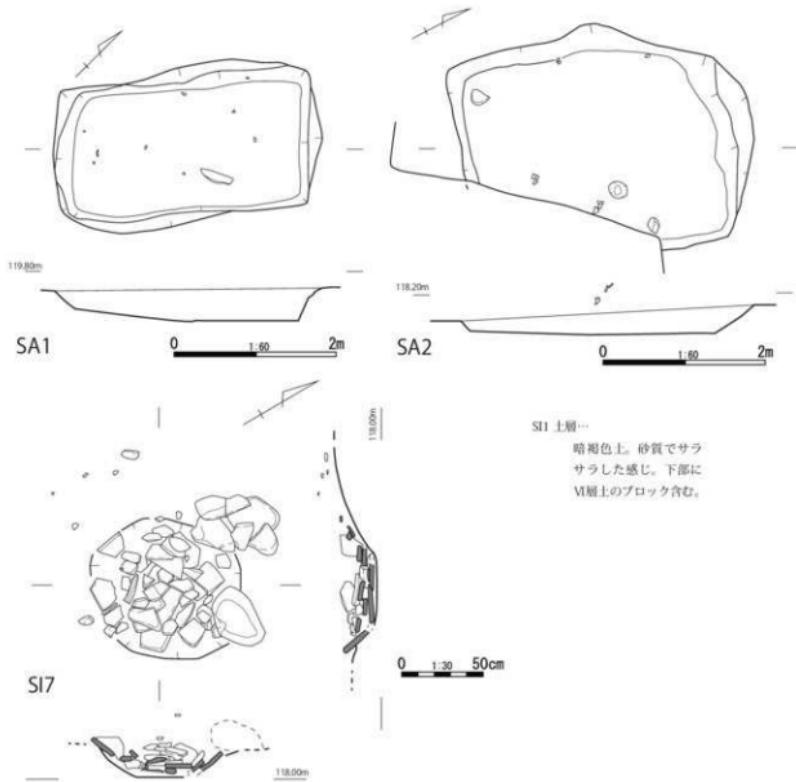
第105図 前畠遺跡調査区の配置と周辺地形図 (S=1/1,000)

また径約0.8～1mの円形、あるいは長軸長さ1.2m程の楕円形の土坑が、確定なものだけで8基輸出されている。V層では集石遺構も多数検出されている。A～C-1～4区で9基、B～D-5～9で6基確認された。中にはV層下部に浅い掘り込みを設けて扁平な礫を並べ、その上に拳大以下の礫を集めるタイプのものが認められた。図化したSI7はそのうちの一例である。

縄文時代早期の土器は、V層を中心に数多く出土している(第108～111図)。そのほとんどが貝殻文円筒形土器の系統に属する。1～33は口縁外面の上端部に圧痕や連点文を横方向に施し、以下の部位には横方向の貝殻条痕を施す一群である。早期前葉の前平式に属するもので、数量の上では圧倒的に多く、調査区内でまんべんなく出土する。口縁端部の形状を観察したところ、尖るもの(1など)、丸く收まるもの(11など)、平坦面を形成するもの(23など)といったバリエーションがあり、口縁上端部の文様帶についても列数の変異(1～3列)が認められる。大きさについても大・中形品に加えて少數ながら29や30のような小形の個体も存在する。色調については各々触ることはできないが、暗褐色を呈する個体が多い。完形に復元できる資料はないが、類例より53のような円盤状の平底の底部が付くものと考えられる。そのほか、楔形の突起を付す37や、角筒形となる38・39、貝殻腹縁による押し引き状文様を施す40、綾杉状の沈線文を施す44・45などが出土しているが、前平式と比べるとごく少量である。押型文系土器(51・52)も同様に数量的に少ない。



第 106 図 前畠遺跡遺構分布図 (S=1/300) ※縦文時代早期の遺構はアミカケしている。



第107図 前畠遺跡縄文時代早期の遺構実測図 (S=1/30、S=1/60)

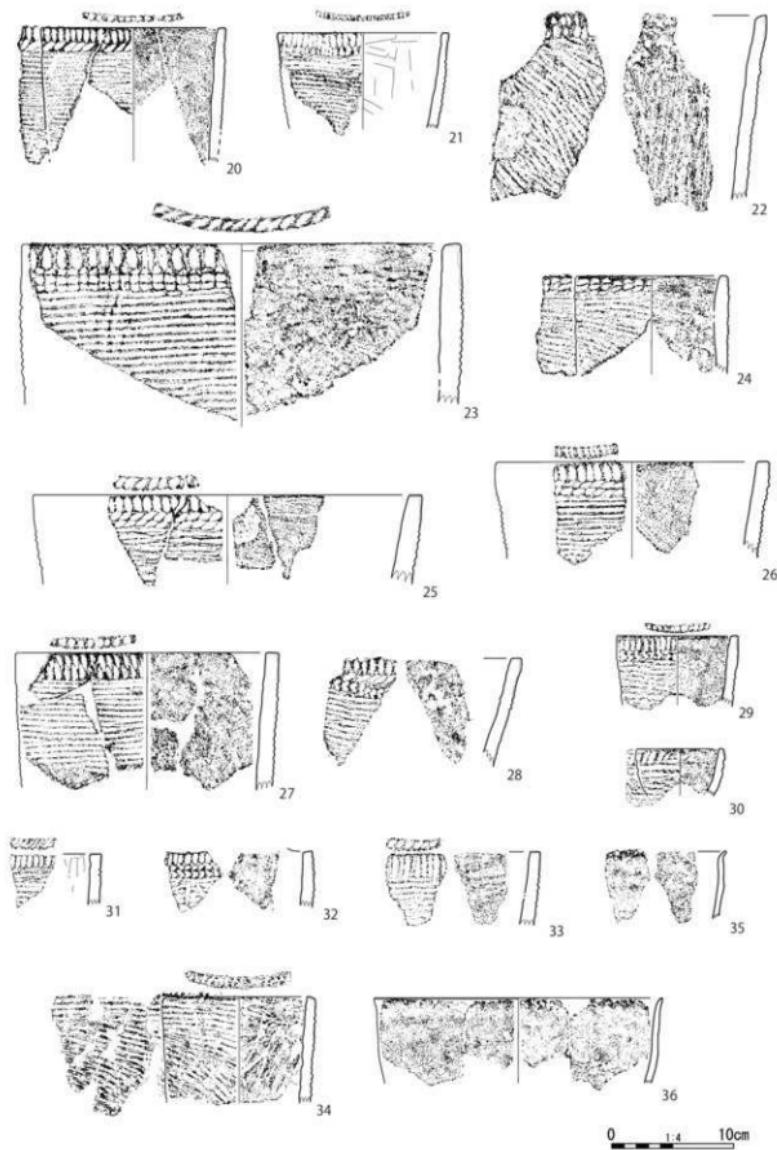
石器はV層から出土した資料7点について図面を掲載した。数値は示すことができないが、土器量に比して剥片石器が少ない印象を受ける。一方、大きめの扁平な礫が一定量出土しており注目に値する。62は局部磨製の石槍。安山岩製である。63も安山岩製の小振りの石槍で、時期的に62より下降するものであろう。64はホルンフェルス製の剥片石器。長側縁側に刃部を形成する。65は小形の黒曜石製の石鎌。基部をわずかに凹ませる。66～68はいずれもホルンフェルス製の磨製石斧である。

中世後期～近世の墓地関連の遺構については、A・B-1・2区を中心とする範囲に墓坑が集中し、その南東～南を区切るようにSE1が掘削され、さらに南西はSE5によって仕切られる。おそらくは、方形の区画が設定されているのである。墓域は現代に続く墓地のある北東側に展開している。SE1の埋土中には陶器類に加えて五輪塔を構成する空風輪や水輪などがみられた。SE5には赤化粧や陶器片の集中箇所がある(第113図)。

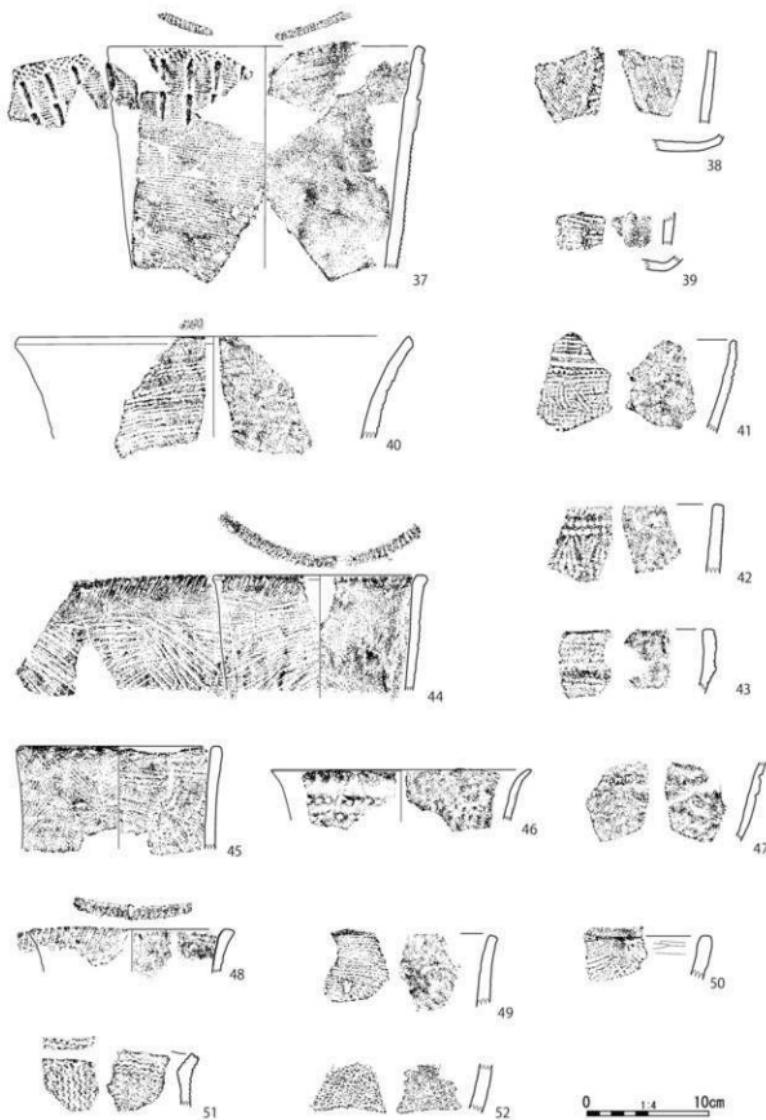
SE1は、B-1・2区付近で複線となる。この付近はSE1を切るようにいくつかの墓坑が掘り込まれており、断面観察によれば、より南東側にある溝のSE1-bがより新しく、SE1の埋没後に掘削されていることが明瞭である。



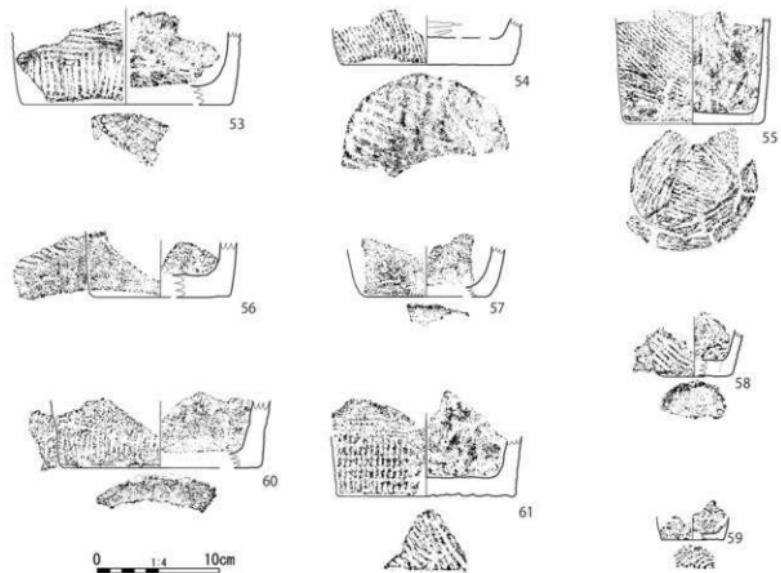
第108図 前畠遺跡出土繩文時代早期土器実測図 (1) (S=1/4)
5: IV層、9: SE1、17: SA2、その他: V層



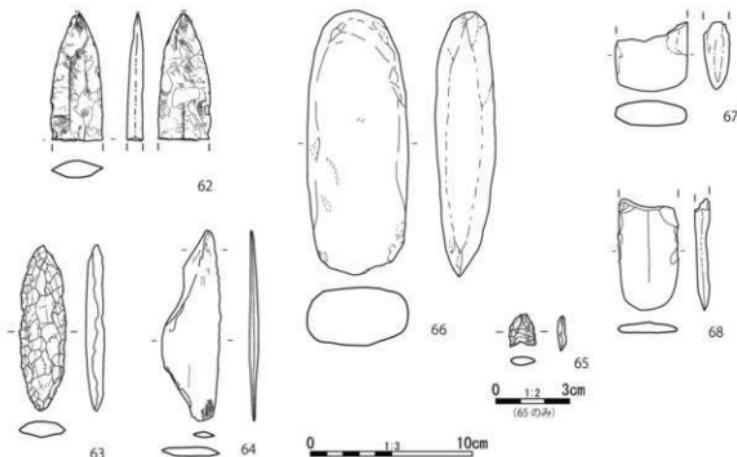
第109図 前畠遺跡出土縄文時代早期土器実測図(2) (S=1/4)
22: IV層とV層の層界。その他: V層



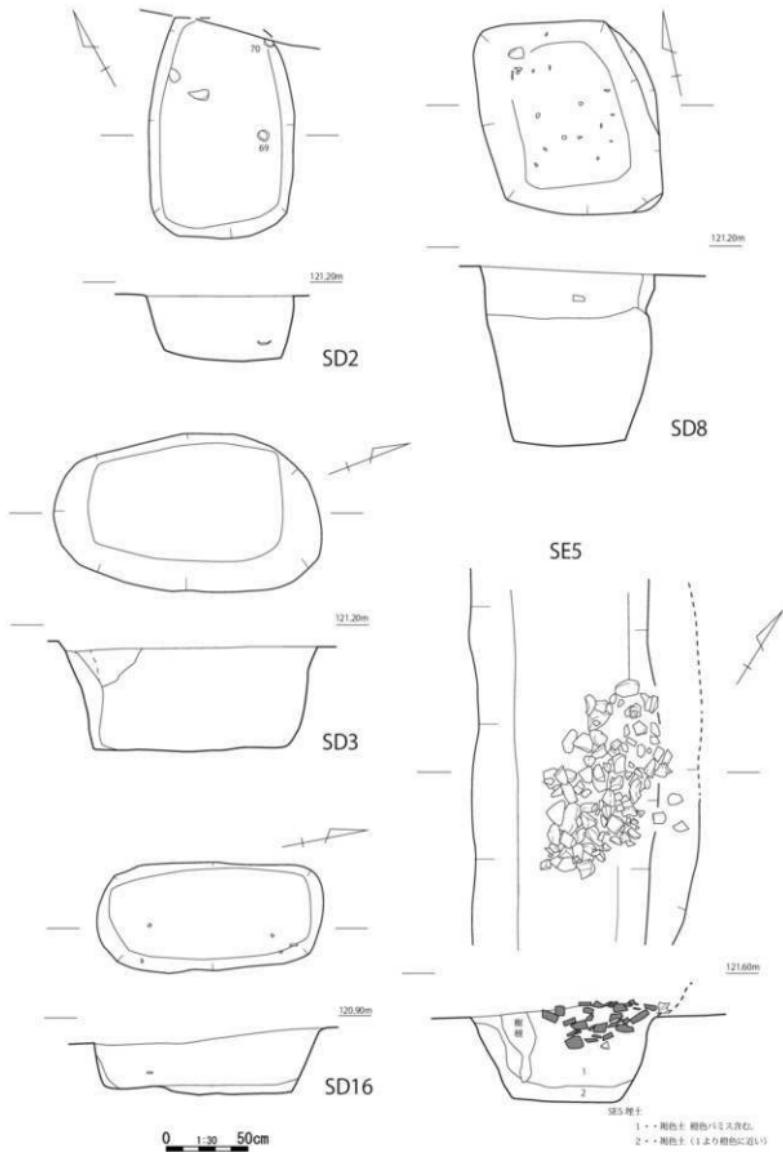
第110図 前畠遺跡出土縄文時代早期土器実測図(3) (S=1/4)
37: SE1, 45: IV層、その他: V層



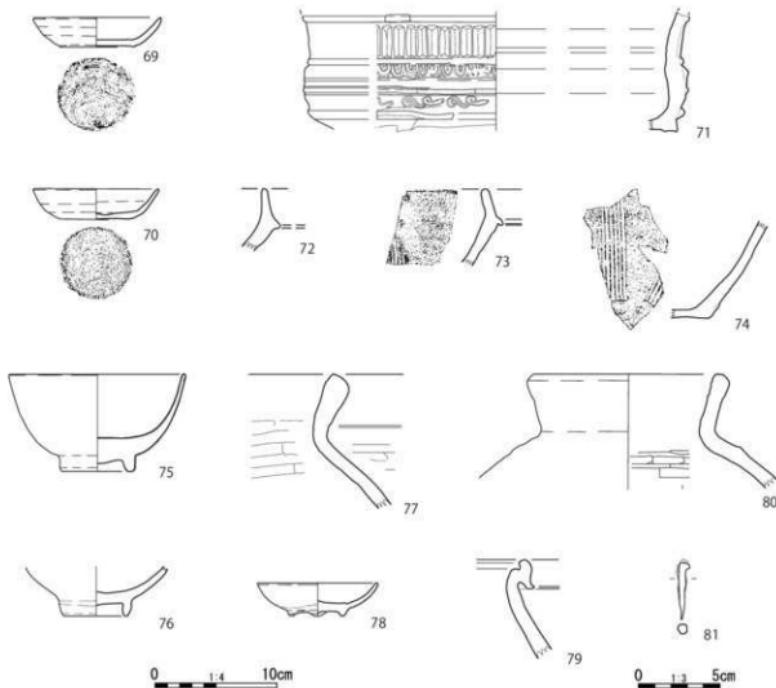
第111図 前畠遺跡出土縄文時代早期土器実測図(4) (S=1/4)
全てV層出土



第112図 前畠遺跡出土縄文時代早期石器実測図 (S=1/4)
全てV層出土



第113図 前畠遺跡中世後期～近世の遺構実測図 ($S=1/30$)



第114図 前畠遺跡中世～近世の遺物 (S=1/3、S=1/4)
69・70: SD2、71~76・79: SE1、77・78: I層、80: SE5、81: SD18

SE1の埋土1にはIV層土のブロックを含んでいる。これらのことから、墓坑を構築可能な範囲が狭くなったためSE1が埋没した(あるいは埋めた)後、墓域の面積の広がりに対応する形でSE1-bが掘削されたと推定しておきたい。墓坑の平面形は圓丸の方形、長方形を呈するものが多い。鉄釘(81)の出土から木棺の使用が裏付けられる。

出土遺物は第114図に示した土師器・陶磁器類のほか、六道銭と称される銭貨が墓坑中より出土している。遺存状況が良くないため銭種の判別できないものも多いが、洪武通宝や寛永通宝が主体のようである。人骨も同様に依存状況が悪く、歯片らしき部位が目立った程度である。SD2の埋土中からは完形の土師器杯2点(69・70)が出土している。

註

- 1) 1990年の概要報告では「二次堆積シラス層上面で9基の土坑を検出」と記述しているが、整穴建物を含む遺構数については今回の報告内容が優先される。

参考文献

吉本正典 1990 「前畠遺跡(長神庵寺墓地推定地)」(宮崎県文化財調査報告書33)、宮崎県教育委員会



写真 25 前畠遺跡全景（上空南西より）



写真 26 SE01 と基地（南西より）



写真 27 B～D-5～9 区VI層上面（北東より）

第27節 唐人町遺跡（とうじんまち）

所在地：串間市大字西方字唐人町 立地：洪積台地上（標高17m）

調査原因：県営広域營農團地農道整備事業沿海南部地区農道整備事業

調査年月日：昭和62（1987）年8月～10月、昭和63（1988）年10月17日～平成元（1989）年1月31日

調査面積：1,500m² 調査員：北郷泰道・面高哲郎・吉本正典

1. 概要

南那珂山地の一角に源を発する福島川の右岸に広がる段丘平坦面（通称善田原）に立地する。この平坦面は、姶良カルデラ起源の火碎流（シラス）を基盤とする台地であり、標高は海拔20m弱である。遺跡の西縁部は急崖を成し、シラス台地と呼ばれるこの種の地形に特有の景観を呈している。

2次にわたって路線予定地幅を対象とする調査を行った結果、大きくは弥生時代早期～前期、古墳時代前期、中世の3つの時期の遺構・遺物が確認された。

2. 基本層序

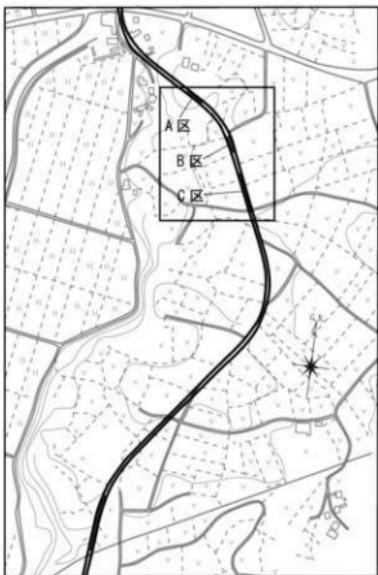
基本層序は下記の通りである。なお、主たる遺物包含層はⅡ層であり、Ⅲ層あるいはⅤ層面で各時代の遺構を確認している。Ⅲ層とⅣ層からはごく少量の遺物が出土するのみである。Ⅴ層以下の土層については深掘りトレンチで確認した。遺物は出土していない。

I層：表土、黒褐色土、II層：黒色味の強い黒褐色土。古墳時代～中世までの時期幅の広い遺物包含層であるが、II層下部からは古墳時代の遺物のみが出土している。III層：瀬島御池ボラの混入する黒色土。IV層：黒色土、V層：K-Ah、VI層：茶褐色ローム、VII層：黒褐色土、VIII層：褐色土、IX層：AT

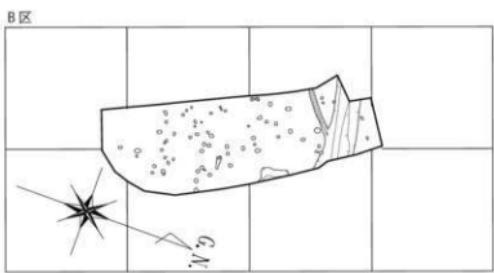
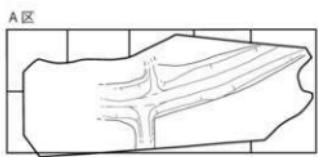
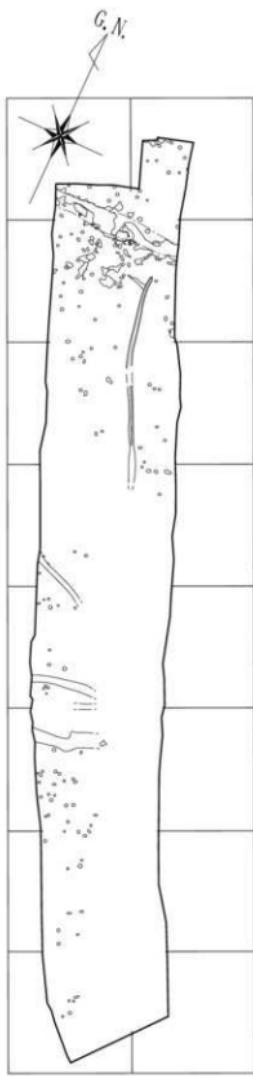
3. 遺構と遺物

第2次調査区のII層土より弥生時代早期～前期の土器が出土している。特に調査区南側の溝状落ち込みの近くで多く出土している。ただし当該期の遺構は未検出である。1と2は波状口縁の平底浅鉢である。1は外面に粗いミガキを施し橙色を呈する。口唇部には不規則に頂部の凹んだ突起を付す。頭部は突帯状に外方に張り出す。2は外面に斜め方向の沈線文を施す。3～10は刻目突帯文を巡らせる甕である。逆「く」字形に屈曲して肩部を形成する一群と、口縁部が単純に外反する一群とに分かれる。いずれも黒褐色や暗褐色を呈する個体が多い。9は非貫通の孔列文を施している。11～13は壺の口縁部である。13は橙色を呈し、焼成がひとときわ堅緻である。14は口縁の端部に接して三角形の突帯が付く、いわゆる亀ノ甲タイプの甕である。15と16は沈線文を描く甕の破片。以上の他、図化していないが扁平打製石斧が欠損品を含めて13点出土しており、当該期の耕起具であった可能性がある。

古墳時代関連の遺構としては、第2次調査区の北端付近で前期に属する竪穴建物跡が8軒が検出されており、当地域では数数ない同時期の資料として重要である。このうちSA1とSA2・SA3、およびSA5とSA6は重複しており、埋土の観察から前者についてはSA3→SA2→SA1、後者についてはSA5→SA6の順に構築されたことがわかる。SA5は方形の平面形を呈する。判明している一辺長は約5.0mで、柱穴と目される4基のpitが確認できるが、やや南側に偏った位置にある。SA6も平面形は方形で、一辺長は約4.3m。2本柱の住居であろう。貼床をはずしたところ、凹凸の激しい掘削面があらわれた。西側の壁面近くには屋内土坑がある。SA6は3.5×2.2mの長方形を呈する。SA4は残存状況が悪く、壁の立ち上がりを捉えることができなかった。



唐人町遺跡第1次調査区配置図

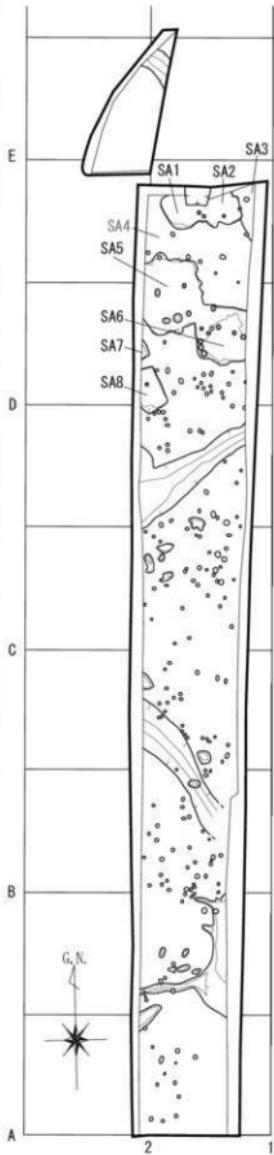


C区

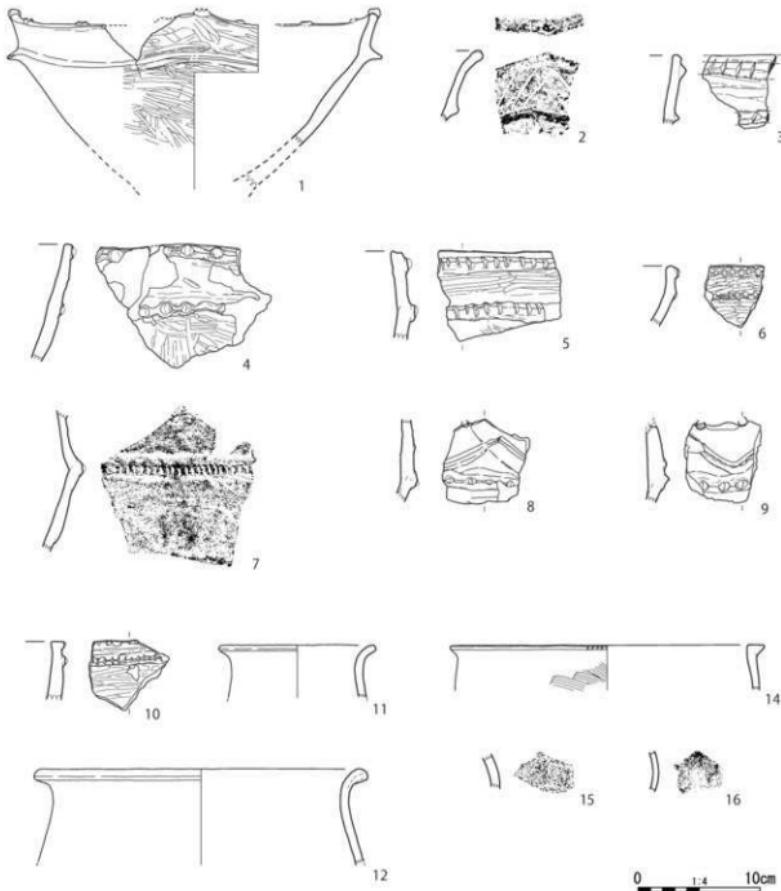
第115図 唐人町遺跡第1次調査遺構配置図 (S=1/400)



唐人町遺跡第2次調査区配置図



第116図 唐人町遺跡第2次調査遺構配置図 (S=1/400)

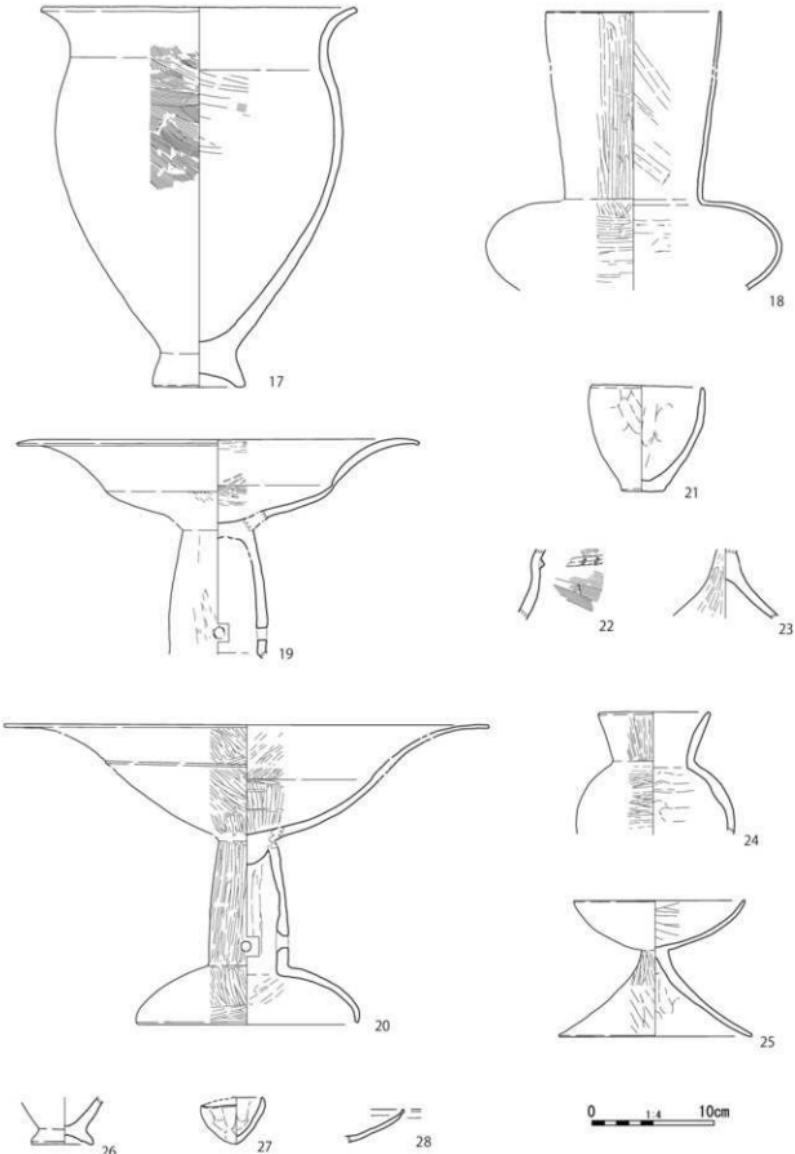


第 117 図 唐人町遺跡出土遺物実測図 (1) (S=1/4)

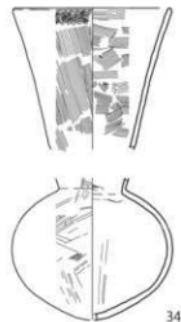
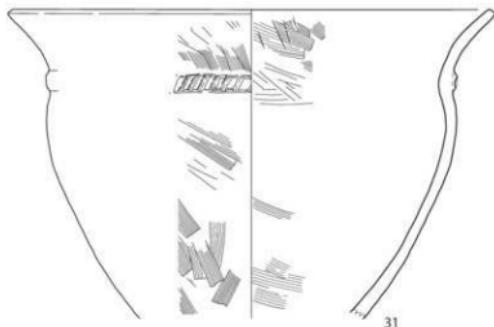
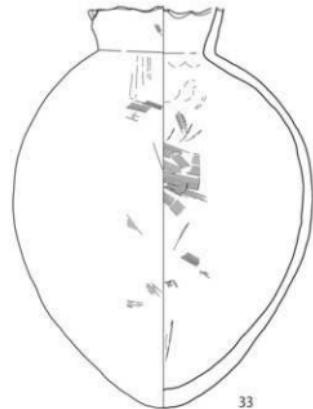
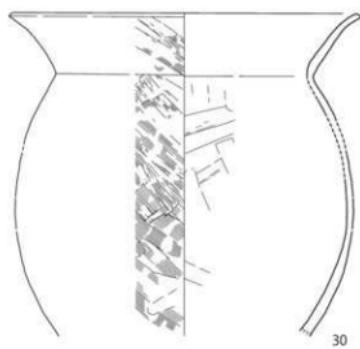
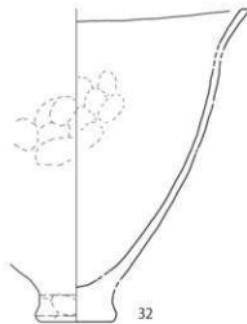
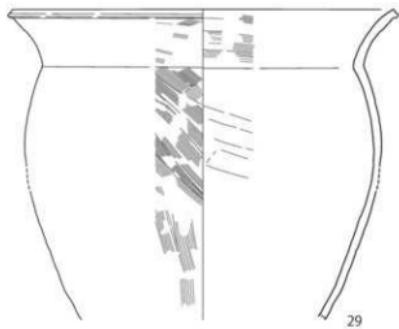
遺物は床面よりやや上位のレベルで出土しているものが多い。17 ~ 20 は SA1 出土。17 は口縁部が緩やかに外反する甌で、底部は脚台状の上げ底となる。18 は扁球状の体部に直に伸びる口縁部が付く甌。19 と 20 は長く伸びる杯口縁部とエンタシス状に膨らむ脚筒部が特徴的な高甌である。どちらも円形の透孔を有する。20 には椀状の脚裾部が付く。21 ~ 23 は SA2 出土。21 は小形の椀。23 は脚裾部が大きく開く精製の高甌である。

24 と 29・30 は SA3 出土。球形の体部を持つ甌。29 と 30 は甌で 17 と同じ特徴を有するが、屈曲部内面の稜線がやや鋭い。25 は SA6 出土。椀状の甌部と大きく開く脚部を持つ精製の高甌である。

26 ~ 28 は SA8 出土。精製の甌か高甌の甌部であろう。これら竪穴建物出土の土器群は、松永幸寿による 3 期あるいは 4 期（庄内式併行）に比定できる。

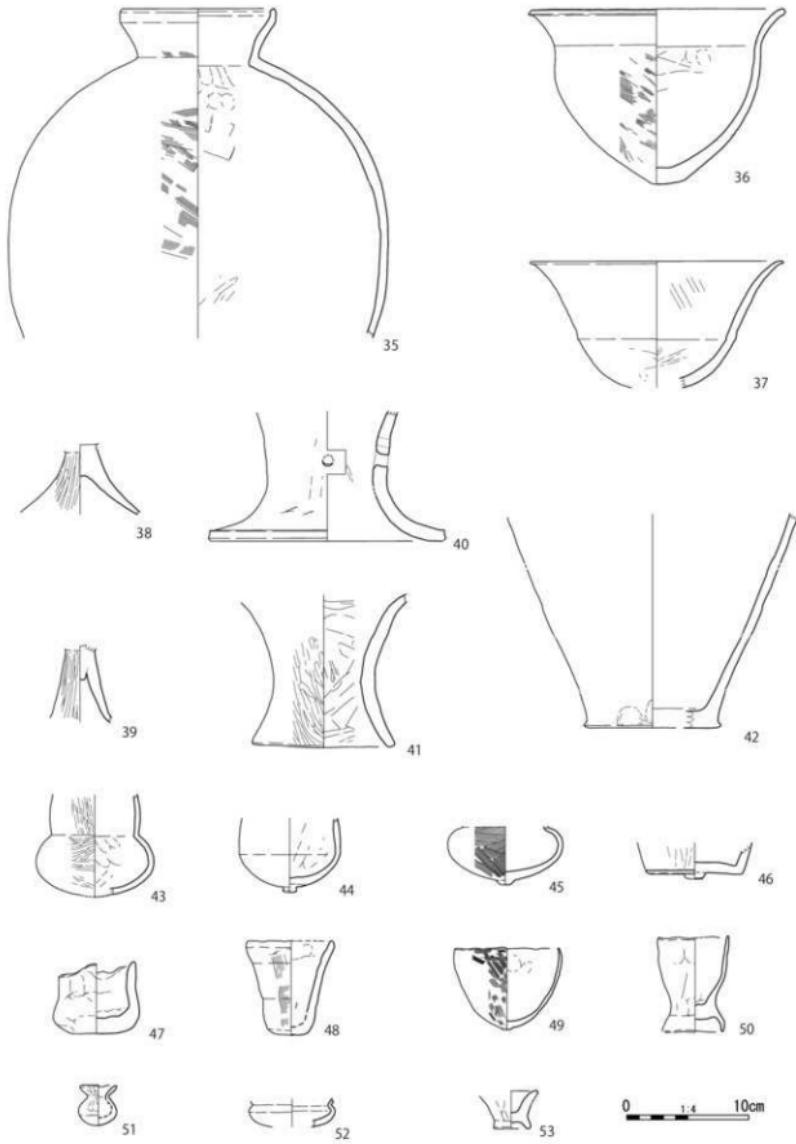


第118図 唐人町遺跡出土遺物実測図(2) (S=1/4)



0 10cm

第119図 唐人町遺跡出土遺物実測図(3) (S=1/4)



第120図 唐人町遺跡出土遺物実測図(4) (S=1/4)

31～53は包含層出土資料である。31は頭部に刻目突帯を巡らせる壺である。前出の松永編年では、この種の突帯壺は大形壺に分類されており、本資料も他に比べてやや口縁部径が大きい。33は倒卵形の体部を持つ單口縁壺。34は球形の体部に直に伸びる口縁部が付く壺である。35は口縁部がわずかに折れ曲がる二重口縁壺である。

40と41は器台である。40は透孔を有する。明赤褐色を呈し、他と比較すると焼成不良で脆い。43～53は小形の器種で43～45は精製の壺。46は楕状となる。44～46の底部には小さな突起が付く。47以下はいわゆるミニチュア品で47は手捏ね土器である。49は44などと同様に底部に小突起を付ける。ただし精製品ではない。

中世については第2次調査区で柱穴群が確認されたものの、建物など遺構の明確な配置等は明らかにできない。埋土中に炭化木が遺存している土坑もあり、炭化木には貫穴らしき部分が確認できる。

1と2は高台付碗。1は口縁部で内外面に丁寧なミガキを施す。2は低い高台を有する。4・5は東播系須恵器の捏鉢。12～13世紀代か。6は14世紀後半の片口の備前系捲鉢、7は常滑系の壺である。8～14は中国産白磁である。8～10は口縁部が玉縁となるIV類の白磁碗。11は嘴状の口縁をもつV類の壺である。12はVI類の皿、13は14世紀代の皿の口縁である。釉がやや鼠色を帯びる。14はIX類の皿で口縁端部が口禿げとなる。13世紀後半から14世紀前半の資料である。15～20は青磁である。15は錦蓮弁文、16は線描の細蓮弁文の碗である。19は見込みに呉須で書かれた「正」とみられる文字がある。20は輪花皿の口縁部。21～26は青花である。21～23は碗で、21には草花文、22は見込みに花鳥文を、高台内に「萬福攸同」の款を書す。23は見込みに花文を配している。24は碁笥底皿、25は高台に玉取獅子と考えられる文様が認められる。26は福建産と考えられる壺である。類似品が宮崎市清武城跡からも出土している。青磁は小破片が多く、ほとんどは15～16世紀の時期幅に収まる。

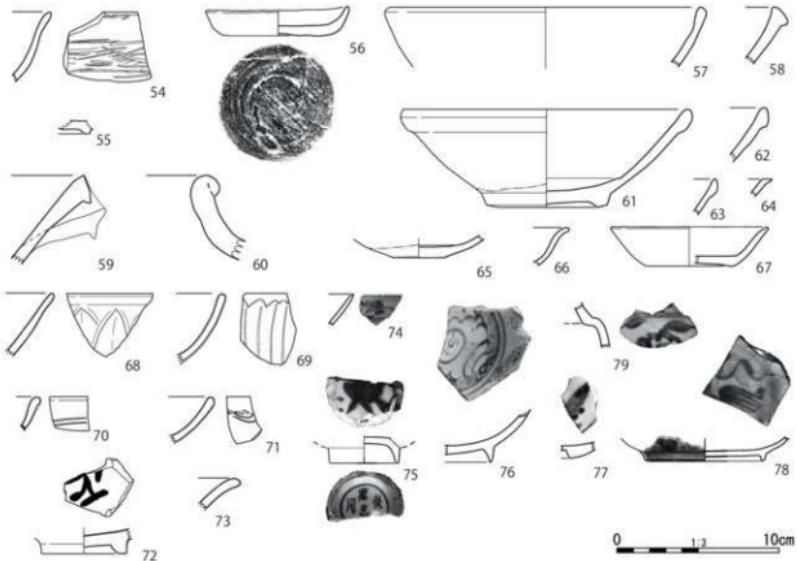
27～36は近世墓から出土した資料である。遺構は第1次調査区A区で検出されたが詳細な記録は残っていない。3基からは唐津の丸皿や溝縁皿（27～37）が出土し、1基より7枚の寛永通寶が出土した。寛永通寶はすべて「ス貝賀」で17世紀初頭に位置付けられる。

また包含層からの出土であり時期は特定できないが、軽石製加工品や鉄製釣針、鉄滓などが出土している。鉄滓はまとまった量が出土しており、近隣で鍛冶が行われた可能性が高い。

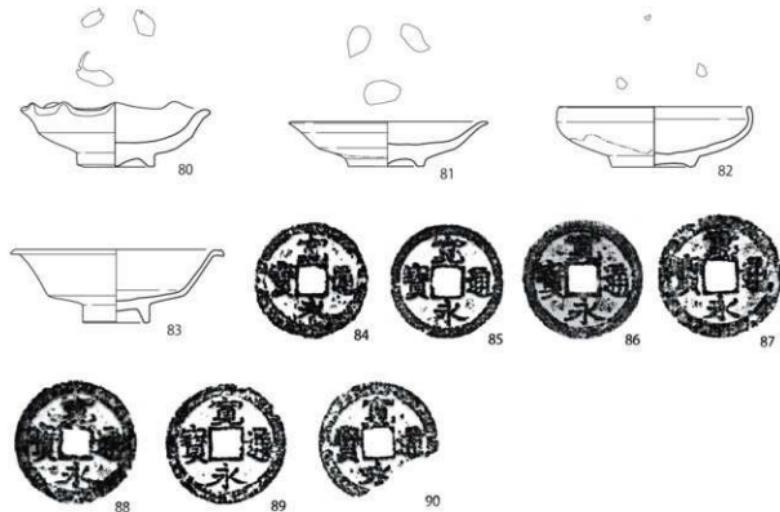
さらに、自然地形による溝状の落ち込みが6箇所確認されている。いわゆる埋没谷であり、転落してきた多くの遺物を含んでいる。水の作用によってシラスが刻まれてできた小地形であろう。

参考文献

- 松永幸寿 2004 「日向における古式土師器の成立と展開—宮崎平野部を中心として—」『西南四国一九州間の交流に関する考古学的研究』
- 吉本正典 1989 「唐人町遺跡の発掘調査—成果と問題点—」、宮崎考古学会資料
- 吉本正典 1993 「第10節 広瀬川・福島川流域 150 唐人町遺跡」『宮崎県史』資料編考古2
- * 今回の報告にあたって当遺跡に関する事実関係に大きな変更点ないが、遺物の接合作業を行ったため、土器については今回示したデータを参考されたい。
- 渡辺 誠 1992 「宮崎県串間市唐人原遺跡の鉄製釣り針」『考古資料ソフトウェア写真集』7、名古屋大学文学部考古学研究室
- * 「唐人原遺跡」は本遺跡名の誤植である。



第121図 唐人町遺跡出土遺物実測図(5) 古代～中世 (S=1/3)



第122図 唐人町遺跡出土遺物実測図(6) 近世墓 (80～83:S=1/3、84～90:S=1/1)



写真 28 唐人町遺跡第1次調査A区掘り下げ状況



写真 29 唐人町遺跡第2次調査SA5・SA6

第28節 別府ノ木遺跡（べっぷのき）

所在地：串間市大字西方字別府ノ木 立地：洪積台地上（標高約20m）

調査原因：県営広域營農団地農道整備事業沿海南部地区農道整備事業

調査年月日：平成元（1989）年8月15日～11月1日

調査面積：2,000m² 調査員：長友郁子

1. 概要

表土中から多くの陶磁器を回収したが、包含層は耕作により破壊されているところが多くあった。なお人為の遺構ではないが、調査者によりIX層の砂質土が地震痕跡（噴砂）である可能性が指摘されている点が注目される。

2. 基本層序 I層：耕作土、II層：漆黒色土（遺物包含層）、III層：漆黒土（II層を母材にボラを少量含む）、IV層：黄色土（K-Ah）、V層：暗褐色土、VI層：暗褐色土（V層よりも硬質・強粘質）、VII層：黄褐色土、VIII層：黄色土（AT）、IX層：灰色砂質土（直径3mm程度のバミス？を含む。地震による噴砂か？）

3. 遺構と遺物

遺構として柱穴20基、土坑5基、溝状遺構3条を検出したが、いずれも遺物を伴わず帰属時期は不明である。土坑は平面形が隅円長方形で長軸50cm程度を測る。

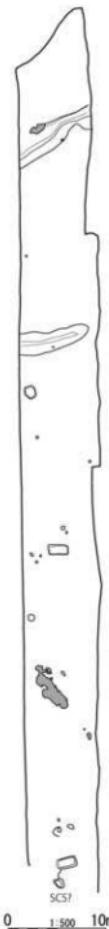
遺物として表土および包含層中から縄文土器片約10点（主に早期・晚期）、弥生土器片約30点、須恵器片、陶磁器片約350点、石器約10点が出土した。

1は早期前葉の貝殻条痕文円筒形土器で前平式である。2・3は晩期の突帯文土器で、3は口縁部直下に非貫通の穿孔が観察される。17も晩期の孔列文土器で、口縁部外面付近には煤状炭化物の付着が顕著である。

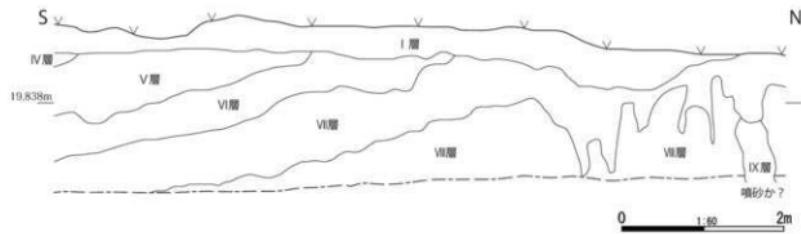
4～15・18は弥生土器であり、16は須恵器の甕の破片である。



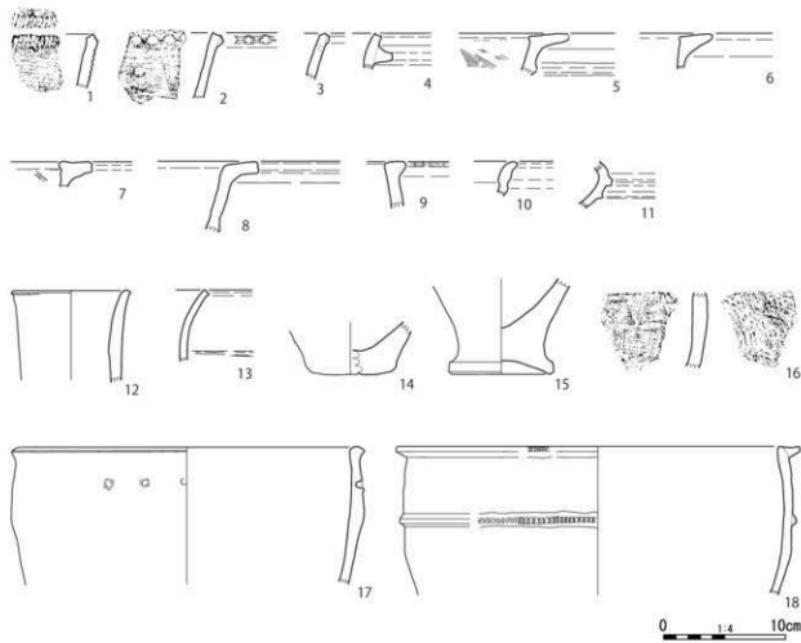
写真30 別府ノ木遺跡調査区全景



第123図 別府ノ木遺跡
遺構分布図 (S=1/500)



第124図 別府ノ木遺跡土層断面実測図 (S=1/60)



第125図 別府ノ木遺跡出土遺物実測図 (S=1/4)

報告書抄録

ふりがな	むげんじゆんきねんmaiぞうぶんかがいしりょうかふようせいしんじぎょうほううこくしよ							
書名	滋県130年記念埋蔵文化財資料活用推進事業報告書							
著者名								
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第232集							
編著者名	飯田博之・沖野誠・菅谷和樹・長津宗重・二方和也・橋本英俊・福田泰典・松林豊樹・松本茂・吉本正典							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2014年 3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所	由町村番号	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
じぞうがもの	みやざきけんのへいせいしみねあらわだしそうだ					19870803-		
地蔵ヶ森	宮崎県延岡市小峰町字後田	45203				19870909/19880530-	900 m ²	
丸枝	みやざきけんのほじましまさでんかどわいとひくさあだ	45421				19880509		
高平城	宮崎県東臼杵郡門川町加草字枝	45206				19950125-19950215	130 m ²	
かのじよせうじ	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45206				19911202-19920805	5,200 m ²	
野野原	宮崎県向市大字塙屋宇野原	45206				19830613-19830806	2,020 m ²	
おおだノ口第3	宮崎県向市大字短屈宇野原	45401				19960704	40 m ²	
おひ	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45208				19951101-19951130	250 m ²	
諫防	宮崎県西都市大字右松233	45382				19941122-19941220	196 m ²	
えり	みやざきけんのほじましまさでんかどわいとひくさあだ	45382				19900809-19901130	2,200 m ²	
上岩知野	宮崎県東諸県郡富町大字上岩知野	45201				19880524-19880903	2300 m ²	
たけのいた	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45201				19870918-19871205	550 m ²	
竹之下	宮崎県宮崎市大塚町竹之下	45201				19870519-19870715	700 m ²	
ごんなんじゆく	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45201				19870519-19870715	520 m ²	
櫻宮古	宮崎県宮崎市大塚町櫻宮古	45201				19930920-19931223	8000 m ²	記録保存調査
とうじ	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45205				19921214-19930122	750 m ²	
多宝寺	宮崎県宮崎市大塚町宮六つ合	45201				19870519-19870715	1000 m ²	
おほよこ	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45201				19950626-19950728	1000 m ²	
大徳寺	宮崎県宮崎市大塚町宮時宗	45201				19900508-19900601	1000 m ²	
おおき	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45201				19900508-19900601	1000 m ²	
青木	宮崎県宮崎市田代町大字梅谷	45205				19900508-19900601	1000 m ²	
いこま	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45205				19921214-19930122	750 m ²	
生駒	宮崎県小林市大字南西方字山駒	45205				19950804-19950831	910 m ²	
いのくはら	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45205				19950626-19950728	1000 m ²	
神の原	宮崎県小林市大字細野字神の原	45205				19900508-19900601	1000 m ²	
まことの原	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45205				19900508-19900601	1000 m ²	
前ノ原	宮崎県小林市大字細野字前ノ原	45205				19900508-19900601	1000 m ²	
かわく	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45205				19900508-19900601	1000 m ²	
大觀倉	宮崎県延岡市高原町大字大觀倉	45361				19970716-19980330	5840 m ²	
かわく	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45361				19981026-19990331	5015 m ²	
大觀倉 第2次	宮崎県延岡市高原町大字大觀倉	45361				19950619-19950804	670 m ²	
かわく	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45361				19900508-19900601	100 m ²	
大谷	宮崎県延岡市高原町大字大字大谷	45361				19900508-19900601	100 m ²	
たせごとく	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45361				19900508-19900601	100 m ²	
鳥越前	宮崎県延岡市高崎町大字前田	45361				19900508-19900601	100 m ²	
かとうじんじんじん	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45202				19900716-19900816	1000 m ²	
妙見原第2	宮崎県都城市下水波町3377-11ほか	45202				19910830-19911022	1200 m ²	
くらさわ	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45202				19920512-19920918/19921019/19921219/1993012/19920617/19930918	1300 m ² /不明/1800 m ²	
倉内	宮崎県都城市下水波町3355ほか	45202				19990614-19990625	885 m ²	
くわいせ	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45202				19880606-19880702	800 m ²	
築池	宮崎県都城市下水波町1713ほか	45202				19920601-19921001	1300 m ²	
くわいせ	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45202				19890425/19890907/19891107-19891116	1500 m ²	
楠木原	宮崎県都城市塙田甲子原	45204				19870809-		
かきじょり	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45204				19871009/19881017-	1500 m ²	
築ヶ城	宮崎県都城市大字吉野字築ヶ城	45204				19890131		
かきのう	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45204				19890815-19891101	2000 m ²	
坂ノ上	宮崎県都城市下水波町1713ほか	45204						
かみは	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45204						
前畠	宮崎県都城市大字大塙字前畠	45204						
こうじのまち	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45207						
唐人町	宮崎県串間市大字西方字人町	45207						
かみのまち	みやざきけんのゆうじゆうじめいわくおみみさびば	45207						
別府ノ木	宮崎県串間市大字西方字別府ノ木	45207						

所蔵道路名	種別	主な時代	主な遺構・遺物
地蔵ヶ森遺跡	散布地	旧石器/縄文/古墳	散布地-旧石器-遺構なし-ナイフ形石器+先鋒状石器/縄文-鬼石遺構-圓土器/古墳-些穴建物跡-土師器
柱遺跡	集落	弥生/古墳	集落-弥生-古墳-土坑-遺構遺構+ビット群-弥生土器+土師器+石器
高平塚跡	福跡	中世	城跡-中世-曲輪-空堀+ビット-土坑-遺構遺構+擬立柱建物跡-土師器+青磁+白磁+青花磁+東孫孫孫志志跡-密室後便
野谷遺跡	散布地/集落	後期旧石器/縄文/弥生/古墳/古代/中世/近世	散布地-後期旧石器-遺構なし-角鉗狀石器部/縄文-鬼石遺構なし-鬼石川式後孔-無頭目癸夷文深鉢片+打製石斧+佈石-遺構なし-中儀式骨刀+打製石斧/古墳-遺構なし-土師質土器/集落-中世-柱穴-石柱状遺構-圓状遺構+土坑-無頭目+白磁+青磁+土器/近世-骨+遺構なし-肥前向賀器
大戸ノ口第3号跡	散布地	旧石器	散布地-旧石器-遺構なし-二次加工片+石核
瀬防道路	散布地/墓場/集落	旧石器/古墳/古代	散布地-旧石器-遺構なし-石器/埴生-西都原古墳-21号埴生洞-須恵器-古代-柱穴-遺構遺構-平丘+丸丘-須恵器+船形罐+土師器
先田遺跡	散布地	近世/近代	散布地-近世-遺構遺構-陶器器-土師質土器/近代-遺構遺構-陶器器
上沼知野遺跡	散布地/集落	縄文/弥生/近世	散布地-縄文-遺構なし-圓土器/古代-遺構なし-石器-時期不明-土坑-遺物なし-鬼石-弥生時代中世-土坑-蟹穴建物跡-弥生土器/近世-遺構遺構-鬼石遺構+擬立柱建物跡-須摩内向器-肥前奈良付石-鹿戸美濃系稻庭器/京焼
竹之下遺跡	集落/墓	古墳/近世	集落-古墳-蟹穴建物跡-須志跡-土師器/墓-近世-墓坑-銅鏡
樺原昔治跡	集落	弥生後期/中世/時期不明	鬼石-弥生後期-蟹穴状遺構-弥生土器/古代-遺構なし-須志跡高台付境/中世-遺構遺構-土師器皿-櫛状土器/時期不明-土器皿
多宝今遺跡	集落	古墳後期/古代/中世	集落-古墳後期-蟹穴建物跡-土坑-蟹穴状遺構-須志跡-土師器/古代-後土-内黒土器/中世-遺構なし-土師皿
大庭3号墳	墳墓/散布地	古墳/古代/中世	墳墓-古墳-岡原-扇形埴輪+土師器/散布地-古代-中世-遺構なし-土師皿
青木遺跡	散布地	古墳/平安/時期不明	散布地-縄文-遺構なし-圓土器/古墳-遺構なし-鬼石器+土師器/平安-遺構なし-布吉底土器+土師器/近世-遺構なし-陶器器+土人形片/時期不明-土器-遺物なし
生駒道路	散布地	縄文	散布地-縄文-鬼石遺構-圓土器/石皿片/万台石/磨き石/石器/打製石器+貝形石器+樹形石器+尖頭状石器/石核+二次加工片+調製剥片
神の原遺跡	散布地	古墳後期	古墳後期-遺構なし-成川式土器+台石/磨製石器/時期不明-遺構遺構-土坑-遺物なし
前ノ原遺跡	集落	古墳中期/古代	鬼石-古墳中期-蟹穴建物跡-須志器+土器/古代-遺構なし-土師器+墨書き器
大庭曾吉跡	散布地	縄文/弥生/古墳/古代	散布地-縄文-遺構なし-圓土器/弥生-遺構なし-弥生土器/古墳-遺構なし-土師器-須志跡/古代-土坑-隔し穴状遺構-保化椎光/時期不明-遺構遺構
大庭曾(第2次)遺跡	集落/散布地	縄文/弥生/古代/中世	鬼石-弥生-蟹穴建物跡-弥生土器+石包/古代-隔穴状遺構+擬立柱建物跡-土師質土器/散布地-縄文-遺構なし-圓土器/石器
大谷遺跡	集落/生糞	縄文/古墳後期~平安	鬼石-縄文-蟹穴建物跡-配石遺構-圓土器片/石皿/台石/打製石器/磨製石片/磨石+スケイバード-石核+片石方-二次加工片+磨製石器/石皿/石包/打製石器/磨製石片/磨石+石核/石器/石核+打製石器+貝形石器+砾石/古墳後期~平安-土坑-祇園山-須志跡
鳥越前遺跡	散布地	縄文後~紀元/弥生/古墳/中世	散布地-縄文後~紀元-遺構なし-圓土器/縄文後期-土坑-剪状土坑-圓土器/弥生-遺構なし-土器片/古墳-遺構遺構-遺物なし/中世-遺構なし-天日自照
妙見原第2遺跡	集落	古墳終末期	鬼石-古墳終末期-蟹穴建物跡-土坑+小穴-遺構遺構-土師器+須志器
合内遺跡	集落	古墳終末期	鬼石-古墳終末期-蟹穴建物跡-土坑+小穴-土師器+須志器
瓢池遺跡	墳墓/墓場	弥生後期/古墳	鬼石-弥生後期-蟹穴建物跡-弥生土器+石包/墳墓-古墳-地下式横穴墓+馬鹿葬土器-土師器+須志器+劍+刀+铁鏃+簪+金具+鏡+玉器+馬頭
柳木原遺跡	墓跡	近世	墓跡-近世-陪葬-物語-平丘+枕丘+丸丘+籽平丘+斜丘+段丘-向御冢
稚ヶ城	散布地/福跡	縄文/中世	散布地縄文早周-遺構なし-貝冠土器+押型土器+圓状撫手土器/城跡-中世-擬立柱建物跡+櫻井+方形土坑-土師器小豆+白磁+青磁+青洋+灰釉器+圓形便器
坂ノ上遺跡	集落	縄文	鬼石-縄文早期-蟹穴建物跡-鬼石遺構-圓土器/古田式-石板式土器+押型土器+圓盤形土器品+磨製石片+磨石+打製石器
前原遺跡	集落/墓場	縄文中期後~近世	鬼石-縄文早期-蟹穴建物跡-土坑+鬼石遺構-圓土器/墓場-中世後~近世-墓群跡-櫻井遺跡-土师器+刀+铁鏃+簪+金具+鏡+玉器
菅人原遺跡	散布地/墓場/荒地	弥生早期~前期/古墳前期/中世/近世	散布地-弥生早期~前期-遺構なし-弥生土器+扁平打製石器/鬼石-古墳前期-蟹穴建物跡-土师器/中世-柱穴式-高台付石面-鬼石器+鬼石-鬼石器+打製石器
別府ノ木遺跡	散布地	縄文/弥生/古墳/中世	散布地-縄文-遺構なし-圓土器/弥生-遺構なし-弥生土器/古墳-遺構なし-須志器/中世-遺構なし-陶器器/時期不明-柱穴-土坑-遺構遺構-遺物なし

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 232 集

置県 130 年記念
埋蔵文化財資料活用推進事業報告書

2014 年 3 月 25 日

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター
〒 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印 刷 有限会社 宮崎新生社印刷
〒 880-0124 宮崎市新名爪中牟田 766
TEL 0985-39-6148 FAX 0985-39-4240
